特65
380

名種中學漢文讀本

字句精解

早稻田大學講師牧野謙次郎先生
回漢文普及會松平康國先生監修
纂編

四年之部
五年
朝沼
42 7 15
交內

本書解釋の教科書

秋山四郎編　第一訂正　**漢文教科書**

同　村豐校補　**新撰漢文讀本**

同　西村豐校補　清水平一郎編纂　**漢文教科書**

菅野道明校訂　國語漢文研究會編輯　**漢文新讀本**

澁谷啓藏校訂　國語漢文會編輯　**新編漢文教科書**

深井鑑一郎訂正　弘文館編纂　**新編漢文讀本**

新編　**漢文教科書**

訂正　**中學漢文讀本**

例言

一　凡そ中學の學科中漢文ほど自修に不便なるはなく又漢文教科書ほど研究に困難なるはなし是れ適當の機關なき爲にして本書は此缺典を補はんが爲に編纂せられたる者なり

一　中學漢文教科書は別に難字句を解釋せる參考書なきにあらざるも此れ教師に限て閲讀を得る者にして生徒は何等自修の機關を有ずるなし其の弊遂に自暴自棄に陷り今日上下を通じて漢文學智識缺乏の嘆息を致せり本會斯の編纂は聊か其の弊害を救はんが爲めに企てたり

一　本書に收むる漢文讀本は現今全國の中學校に於て最も多く採用せらるゝ教科書七種を擇びたる者にして其所載の篇題は殆んど一として漏す所なし

一　右七種の外と雖も苟も中學程度に相當せる漢文教科書に收錄する文章は十中の九まで本書に於て之を檢索するを得べし

一　凡そ學生の解し難かるべしと思はるゝ字句は原文の順序に從ひ一々丁寧に解釋を施したるが故に若し接續して看るときは殆ど全文の解釋を得ると異ることなし

一　現今漢文讀本中讀方點附の謬れるより原文の意に大なる間違を來たす者及び原

文の訛誤を承けながら轉載して讀者の誤解を重ぬる者若くは杜撰にして誤謬ある文章を掲げ世の子弟を誤る恐ある者は明白に之を指摘し教師生徒をして其弊害を免れしめたり

一　本書に詩の解釋を除きし所以は他日官職の説明と共に別に一冊子として刊行すべき豫定なればなり

一　索引は「五十音」別と務科書別との二樣となし前者は題目の頭字なる「あいうえお」の順に依り後者は原書編次の次第を逐て配列せり故に撿出に苦むが如きことなし但編纂の便宜により、〔を〕を〔お〕に合はせ、〔ゐ〕を〔い〕に、〔ゑ〕を〔え〕に合はしたり

一　題目の頭字とは譬ば與友人書に在ては與（あたゆる）の「あ」を謂ふ尚、題字の發音に疑惑を防がんが爲めに、別に七種教科書毎巻の目錄に就き索引を付せり

一　用語及び假名遣其他校正の疎漏なる點は再版の時を待て訂正すべし

明治四十二年七月

漢文普及會識るす

文體說要

凡そ文章概別すれば、叙事議論の二大門に過ぎされとも、更に精細に區分すれば、又各其の體制の同からさるあり、今や中學讀本に載せある文章に就き、聊か文體の大要を說述し以て研鑽の一助となす、善く玩索し本文に參照比覽すれば、獨り其の講讀の便に資するのみならす、又作文の時に當りて裨益あるべし、但其の順序は、本と見るに隨ひ錄し、未た別に次第するに暇あらす、讀者之を諒せよ、

【詔】　昭なり、告なり、昭に告くる義にて、古代は周禮に詔（ツク）王（ニ）莊子に詔（ツク）世（ニ）とあるが如く、上下通用すれども、秦の始皇より、天子の令に限り、詔と云ふ、

【勅】　亦勅に作る、飾なり、戒飾の義にて、天子より群下を警戒整飾する意なり、大概、詔は大事に用ひ、勅は平生に用ふるを恒例とせり、

【國書】　一國と一國との主權者間に、取り遣りする文書なり、支那にては、左傳にある晉の呂相が秦に贈りし絶交書の如きは、有名なる文なり、

【照會】　上司より下司へ移す文書なれども今は諸司互に、聞き合せをなす文を云ふ、

【論】　命を本字となす、綸なり、綸は寄り絲にて、衆絲を寄せ合はすより、文章上多くの言辭を以て、或る道理を、各方面より觀察して、衆絲を寄

り合はすが如くなれば、命に言の字を加へて論と名つく、故に論文は辭理井然として、主旨の一貫せるを善とす、又題して某論と云ひ、論某と云ふは、作者の隨意にして、其の間に異議あらず、

【說】論と大差なし但、說は解述の義にて、義理を解釋し、已が意を述ふるより說と名つく、文章は詳贍を以て貴とす、

【解】釋なり、人の疑あるに因りて、解釋をなすより解と名つく、故に疑惑を辯釋し、紛雜を解決するを主とす、解某と云ひ、某解と云ふは、亦作者の隨意なり、

【辯】判別なり、言行の是非眞僞を、大義を以て判定するより辯と名つく、故に至當不易の理に基つき、反復曲折の辭を以て發するを上乘となす、辯某と云ひ某辨と云ふは、亦作者の隨意なり、

【喩】比喩の義にて、眼前卑近なる物事を假りて、已れが觀感を述べ、以て幽玄なる哲理又は複雜なる世事に比喩して曉り易く述ふる者なり、莊子に毎下（ニルイヨイヨ）愈況（ラフ）と云ふことあり、卑喩なる事物に就きて譬ふる程、道理は反て愈々明かなるものなり、

【書】舒なり、言語を舒布する義にして、親知の間に往復問答の爲めに作くる文なり、叙事文と議論文と相雜はれども、議論が多く且主となる者なり、

【尺牘】又、手簡と云ふ、我か邦の日用手紙なり、大體書の簡略なる者なれども、叙事文に屬するが多し、文は務めて簡單明瞭なるを善とす、

【序】緒なり、亦叙に作る、善く事理を叙し、次第順序あること、絲の緒あるが如きより序と名つく、某叙と云ひ、叙某と云ふは、作者の隨意なり、某序と云ひ、序某と云ふは、作者の人物竝に著書の大體を世に紹介するを以て主とす、著者自から作くるときは、自序と云ふ、送序なり、但、書序送序會序壽序等の細別あり、書序は書籍の序にして、著者の人物竝に著書の大體を世に紹介するを以て主とす、著者自から作くるときは、自序と云ふ、送序は、人の他處へ出游若くは赴任をなすを送る序なり、其の特に言を以て相誡むるは、多く贈序と云ふ、會序は宴會の時、催せる詩文等を蒐集せる序なり、壽序は、七十若くは八十等年賀の序なり、文體は叙事を主とするを正體とし、議論を主とするを變體とすれとも、多くは兩者折衷の作を用ゆ、

【引】序引と熟語になりたるが如く、大略序と同くして、稍〻（ヤヽ）短簡なりとす、引の名義は、何に據りしか未た確ならす、宋の蘇老泉（東坡の父）の父の名が序なれば、蘇氏一門序を諱みて、（支那には君父の本名を諱むを禮法となす）引の字に改めしより始まるとの說あれども、其の以前、唐代に柳子厚の霹靂琴贊引又、劉禹錫の送元暠南游詩引の如きあれば、未た信すべからす、

【記】記は疏なり、一一分別して記（シル）すより名つく、故に其の文、叙事を主となすべきに、後世反て論議を以て雜るは、變體なりと譏る者あれとも、宋の歐陽修蘇東坡等の諸

記、既に議論の作寝ゝ多し、而して其の中、又、堂記游記物記の細別あり、堂記は家屋に關する記にして、游記は游覽の記なり、物記は物件の記なり、今姑く中學讀本に就て云へば、柳宗元の鈷鉧潭記は游記にして、正體なり、范仲淹の岳陽樓記は、堂記にして變體たり、歐陽修の王彥章畫像記は、物記にして敘論參用するが如し、

【紀事】「附、逸事」凡て事物を敘述するは皆、紀事なれとも、更に文體上、紀事と云へるは、凡そ天下に有りし事蹟を見聞するに隨ひ、紀錄して史家の採擇に備へ、或は史籍の遺亡を補ふ者は、概括して紀事と云ふ、題して紀某と云ひ、紀某事ト云ヒ、或は書某事と云ひ、或は某逸事と云ひ、或は單に某(例せは屋島之役とか又は楠公訣子とかの類)と書するが如き皆、紀事に屬するが、古來の定例たり、

【傳】事迹を記載して、後世に傳ふるより傳と名つく、漢ノ司馬遷史記を撰し、個人の始終を記述し、列傳を創めしより、後世文士が、民間に隱れたる賢士若くは奇人の行事にて傳ふへきを、其の體に倣ひ記述し、傳の文體興れり、或は作者が寓意的に述べ、又滑稽的に作くる者もありて、史傳家傳托傳假傳の稱起る、卽ち史記列傳の如きは、史傳にして、中學讀本にある賴山陽の高山彥九郎傳の如きは、家傳なり、柳子厚の種樹郭橐駝傳の如きは、托傳なり、又山陽の蹲鴟子傳の如きは、假傳なり、

【策】謀なり、時務に對し、謀略を述ふるより名つく、(甲)制策あり、天子の親く制(天子の命を制と云ふ)して問ふに、對ふるなり、(乙)試策あり、有司の士を試むる策に對ふるなり、(丙)進策あり、上より命なきも、作者自から策を著はし、上進するなり、策は治術に練達するを上とし、文章の工は次ぎなれとも、治術文章、並に長するを通才と稱す、讀本にある蘇東坡の策略の如きは、丙種に屬す、又上に進めざるも私に擬して作るあり之を擬策と云ふ、

【表】標なり明なり、事物の緒を標著明白にして、上に告ぐるより名つく、古代は君主に獻言するは、皆、上書と稱するを常となせしに、漢代に至り、人臣より陛下へ陳請する書を、特に表と云ふ、文體は散文なり、四六(聲律韻文)あり、中學讀本にある諸葛亮が出師表は散文なり、李密が陳情書は、全く四六と云ふにあらされとも、頗る對句に傾き、純然たる古文散文にはあらす、尙ほ我が邦近時凡そ公私を問はす、自から辭職の書を出たすを、辭表を出たすと云へるは大に謬れり、前述の如く、表は皇帝に上るに限りて、稱する文章の名なり、

【文】凡そ文章なれは、皆之を文と謂ふへきに、特に獨り文と云へる一體あり、或は鬼神に盟ひ、或は民人を諷するに用ゆ、文體は韻語あり、散文あり、又屈原の楚辭に倣ひて、長短句に兮の字を間へ用ゆるあり、四六體にして專ら對句を用ふるあり各樣一ならす、

【辭】亦韻文の一なり、楚の屈原離騷を作り、其の體、詩文の間に出入し、其の辭、楚聲（楚は南方にありて語音自から北方諸國と同からず）に倚り、一種の文章を創めしより、後人楚辭と稱し、遂に辭賦の文あり、情を寄すること深く、辭寬緩にして、諷誦すべきを貴ぶ。

【賦】韻文の一體なり、賦は敷なり、其の事物を敷陳鋪張して云へるより名つく、富麗の辭を以て、炫燿（ゲン）の觀を極め、而も或は諷諫を寓せ、或は勸奬を寄せ、禮義法軌に逸せざるを要す、中學讀本にある杜牧之の阿房宮賦の如きは、未だ至れる者にあらざれとも、亦以て其の一班を窺ふへし、蘇東坡が前後赤壁賦は、名文なれとも、古人既に前賦は論なり後賦は記なり、俱に賦にあらすと譏れり、要するに蘇賦は賦の變則にして、正則の者にあらず。

【銘】支那にありて、最も古き韻文なり、銘は名なり、名狀して金屬の器に刻するより名く、或は功德を稱贊し、或は警戒の辭を述ぶ、大抵四字を以て、一句とせる短文なり、（長短句もあれども）讀本にある蘇東坡の三槐堂銘は、前に序文あれは、長きに似たれとも、序と銘とは、宜く區別して看るへし、

【碑】字書に碑は豎石也とあり、文を石に刻し立つるより、碑と名く、もと祭祀に供する犧牲を繫く豎石（クヒノイシ）を碑と云ふ（禮記祭義篇に見ゆ）葬式に、棹の前後四角に樹て、其中を穿ち、轆轤（ロクロ）にて絆（ツナ）を貫き、以て棺を下たす木あり、其の形碑に似たるより亦碑と云ふ、西漢の時、死者の功美を追述し、其の上に書し、哀悼の意を表せしより、遂に石碑の制興れりと云ふ、去れども、秦の始皇既に石を泰山に立て功德を頌せし事、史記に見へたれは、墓碑は西漢に始まるとなすへきも、碑文の始まりは、亦其れ以前の遠きにあるなるへし、文體は序と銘より成り、（甲）專ら叙事を主とするあり（乙）議論を主とするあり（丙）叙論を參用するあり甲を正體とし、乙を變體とし、丙を變而不失其正とす、讀本にある柳子厚箕子廟碑、蘇東坡の潮州韓文公廟碑の如きは皆變體なり、

【墓碑銘】（附墓誌銘）碑文の一にして、亦同く文と銘とを以て成り、面して其の銘、或は之を辭と云ひ、或は系と云ひ、頌と云ふ、要するに皆、銘なり、文は其人の世系・名字・爵里・履歷・行蹟・壽年卒葬の月日と、其の子孫の大略を述ふ、此又叙事を主とすると、議論を間ゆるとの正變二體あり、重野成齋の橋本景岳墓碑の如きは正體なり、森田節齋の楠左衞門尉誓塚碑（俱に中學讀本にあり）の如きは、變體となす、又墓誌銘と云へる文あり、此れは大體墓碑と同しきも、較簡省にして、墓中へ埋藏し以て他日萬一變に備ふるなり、讀本にある韓退之の柳子厚墓誌銘の如きは、中間に少く議論を挿めども、全篇より云へは、正體なり、

【墓表】墓所に立て、文を刻ま表明するより名つく、東漢の時より始まれり、文體は墓

碑と同し、但墓碑は、もと官位ある者に稱し、墓表は有官無官の別なく、稱するを得る規定にてあれと、今は必らしも拘らす、又墓碑は大抵銘辭あれとも、墓表は「文體明辯」に據るも、宋の歐陽修が石曼卿墓表等三四種を外、多くは銘辭あらす、而して體に正變の二種あるは又墓碑と同し、

【紀行】遊記の一體にして、其人日々の行程、及旅中見聞の事を、漫筆的に簡單に記する文なり、宋の歐陽修の于役志、陸游の入蜀記、范成大の吳船錄の如きあり、後人倣ふて作る者頗る衆し、我か邦漢文家にありては、讀本にある物徂徠の峽紀行、中佐藤一齋の日光山行記、等尤も著はる、

【贊】稱美なり、其の類三種あり、(甲)雜贊は、褒美の意專らにして、人物文章書畫の諸贊是れなり、(乙)哀贊は、人の死歿を哀みて、其の德を述へて稱贊するなり、(丙)史贊は褒貶の詞を兼れ用ゆる史記の諸贊の如き是れなり、讀本中にある其の孔子世家贊は、丙種にして、賴山陽の自像畫贊は甲種なり、凡そ贊文は、肅緊にして曠況ならす柳揚感慨の致あるを要す、而して史記贊を除き、餘は大抵有韻の文とす、

【頌】容なり、專ら盛德を美しく形容し、成功を稱贊して、鬼神に告くるより頌と名つく、後世の作に至りては、必しも盡く神に告けす、或はたゞ人の美善を形容するに止まるもあり、其の詞、或は散文を用ゐ或は韻語を用ゆ、讀本にある韓退之の伯夷頌

は、散文無韻なり、

【箴(シン)】「附、規」亦、韻文なり、箴は誡なり、醫者の箴石(ハリ)を以て、病を刺すが如く、諷刺して其の過失を救ふより、箴と名づく、而して箴は、もと君と己れとの得失を誡むるに稱す、其の同僚間の行誼を誡むるは、規と稱し、箴と云はざるが、古制なれども、宋の程伊川視聽言動箴の如きは、既に然らざるに似たり、後世に至り、官箴私箴あり、官箴は居官の箴にして、私箴は私人の箴なり、卽ち伊川の作は、後者に屬す、皆韻語を用ゐ義理を述べ、嗜欲を誡むるを主とす、讀本にある中村敬宇の謹言箴は、亦私箴なり、

【祭文】祭奠に用ゆる文なり、兼て死者の言行を稱讃し、哀悼の意を寓して作る、其の辭散文あり韻語あり、儷語(對句)ありて、各體一ならざれども、韻語を用ゆるが正體たり、文章は務くして且哀きを宜とす、徒に華麗の辭を用ひて、誠實の心に乏く、情思湮晦にして、明暢ならざるは、共に未だ工となさず、

【弔文】文體は祭文と同じ、もと死を弔する辭なれども、古人の或は隱貴にして身を亡ぼし、或は猶(ケシ)忽にて道に乖き、或は志ありて時に得ず、或は美才にして過累あるに對し、後人文辭を以ち、追て之を慰さむるも、並に名けて弔文と云ふ、讀本にある王守仁の瘞(エイ)旅文亦此の類なり、

【題跋】「附、書、後、及、讀」書冊の後に記す文なり、凡そ書籍前に序文あり、後に後序ありて盡くせりと云へども、其の後、覽者或は人の請求により、或は自から所感ありて、復詞を撰し、其の末簡に綴るを、總て題跋と謂ふ、題は締なり、其の義を審締するなり、跋は本なり、文に因りて本を見はすなり、書後は其の後に語を書すなり、讀は其の文を讀むに因りて記すなり、又、王安石の讀孟嘗君傳の如きは即ち是なり、而して其の詞、古今を考證し、疑義を釋し、誤謬を訂し、善惡得失を衰貶議論するは、序引と異ならざれども、專ら簡勁を主となすは、又頗る同からず、

【話】「附、條」談話を錄する意にて、話と名づく、又、錄と云ふ、支那にありて、殆ど言文一致體の文とも稱すべきは、宋代より朱子語錄の如き、明の王陽明の傳習錄の如きあり、然れども雅文を以て、談話を錄するを者、陸放翁の老學庵筆記、嚴滄浪の滄浪詩話の如き、亦尠からず、我が邦菊地五山に五山堂詩話あり、齋藤拙堂に拙堂文話あるが如きは、皆其談話の重なる者を、以て書名となせり、

【原】原は源と同じ、事物の本源を推し、其の委曲を究め、以て其の理を明にするを主とするより原と名く、唐の韓退之原道原毀等五原の著あり、而して原道最も著はる、文體明辯は、原は論の流別なりと云ふて、別に一體を立つれども、我が邦物徂徠は、

原も亦論文にして別體にあらずとなせり、

【對】問對と云へる文章の一體にして、文人假托の詞なり、乃ち故らに事物に疏き、問答の詞を設けて、其の本志を見はし、反復縱橫して、作者が憤懣の思を舒べ、平生の意慮を通ずるを主とす、

【訓令】此は我か邦今世に始まりし名目にして、漢文には訓令の稱なし、明時代より大概、上司より下へ降たす公文を、帖と云ひ、照會と云ひ劄付と云ひ案驗と云ふ、又下より上司へ達するを呈と云ひ、牒呈と云ひ、上下通用するを、揭帖と云ふ、讀本にある文部大臣訓令の如きは、帖、照會の類なり、

中學漢文讀本目錄（四年之部）

あいうえお順

燕昭王招賢士　十八史略　八
袁州學記　李觀　九

お之部

大石良雄（八）　青山延光　一〇
歐陽修等爲諫官　十八史略　一四
大友皇子　懷風藻　一四
甕江文槁序　三島中洲　一四
送溫處士赴河陽軍序　韓退之　一五
送末廣子儉之歐州序　信夫恕軒　一六
送石處士序　韓退之　一六
送石昌言爲北便引　蘇老泉　一七
送東陽馬生序　宋濂　一七
送董邵南序　韓退之　一七
送薛存義之任序　柳宗元　一八
送賴承緒序　長野確　一八
送岡山縣近衞將卒出征序　三島毅　一九

か之部

愛蓮說　周叔茂　一
晰文法　齋藤拙堂　一
赤穗義士報讎　青山佩弦齋　二
與湖玄岱書　梁田蛻巖　二
與李公擇　蘇軾　三
與李鴻章書　竹添井井　三
遊鞍馬山　中村敬宇　四
新建新田公祠堂記　芳野金陵　四

き之部

戒兄子嚴敎書　後漢書　五
隱趣好事　服部南郭　五

え之部

遨旅文　王陽明　七
衞零公夫人　劉向　八

贈本社佛國博覽會序　鷲巢之　二一〇
送楊少伊序　王陽明　二一一
贈周瑩歸省叙

か之部

格言（六）　二一三
改過　澁谷牀山　二一五
還附遼東半島詔　二六
韓信傳　小學　二六
嘉言二則　鄭元慶　二六
岳飛（三）　魏東湯　二八
學說贈業徂來　菲仲蛟　二九
岳陽樓記　佛田重禮　三〇
賀並皇太子表　重野安繹　三〇
讓關隨幸記

き之部

汲黯簡靖　資治通鑑　三二
季札掛劍　家求　三三
記承天寺夜遊　蘇軾　三三
記峨眉松　周鴻亮　三四
公信直諫　重野成齋　三四

本村貞行傳　青山佩弦齋　三四
近古史談引　鹽谷宕陰　三四
漁父辭　細振　三四
擬褒崇岳忠武王議　魏站齋　三五

く之部

黃州快哉亭記　蘇轍　三六
華山帝詔求直言　澁谷牀山　三六
管鮑之交　史記　三六
勸學　齋藤拙堂　三八
下岐蘇川　十八史略　一五五
和氏璧（藺相如）

け之部

教條示場諸生　王陽明　三九
鞭笞　三九
荊軻入秦　十八史略　三九

こ之部

請襲贈賴襄上書　龜谷省軒　四〇
孔子　十八史略　四四
孔子世家贊　十八史略　四二

答曾子固　王安石　四二
答蘇武書（三）　李陵　四三
答毛憲副書　王陽明　四六
國書北清擾亂清帝致於我天皇　四七
國書我天皇覆於清帝　四八
臨碓氷嶺過淺間山　安積良齋　四八
昆陽之戰　十八史略　四九
後赤壁賦　蘇東坡　四九
吳楚七國之反　十八史略　五〇
吳越之爭　十八史略　五〇
古岳庵記　森田節齋　五〇

さ之部

齊院公主　服部南郭　五一
貞時行脚　同　五二
三尉墓記　安井息軒　五二
雜說（四）　韓退之　五三
小瀑布記　中村敬宇　五三
諭陸海軍人勅　澁谷牀山　五三

し之部

士規七則　吉田矩方　五四
朱雲請斬佞臣　資治通鑑　五五
諷將軍　史記　五六
秦宓論天　蒙求　五七
支那歷朝興亡　支那通史　五七
照會丁汝昌咨日本海軍中將　五七
伊藤祐亭　五八
照會覆清國丁督　五八
震長四知　蒙求　五八
諸葛亮卒　十八史略　五八
上諭十則　六〇
書海國志後　安井息軒　六一
商鞅　十八史略　六一
生於憂患死於安樂　孟子　六一
書戴崇畫牛（練習）　蘇軾　六二
借松亭記　安積良齋　六二
謝枋得死節　通鑑綱目　六二
縱囚論　歐陽修　六三
春夜宴桃李園序　阪谷朗廬　六四
春窓記　司馬光　六四
詩話　十八史略　六五
清國皇帝宣戰詔
信陵君救趙

白像贊二首　賴山陽　六六
熟語　姜宸英　六六
除芝仙出塞詩序

す之部

出師表　諸葛孔明　六八
睢陽城嬰守　司馬光　七〇

せ之部

西俗一　西俗雜誌　七四
齊桓公用管仲　十八史略　同
井陘口之戰　同
淅西三瀑布記　袁枚　七一
赤壁之戰　十八史略　七六
責善　七八
先秦學風　柳宗元　一二
澶淵之役　十八史略　七九
前赤壁賦　蘇東坡　八一
晰文法　齋藤拙堂　一

そ之部

澡泉餘事小引　重野成齋　八二

た之部

曾文正公神道碑二　李鴻章　八二
蘇　秦　十八史略　八三
蘇軾被貶　十八史略　八三
曹彬伐江南　十八史略　八四
蘇　武　班　固　八四
蘇秦說六國　通鑑綱要　八五
續雪花圖說　佐藤一齋　八五

ち之部

高山彥九郎傳（二）　賴山陽　八六
上高宋封事　朱　胡　八七
上梅直講書　蘇東坡　八九
玉川網香魚記　三島中洲　九〇
大塔宮南走　大日本史　九〇
題蘭相如奉璧圖　安井息軒　九一
竹廬記　中村敬宇　九二
中尊寺　安井息軒　九二
中東戰紀本末初編叙　巽心銘　九二
張良　十八史略　九三
逼錯論　坡東蘇　九三

陳平　十八史略　九三
陳情表　李　密　九四
忠孝一本　藤田東湖　九七
除芝仙出塞詩序

つ之部

月瀨圖卷跋　龜谷省軒　九九

て之部

展喜卻齊師　左　傳　一〇〇

と之部

鼈窩記　方苞孺　一〇〇
唐太宗（三）　十八史略　一〇一
唐睢不辱使命　戰國策　一〇三
東北史序　龜谷省軒　一〇三
唐太宗論治通　十八史略　一〇三
唐莊宗遇弒　十八史略　一〇三
桐葉封弟辯　柳子厚　一〇四
讀書法　魏東房　一〇四

な之部

*楠氏論　賴山陽　一〇六

に之部

憎蒼蠅賦　歐陽修　一〇九
二程先生　十八史略　一〇九
日本刀說　阪田丈平　一一〇
日本漢學（三）　賓遨憲　一一一
日本之西學　賓遨憲　一一三

の之部

野矢蓼園傳　土屋鳳洲　一一四

は之部

白石新井先生傳　板倉勝明　一一五
白石先生年譜序　中村敬宇　一一六
伯夷頌　韓退之　一一六
伯牙絕絃　蒙求　一一六
橘本景岳之碑（三）　重野安繹　一一六
林子平傳　齋藤竹堂　一一八
賣柑者言　劉基　一一九
馬援評公孫述先武　十八史略　一二〇
巴里新繁華　王紫詮　一二〇

梅谿遊記　齋藤拙堂　一一九
馬援戒兄子　後漢書　五

ひ之部

百科全書序　中村敬宇　一二三
淝水戰　十八史略　一二三
閔損垂泣　叢求　一二三

ふ之部

普法戰紀序　陳榘士　一二四
富川攬勝　依田學海　一二五
撫州顏魯公祠堂記　曾鞏　一二六
文天祥不屈　宋史紀事本末　一二七
文王武王　十八史略　一二八
文學消人猜疑　大槻磐溪　一二九
蚊對　方孝孺　一二九
武昌九曲亭記　酈輞　一三一
刎頸交（藺相如）　十八史略　一五五

へ之部

卞和　一三一

ほ之部

捕蛇者說　柳宗元　一三三
朋黨論　歐陽修　一三一
本邦漢文沿革（二）　齋藤拙堂　一三四
奉使倫敦記　黎庶昌　一三五

ま之部

咳宗偵羅馬　齋藤竹堂　一三七
祭清國合肥李公文　鹽谷青山　一三七
*先徙如　十八史略　一四八

む之部

無聲堂記　鹽谷青山　一三八

め之部

明治孝節錄序　元田東野　一一九

も之部

孟嘗君　十八史略　一四一
木假山記　蘇老泉　一四一
森田節齋藤井竹外　依田學海　一四一

や之部

譯日本皇帝宣戰詔　伊致奧　一四三
夜遊孤山記　邵長蘅　一四三
揚修捷對　叢求　一四四

よ之部

幼學綱要序　元田永孚　一四五
能不欺而已　劉氏人譜　一四五
音問緒方（三）　岡千仞　一四五
讓孟嘗君傳　王崇祖　一四六
音隱賊　千代嵩藤　一四六

り之部

隆中之對　司馬光　一五〇
留侯論　蘇東坡　一五〇

柳氏家訓　一五一
陸宣公全集序　佐藤牧山　一五二
呂子家訓　朱熹　一五三
李氏山房藏書記　蘇東坡　一五四
立志（練習）　劉德鎌　一五四
呂海論王安石　十八史略　一五四
藺相如論（和氏璧、刎頸交）　一五五

れ之部

帶官傳敘論　歐陽修　一五七
（練習）警讀書無序次　劉宗周　一五七

ろ之部

論信陵君　長野豐山　一五八
論鴻門之會　彭玉麟　一五八
倫敦繁盛　薛福成　一五九

わ之部

和氣清麻呂論　賴山陽　一六〇
王彥章傳　五代史　一六〇
王敦之反　十八史略　一六〇

中學漢文讀本目錄（五年之部）（あいうえお順）

あ之部

與孟尚書書　韓退之　一六三
阿房宮賦　杜牧　一六四

い之部

伊尹論　蘇東坡　一六八
至小邱西小石潭記　柳宗元　一六八
有待櫳記　安井息軒　一六九
諫伐匈奴書　主父偃　一六九
有齊人一妻一妾而處者（齊人驕妻妾）　*孟子　一三〇

う之部

魚我所欲　孟子　一七一

え之部

越行成於吳　國語　一九六

袁家渴記　柳宗元　一九六
偃虹隄記　歐陽修　一九一

お之部

怕後生笑　齊藤拙堂　一七二
送李愿歸盤谷序　韓退之　一七二
送寺田望南爲曾赴四京序重野成齋　一七三
送洋行諸君序　阪谷朗廬　一七三

か之部

黠鼠賦　蘇東坡　一七五
佳字妙句　齊藤拙堂　一七五
格言（練習）　一七六
格言三則　一七六
漢三傑（練習）　十八史略　一七六
峽中紀行　荻生徂來　一七六
韓信破趙　史記　一七七
韓愈諫迎佛骨　綱鑑易知錄　一七八

岳飛　通鑑綱目　一七八
學問思辨行　中庸　一七九
鱷魚　韓退之　一七九

き之部

喜雨亭記　蘇東坡　一八〇
箕子碑　柳宗元　一八一
歸去來辭　陶淵明　一八一
杞憂　列子　一八三
欽使覩見述國　同文滬報　一八四
牛山之水　孟子　一八四
畿田記　錢公輔　一八四

く之部

朋遁說韓信　史記　二八六
和氏壁　史記　一八七
勸學篇　張之洞　一八八
君子素其法而行　中庸　一八九
君臣賦詩　服部南郭　一八九
管中傳　史記　一九〇
管仲論　韓非子　一九〇

管仲論　蘇老泉　一九一
愚溪詩序　柳宗元　一八二
獲麟解　韓退之　一九二

け之部

雞肋　蒙求　一九三
景春　孟子　一九三
牽牛（齊宣王）　孟子　二三一

こ之部

弘道館記　德川景山　一九四
答李翊書　韓退之　一九五
鈷鉧潭西小邱記　柳宗元　一九六
鈷鉧潭記　柳宗元　一九六
鴻門之會　史記　一九六
項羽亡　史記　一九八
項羽救趙　史記　一九八
項羽起兵　史記　一九八
項羽本記　史記　一九九
對（報）燕惠王書　樂毅　二七九

爭進論　韓退之　二〇五
躁臣徙爲耳　小學　二〇六
塞翁馬　淮南子　二〇七
左師公說趙太后　戰國策　二〇七
策略四　蘇東坡　二〇八
左忠毅公逸事　方苞　二〇九
三綱領八條目　大學　二〇九
三戒　柳宗元　二一〇
遲川之戰　二一一
雜說上　韓退之　二一一

ら之部

師說　韓退之　二一二
四端　孟子　二一二
死於虎者　擅宗元　二一三
種樹郭橐駝傳　柳宗元　二一三
釋謚意正心修身齊家　大學　二一四
釋秘演詩集序　歐陽修　二一四
舜殛於畎畝之中　孟子　二一五
小石城山記　柳宗元　二一五
小學題辭　朱晦庵　二一六
商君傳　史記　二一六

り之部

郤聘書　謝材得　二一九
清國皇帝陛下國書　二一九
清皇奉慈輿回京　二一〇
新修藤王閣記　韓退之　二一〇
秦王錄　宋濂　二一一
秦昭王爲范雎報仇　史記　二一二
進學解　韓退之　二一三

る之部

自助論第九編自序　中村敬宇　二一五
孤子可教　二一五
盡國李伞權致我伊藤陸奥兩權　二一六
郤事文範序　僧夫如軒　二一六
自助論第五編自序　中村敬宇　二一七
熟語　二一七

れ之部

醉翁亭記　歐陽修　二一九
鄒忌說齊威王　戰國策　二一九
舍魚而取熊掌　孟子　二二〇

ろ之部

齊宣王　孟子　二二一
孟準記　柳宗元　二二三
蘆濱記　柳宗元　二二四
童子舞醜女爲后　二二四

わ之部

蘐卿子傳　韓山陽　二二五
贈正四位儉兔間象山先生碑　重野成斎　二二五

記之部

大鐵椎傳　魏禧　二二七
高山仲繼祠堂記　川田甕江　二二七
賜軍人勅諭　勅諭義解　二二八
爲兄軾下獄上書　蘇軾　二二八
上尚德緩刑書　路溫舒　二二九
上范司諫書　歐陽修　二四〇
上樞密韓太尉書　蘇軾　二四一
上秋月侯書　川田甕江　二四三
段太尉逸事狀　柳宗元　二四二
打頭書屋記　重野成斎　二四四
題赤壁圖後　安積艮　二四四
題大久保贈右府手帖後　二四四

わ之部

張中丞傳後序　韓退之　二四六
佛繼讀駿公雜話　鹽谷宕陰　二四七
地利不如人和　孟子　二四七
張良(練習)　二四七

記之部

瓌瑋譎怪七國　史記　二四七
甲古戰場文　李華　二四八
潮州韓文公廟碑　蘇東坡　二五一
陳將軍二鶴記　候方域　二五六

ゑ之部

張中丞傳後序　韓退之　二五七
佛繼讀駿公雜話　鹽谷宕陰　二五七
地利不如人和　孟子　二五七
東遊日記　吳如綸　二五七
唐詩選跋　蔡生徂來　二五七
東湖遺稿鶴　林鶴梁　二五八
獨樂園地　司馬光　二五八
道山亭記　曾鞏　二五八
童區寄傳　柳子厚　二五九

な之部

那欽使頌詞　二六一

拿破列翁放言序　中村歌子　二六一
楠公神鉾記　豐谷宕陰　二六一

に之部

日本皇帝陛下勅語　二六三
日清講和會議　二六三
二疎散金(練習)　蒙求　二六四

の之部

除肉刑詔　孝文帝　六二五

は之部

方山子傳　蘇東坡　二六六
始得西山宴遊記　柳子厚　二六六
濱田彌兵衛傳　齋藤拙堂　二六七
范睢滅吳國　語　二六七
范睢欺須賈　史記　二六八
范睢入秦　史記　二六八
范增論　蘇東坡　二六九
梅聖俞詩集序　歐陽修　二七〇
賣油翁　歐陽修　二七〇
萬章問不見諸侯　孟子　二七一

晩香廬記　豐谷宕陰　二七二

ひ之部

馮煖客孟嘗君　戰國策　二七三
筆談　東遊日記　二七四
牽牛(齊宣王)　孟子　二三一

ふ之部

文須有益於天下　顧炎武　二七五
文天祥　脫脫　二七五

へ之部

滬池之會　史記　二七八

ほ之部

報燕惠王書　樂毅　二七九
報任安書　司馬遷　二七九
豐樂亭記　歐陽修　二八六

ま之部

亦各言其志　論語　二八七
先從隗始　戰國策　二八七

め之部

茗磐甘勝小記　二八九

も之部

毛穎傳　韓退之　二九一
毛遂定從　史記　二九三
孟母斷機　蒙求　二九四

や之部

山田長政傳　齋藤拙堂　二九五
康景清節　大槻磐溪　二九五

り之部

柳子厚墓誌銘　韓退之　二九八
梁惠王　孟子　二九九
李鴻章　三〇〇
吏贖　三〇〇
輪扁劉倫　莊子　三〇一

ろ之部

論道無彼此　賴山陽　三〇二
論佛骨表　韓退之　三〇二
論語抄　三〇二

わ之部

和文天祥正氣歌竝序　藤田東湖　三〇六
王無罪歲　孟子　三〇六
王彥章畫像記　歐陽修　三〇七
我兩全權覆李全權　三〇七

各種中學漢文讀本

字句精解 目錄（四年之部）

秋山四郎編

○第一新正 漢文教科書之部

忠孝一本　藤田東湖　九七
富川攬勝　依田學海　一二五
事和泣玉　蒙求　一三二
簡相如　十八史略　一五五
題簡相如奉璧圖　安井息軒　九一
翁盧記　中村敬宇　九二
閻處三書　蒙求　信夫恕軒　一六
送宋廣子儉之歐洲序　盬谷青山　一三八
無聲堂記　依田學海　一四一
森園藺齋藤井竹外　蒙求　一二六
伯牙絕絃　孔子　一八
下岐蘇川記　贈藤拙堂　三七
信陵君救邯鄲（趙）　十八史略　六五
論信陵君　長野豐山　一五八
愛蓮說　周茂叔　一
齊桓公用管仲　十八史略　七四
政宗偵羅馬　齊藤竹堂　一三七
吳越之爭　十八史略　五〇
遊鞍馬山記　中村敬宇　四
孟嘗君　十八史略　一四一
讀孟嘗君傳　王安石　一四八
小鬟瀑記　中村敬宇　五三
座右銘　小學　一
張良　十八史略　九三
留候論　蘇東坡　一五〇
始得西山宴遊記　柳子厚　一二六
朋黨論　歐陽修　一三三
與李公擇　蘇東坡　三
新建新田公祠堂記　芳野金陵　四
孔子　十八史略　四〇
上梅直講書　蘇東坡　八九
桐葉封弟辯　柳子厚　一〇四
楊修捷對　蒙求　一四四

赤壁之戰　十八史略　七六
前赤壁賦　蘇東坡　八〇
後赤壁賦　蘇東坡　四九
黃州快哉亭記　蘇東坡　三六
玉川綢香盒記　三島中洲　九〇
武昌九曲亭記　蘇東坡　一三一
借松亭記　安積艮齋　六二
（前出師表）　諸葛孔明　六八
擊宏論天　蒙求　五七
諸葛亮孔明　十八史略　五八
吉岡處記　藤田藪齋　五〇
蠅虎錄　歌場參考　六三
送石邑書爲北使引　蘇老泉　一七
嘉言二則　小學　二六
百科全書序　中村敬宇　一一三
梅谿遊記三　齋藤拙堂　一一九
讀裴晉公上書　盬谷省軒　四〇
書憲紀　坂谷朗廬　六四
野矢鞏圖銘　生屋鳳洲　一一四
東北史序　盬谷省軒　一〇三
近古史談引　盬谷宕陰　三四

秋山四郎編

○新選漢文讀本（卷之七）之部

白石新井先生傳　板倉勝明　一一五
白石先生年譜序　中村敬宇　一一六
富川攬勝　依田學海　一二五
事和泣玉　蒙求　一三二
簡相如論　十八史略　一五五
題簡相如奉璧圖　安井息軒　九一
趣閻相如　蒙求　一三二
竹盧記　長野豐山　一五五
送宋廣子儉之歐洲序　中村敬宇　九二
無聲堂記　信夫恕軒　一六
森田節齋藤井竹外　盬谷青山　一三八
伯牙絕絃　依田學海　一四一
下岐蘇川記　蒙求　一一六
信陵君救邯鄲（趙）　齋藤拙堂　三七
論信陵君　十八史略　六五
愛蓮說　周茂叔　一
齊桓公用管仲　十八史略　七四
諫雖泳嶺過淺間山記　安積艮齋　四八
航海朱印舶　重野成齋　
政宗偵羅馬　齊堂竹蘭　一三七

吳越之爭　十八史略　五〇
遊鞍馬山記　中村敬宇　四
孟嘗君　十八史略　一四一
讀孟嘗君傳　王安石　一四八
小巖瀑記　中村敬宇　五三
座右銘　小學　九三
張良　十八史略　九三
留侯論　蘇東坡　一五〇

○同（卷之八）之部

幼學綱要序　元田永孚　一四五
始得西山宴遊記　柳子厚　二六六
祭淸國合肥李公文　鹽谷靑山　一三七
朋黨論　歐陽修　一三九
與李公擇　蘇東坡　三
新建新田公祠堂記　芳野金陵　四
孔子　十八史略　四〇
上梅直講書　蘇東坡　八九
桐葉封弟辯楊　柳子厚　一〇四
揚修捷對　蒙求　一四四
甕江文稿序　三島中洲　一四
澡泉餘事小引　重野成齋　八二
隆中之對　資治通鑑　一五〇
赤壁之戰　十八史略　七六
前赤壁賦　蘇東坡　八〇
後赤壁賦　蘇東坡　四九
黃州快哉亭記　蘇轍　三六
王川網香魚記　三島中洲　九〇
武昌九曲亭記　蘇轍　一三一
借松亭記　安積艮齋　六二
（前）出師表　諸葛孔明　六八
秦宓論天　蒙求　五七
諸葛亮卒　十八史略　五八
古岳廢記　森田節齋　五〇
縱囚論　歐陽修　六三
送石昌言爲北使引　蘇老泉　一七
嘉言二則　小學　二六
百科全書序　中村敬宇　一二三
梅谿遊記　齋藤拙堂　一一九
月瀨圖卷跋　龜谷省軒　九九
請裒贈賴裏上書　龜谷省軒　四〇
春窓記　坂谷朗廬　六四
野矢夢園傳　土屋鳳洲　一一四
東北史序　龜谷省軒　一三〇

近古史談引　鹽谷宕陰　三四

秋山四郎編

○漢文教科書之部

文王武王　十八史略　一六
伯夷頌　韓愈　一一六
齊桓公用管仲　十八史略　七四
上梅直講書　蘇軾　八九
吳越之爭　十八史略　五〇
商鞅　十八史略　六一
捕蛇者說　柳宗元　一三三
蘇秦　十八史略　八三
記峨眉松　周鴻章　一二三
孟嘗君　十八史略　一四一
讀孟嘗君傳　王安石　一四八
燕昭王招賢士　十八史略　八
送董邵南序　韓愈　一七
韓信　十八史略　二六
井徑口之戰　十八史略　七四
岳陽樓記　范仲淹　二九
愛蓮說　周敦頤　一
陳平　十八史略　九三
張良　十八史略　九三
留侯論　蘇軾　一五〇
吳楚七國之反　十八史略　四九
鼂錯論　蘇軾　九三
昆陽之戰　十八史略　四九
馬援評公孫述光武　十八史略　一二〇
送楊少尹序　韓愈　二一
隆中之對　資治通鑑　一五〇
赤壁之戰　資治通鑑　七六
前赤壁賦　蘇軾　八〇
後赤壁賦　蘇軾　四九
黃州快哉亭記　蘇轍　三六
諸葛亮　十八史略　六八
（前）出師表　十八史略　五八
王敦之反　十八史略　一六一
贈周瑩歸省叙　王守仁　二一
肥水之戰　十八史略　一二二
唐太宗論治道　十八史略　一〇三
縱囚論　歐陽修　六三
送石處士序　韓愈　一六
送溫處士赴河陽軍序　韓愈　一五
唐莊宗遇弒　十八史略　一〇三

伶官傳叙論　五代史記　一五七
王彥章傳　五代史記　一六〇
木假山記　蘇　洵　一四一
曹彬伐江南　十八史略　八四
雜說四　韓　愈　五三
十八史略　七九
澶淵之役
送石昌等言爲北使引　蘇　洵　一七
歐陽修等爲諫官　十八史略　一四
朋黨論　歐陽修　一三三
呂海論王安石　十八史略　一五四
賣柑者言　劉　基　一九
蘇軾被貶　十八史略　八三
夜遊孤山記　邵長衡　一四三
徐芝仙出塞詩序　姜宸英　六六
文天祥不屈　十八史略　一二七
謝枋得死節　通鑑綱目　六二

西村豐校閱
清水平一郎編纂

○漢文新讀本之部

霧關臨幸記　重野安繹　三〇
明治孝節錄序　元田永孚　一三九
橋本景岳之碑（三）　重野安繹　一一六
岳陽樓記　范仲淹　二九
上樞密韓太尉書　蘇　軾　二四一
答曾子固書　王安石　四二
撫州顏魯公祠堂記　曾　鞏　一二六
蘇武　十八史略　八四
答蘇武書（三）　李　陵　四三
諺語三則　三九
日本漢學（三）　黃遵憲　一一三

管野道明校訂
國語漢文研究會編纂

○新編漢文教科書之部

支那歷朝興亡　支那通史　五七
吳越之爭　十八史略　五〇
蘇秦說六國　通鑑史要　八五
管鮑之交　史記　三六
毛遂王楚定從　十八史略　二九三
藺相如　十八史略　一五五
格言二則　二三
題讌相如奉璧圖　安井衡　九一
（先）從愧始　十八史略　一四八
荊軻入秦　十八史略　三九
孔子略傳　十八史略　四〇
格言五則　二三
上梅直講書　蘇　軾　八九
上樞密韓太尉書　蘇　轍　二四一
袁州學記　李　覯　九
立志（練習）　畜德錄　一五四
記峨眉松　周鴻圖　三三
送東陽馬生序　安　濂　一七
李氏山房藏書記　蘇　軾　一五四
警讀書無序次（練習）　劉宗周　一五七
格言六則　二三
送賴承緒序　長野確　一八
柳子家訓　小學　一五三
（馬援）戒兄子　後漢書　五
書戴嵩畫牛（練習）　蘇　軾　六二
蚊對　方孝孺　一二九
浙西三瀑布記　袁　枚　七五
愛蓮說　周敦書　一
汲黯簡靖　資治通鑑　三二
朱雲請斬佞臣　資治通鑑　五五
戇窩記　方孝孺　一〇一

陳情表　李　密　九四
隆中之對　司馬光　一五〇
出師表　司馬光　六八
諸葛亮卒　司馬光　五八
大石良雄　青山延光　一〇
格言三則　二五
朋黨論　歐陽修　一三三
戇窩記　方孝孺　一〇一
和氣清塵論　賴　襄　一六〇
楠氏論　賴　襄　一〇六
高山彥九郎傳（二）　賴　襄　八六
戒兄子嚴敦書　馬　撝　五
格言三則　二四
呂子家訓　朱　喜　一五三
送賴承緒序　長野確　一八
送岡山縣近衞將卒出征序　島　毅　一九
睡陽城嬰守（四）　司馬光　七〇
日本刀論　阪田丈本　一一〇
士規七則　吉田矩方　五四
吉田矩方（三）　岡千仞　一四五
岳飛（三）　鄒元慶　二六
上高宗封事（二）　胡　銓　八七

秦士錄　宋　濂　二二一
大鐵椎傳　魏　禧　二三七
左忠毅公逸事　方　苞　二〇九
隆中之對　資治通鑑　一五〇
(前)出師表　諸葛亮　六八
唐太宗論治道　資治通鑑　一〇三
縱囚論　歐陽修　六三
震畏四知(練習)　蒙　求　五八
季札挂劍(練習)　蒙　求　三三
衞靈公夫人(練習)　劉　向　八
文天祥不屈　宋史紀事本末　一二七
謝枋得死節　綱目　六二
格言二則　二四
閔損至孝(練習)　蒙　求　一二二
壬路負米(練習)
訓言二則　邵長蘅　一四三
夜遊孤山記　王守仁　七
蘆旅文　王守仁　四六
答毛憲副書　蹇　洵　一七
送右昌言爲北使引　西谷雜誌　七四
西俗一斑　六〇
上諭十則

照會　丁汝昌答日本海軍中將伊東　五七
照會　翟清國丁提督　五八
國書　北清擾亂清帝致於我天皇　四七
國書　我　天皇覆於清帝　四八

澁谷啓藏校訂
國語漢文會編輯

○訂正新編漢文讀本之部

三計塾記　安井息軒　五二
教條示龍場諸生　王守仁　三九
格言四則　李　白　六三
春夜宴桃李園序　司馬光　六四
詩話(練習)　齋藤拙堂　一三四
本邦漢文沿革　(一)　梁田蛻巖　二
興湖玄岱書(練習)　服部南郭　五二
大友皇子(刪修)　蘇　軾　三三
記承天寺夜遊　賴山陽　六五
自像贊二首　十八史略　三九
荊軻入秦　韓　愈　一七
送董邵南序(練習)　戰國策　一〇三
唐雎不辱使命　青山佩弦齋　二
赤穗義士報讎

木村貞行傳　青山佩弦齋　三四
陳情表　李　密　九四
能不欺而已　劉氏人譜　一四五
華山帝詔求直言　澁谷牀山　三六
公信直諫(練習)　重野成齋　三四
送薛存義之任序　柳宗元　一八
格言四則　歐陽修　一〇九
愴蒼蠅賦　屈　原　三四
漁父辭　柳宗元　七八
先秦學風　十八史略　四〇
孔子略傳　史　記　四二
孔子世家贊(練習)　蘇　軾　一五四
李氏山房藏書記　服部南郭　五
隱趣好事　陶　潛　一八一
歸去來辭　十八史略　一〇一
唐太宗　(二)　周惇頤　一
愛蓮說(練習)　十八史略　一〇九
二程先生　宋史紀事本末　一二七
文天祥不屈　大日本史　九〇
大塔宮南走
格言四則　大槻磐溪
丁伯聽平語

伯牙絕絃(練習)　蒙　求　一一六
中尊寺　安井息軒　九二
眞將軍　史　記　五六
下岐蘇川記　齋藤拙堂　三七
續雪花圖說敍(練習)　佐藤一齋　八五
送東陽馬生序　宋　濂　一七
文學消人猜疑　大槻磐溪　一二九
陸宣公全集序　佐藤牧山　一五二
和氣清廉呂論　賴山陽　一六〇
上高宗封事　胡　銓　八七
貞時行脚(練習)　服部南郭　五二
生於憂患死於安樂　孟　子　六一
格言四則
岳陽樓記　范仲淹　二九
林子平傳　齋藤竹堂　一一八
刎頸之交(藺相如)　十八史略　一五五
展喜郤齊師　左　傳　一〇〇
書海國圖志後　安井息軒　六一
還附遼東半島詔　澁谷牀山　二五
諭陸海軍人勅　澁谷牀山　五三

深井鑑一郎訂正
弘文館編纂
○訂正中學漢文讀本之部
霞關臨幸記　重野盛齋　三〇
明治孝節錄序　元田東野　一三九
賀立皇太子表　島田重礼　三〇
日本之漢學（二）　黃遵憲　一二一
斷文法　齋藤拙堂　一
讀書法　魏東房　一〇四
學說贈葉徂徠　魏東房　一八
幼學所當先
格言三則
日本之西學　黃遵憲　一二三
奉使倫敦記　黎庶昌　一三五
倫敦繁盛　薛福成　一五九
巴黎斯繁華　王柴谿　一二〇
贈人赴佛國博覽會序　竹添井井　二〇
普法戰紀序　陳桂士　一二四
中東戰紀本末初編叙　龔心銘　九二
譯日本宣戰書
清國皇帝宣戰詔　尹致昊　一四三
論鴉片　彭麟玉　一五六
會文正公神道碑（二）　李鴻章　八二
與李鴻章書　竹添井井　三
岳飛　一七八
擬褒崇岳忠武王議　魏祐賓　三
上高宗封事　胡澹菴　八七
文天祥（節錄）　脫脫　二七五
和文天祥正氣歌有序　藤田東湖　三〇六
格言四則
諸葛亮（諸葛亮卒……五八
（田師表……六八
赤壁之戰　蘇東坡　七六
前赤壁賦　蘇東坡　八〇
後赤壁賦　蘇東坡　四九
赤壁圖　方正學
黃州快哉亭記　蘇穎濱　三六

秋山四郎編
○第一訂正漢文讀本書之部
自助論第五編自序　中村敬宗　二二五
毛遂定從　史記　二九三
上秋月侯書　川田甕江　一四九
蘇秦　十八史略　八三
送寺田望南爲僧赴西京序　重野成齋　一七三
韓信　十八史略　二六
叙事文範序　信夫恕軒　二二六
讎錯論　蘇東坡　九三
伶官傳叙論　歐陽修　一五七
上樞密韓太尉書　蘇轍　二四一
齊人驅妻妾　孟子　二三〇
途洋行諸君序　阪谷朗廬　一七三
拿破列翁放言序　中村敬宇　二六一
蘇軾被貶　十八史略　八三
爲兄軾下獄上書　蘇轍　二三八
飛岳　通鑑綱目　一七八
豐樂亭記　歐陽修　一二八六
文天祥不屈　十八史略　一二七
方山子傳　蘇東坡　二六六
景春　孟子　一九三
教條示龍場諸生　王陽明　三九
東湖遺稿叙　林鵞梁　二五八
和文天祥正氣歌　藤田東湖　二五六
自助論第九編自序　中村敬宇　二二五
大鐵椎傳　魏水叔　二三七
生於憂患而死於宴樂　孟子　六一
晚香盧記　鹽谷宕陰　二七一
牽牛（齊宣王）　孟子　二三一
楠公神鈴記　鹽谷宕陰　二六一
燕昭王招賢士　十八史略　八
送三島遠叙序　中村敬宇
鴻門之會　史記　一九六
萬章問不見諸侯　孟子　二七一

各種中學漢文讀本

字句精解目錄（五年之部）

答李翊書　韓退之　一九五
霞關臨幸記　重野成齋　三〇
題大久保贈右府手帖後　重野成齋　二四四
格言十則　論語
釋秘演詩集序　歐陽修　二一四
輪扁斲輪　莊子　三〇一
賣油翁　歐陽修　二七〇
在忠毅公逸事　方望溪　二〇九
魚我所欲也　孟子　一七一
伊尹論　蘇東坡　一六八
鱷魚文　韓退之　一七九
雜說上　韓退之　二一一
雜說下　韓退之　五三
獲麟解　韓退之　一九二
秋山四郎編
○新撰漢文讀本（卷之八）之部
自助論第五編自序　中村敬宇　二三七
毛遂定從　史記　二九三
上秋月侯書　川田甕江　二四一
蘇秦　十八史略　八〇
送寺田望南爲僧赴西京序　重野成齋　一七三
教條示龍場諸生　王陽明　三九
東湖遺稿叙　林鵞梁　二五八
和文天祥正氣歌　藤田東湖　三〇六
自助論第九編自序　中村敬宇　二三五
大鐵椎傳　魏永叔　二三七
生於憂患而死於安樂　孟子　六一

○同（卷之十）之部
晩香廬記　鹽谷宕陰　二七一
牽牛（齊宣王）　孟子　二三一
策略四　蘇東坡　二〇八
楠公神鈴記　鹽谷宕陰　二六一
鄒忌說齊威王　戰國策　二二九
燕昭王招賢士　十八史略　八
對燕惠王書　樂毅　二七九
送董邵南序　韓退之　一七
送三島遠叔序　中村敬宇　一九六
鴻門之會　史記　二七一
萬章問不見諸侯　孟子　二七八
答李翊書　韓退之　一九五
霞關臨幸記　重野成齋　三〇
題大久保贈右府手帖後　重野成齋　二四四
格言十則　論語
釋秘演詩集序　歐陽修　二一四
張中丞傳後叙　韓退之　二四六
輪扁劉輪　孟子　三〇一
賣油翁　歐陽修　二七〇
左忠毅公逸事　方望溪　二〇九
項羽亡　史記　一九八
秦士錄　宋濂　二二一
魚我所欲也　孟子　一十一
伊尹論　蘇東坡　一六八
論佛骨表　韓退之　三〇二
鱷魚文　韓退之　一七九
雜說上　韓退之　二一一
雜說下　韓退之　五三
獲麟解　韓退之　一九二
秋山四郎編
○漢文教科書卷之部
和氏璧　史記　一八七
澠池之會　史記　二七八
刎頸之交（藺相如）　史記　一五五
上樞密韓太尉書　蘇轍　二四一
童區寄傳　柳子厚　二五九
韓信　十八史略　二六
叙事文範序　信夫恕軒　二二六
井陘口之戰　十八史略　七四
鼂錯論　蘇東坡　九三
有待樓記　安井息軒　一六九
伶官傳叙論　歐陽修　一五七
上樞密韓太尉書　蘇轍　二四一
打頭書屋記　重野成齋　二四四
齊人驩妻妾　孟子　二三〇
送洋行諸君序　阪谷朗廬　一七三
拿破列翁放言序　中村敬宇　二六一
木假山記　蘇老泉　一四一
蘇軾被貶　十八史略　八三
爲兄軾下獄上書　蘇轍　二三八
上高宗封事　胡澹菴　八七
贈本胡邦衡上高宗封事序　林鵞梁　二五七
岳飛　通鑑綱目　一七八
豐樂亭記　歐陽修　二八六
文天祥不屈　十八史略　二一七
方山子傳　蘇東坡　二六〇
景卷　孟子　一九三

陳將軍二鶴記　侯方域　二五六
釋秘演詩集序　歐陽修　二一四
左忠毅公逸事　方苞　二〇九
道山亭記　曾鞏　二五八
大鐵椎傳　魏禧　二三七
秦士錄　宋濂　二二一
毛遂定從　史記　二九三
范雎入秦　史記　二六八
范雎欺須賈　史記　二六八
秦昭王爲范雎報仇　史記　二二二
送李愿歸盤谷序　韓愈　一七二
毛穎傳　韓愈　二九三
柳子厚墓誌銘　韓愈　二九八
始得西山宴遊記　柳宗元　二六六
鈷鉧潭記　柳宗元　一九六
鈷鉧潭西小邱記　柳宗元　一九六
至小邱西小石潭記　柳宗元　一六八
項羽起兵　史記　一九八
鴻門之會　史記　一九六
蒯通說韓信　史記　二八六
項羽亡　史記　一九八

爭臣論　韓愈　二〇五
上范司諫書　歐陽修　二四〇
論佛骨表　韓愈　三〇二
鱷魚文　韓愈　一七九
與孟尚書書　韓愈　一六三
愚溪詩序　柳宗元　一九二
張中丞傳後叙　韓愈　二六四
答李翊書　韓愈　一九五
策略四　蘇軾　二〇八
欽使覲見述函　同文滬報　一八四

西村豊校補
清水平一郎編纂
○訂正漢文新讀本之部
文天祥　和文天天正氣歌竝序　脫脫　二七五
委得西山宴游記　藤田彭　三〇六
鈷鉧潭記　柳宗元　二六六
鈷鉧潭西小邱記　柳宗元　一九六
至小邱西小石潭記　柳宗元　一六八
袁家渴記　柳宗元　二九六
石渠記　柳宗元　二三三

石澗記　柳宗元　二三四
小石城山記　柳宗元　二一五
格言三則　司馬光　一七六
赤壁之戰　蘇軾　七六
前赤壁賦　蘇軾　八〇
送溫處士赴河陽軍序　韓愈　一五
送楊少尹序　韓愈　二一
送董孟邵南序　韓愈　一七
雜說　韓愈　五三
與孟尚書書　韓愈　一六三
潮州韓文公廟碑　蘇軾　二五一
喜雨亭記　蘇軾　一八〇
黃州快哉亭記　蘇軾　三六
項羽本紀　司馬遷　一九九
范增論　蘇軾　二六九
梁惠王　孟子　二九九
齊宣王　孟子　二三一
熟語　二二七
阿房宮賦　杜牧　一六四
弔古戰場文　李華　二四八
歸去來辭　陶潛　一八一
報任安書　司馬遷　二七九

東游日記　吳汝綸　二五七
筆談　東游日記　二七四

○新編管野道明校訂
漢文教科書之部
岳陽樓記　范仲淹　二九
梅聖兪詩集序　歐陽修　二七〇
黃州快哉亭記　蘇軾　三六
赤壁賦（前）　蘇軾　八〇
後赤壁賦　蘇軾　四九
題赤壁圖後（練習）　安積信　二四四
文須有益於天下（練習）　顧炎武　二七五
上范司諫書　歐陽修　二四〇
韓愈諫迎佛骨（練習）　綱鑑易知錄　一七八
柳子厚墓誌銘　韓愈　二九八
鈷鉧潭西小邱記　柳宗元　一九六
捕蛇者說　柳宗元　一三三
死於虎者　攗弓　二一三
種樹郭橐駝傳　柳宗元　二一三
賣相者言　劉基　一一九
雜說四　韓愈　五三
送溫處士赴河陽軍序　韓愈　一五

二疏取金（練習） 蒙求 二六四
送楊少尹序 韓愈 二一
送李愿歸盤谷 韓愈 一七二
毛穎傳 韓愈 一九二
蹈鴟子傳（練習） 賴襄 二三五
鴻間之會 史記 一九六
韓信破趙 史記 一七七
張良諫封七國 史記 二四七
孺子可教（練習） 史記 二二五
漢三傑 十八略 一七六
張中丞傳後序 韓愈 二四六
段太尉逸事狀 柳宗元 二四二
撫州顏魯公祠堂記 曾鞏 二二六
朋黨論 歐陽修 一三三
（周）文王武王（練習） 十八略 一六
伯夷頌 韓愈 一一六
論語抄 三〇二
馮煖客孟嘗君 戰國策 二七三
牽牛（齊宣王） 孟子 二三一
四端 孟子 二一〇
齊人臨妻妾 孟子 二三〇
魚我所欲 孟子 一七一
舜發於畎畝之中 孟子 二二五
格言（五則）（練習）
勸學篇 張之洞 一八八
日清講和會議 二六三
吏牘清國李全權致我伊藤陸奥兩全權 二三六
吏牘我兩全權覆李全權 一〇七
李鴻章逝 三〇〇
清皇奉慈輿回京 二一九
澁谷啓藏校訂國語漢文會編輯
○訂正新編漢文讀本之部
弘道館記 德川景山 一九四
袁州學記 李覯 九
論道無彼此 賴山陽 三〇二
牛山之木（練習） 孟子 一八四
格言四則
先從隗始 戰國策 二八七
高山仲繩祠堂記 川田甕江 二三七
仲繩讀駿臺雜話 鹽谷宕陰 二四七
隆中之對 資治通鑑 一五〇
赤壁之戰 十八史略 七六
諸葛亮伐魏（卒） 十八史略 五八
出師表 諸葛亮 六八
鷸助（練習） 蒙求 一九三
前赤壁賦 蘇軾 八〇
後赤壁賦 蘇軾 四九
犀川之戰 賴山陽 二一一
左師公說趙太后 戰國策 二〇七
鉢錮潭記（練習） 柳宗元 一九六
小石川山記 柳宗元 二一五
梅聖俞詩集序 歐陽修 二七〇
釋祕演詩集序 歐陽修 二一四
柳子厚墓誌銘 韓愈 二九八
君臣賦（詩） 服部南郭 一八九
醉翁亭記 歐陽修 二二九
怕後生笑（練習） 齋藤拙堂 一七二
峽中記行 狹生徂徠 一七六
唐詩選跋 狹生徂徠 二五七
毛遂定從 史記 二九三
讀孟嘗君傳 王安石 一四八
報燕惠王書 樂毅 二七九
格言四則 齋藤拙堂 二九五
山田長正傳 齋藤拙堂 二六七
濱田彌兵衛傳
蘇秦說六國 通鑑擘要 八五
箕子碑 柳宗元 一八一
伯夷頌 韓愈 一一六
卻聘書 謝枋得 二一九
賜正位佐久間象山先生碑 重野成齋 二三五
康景清節 大槻磐溪 二九五
舍魚而取熊掌 孟子 二二九
阿房宮賦 杜牧 一六四
弔古戰場文 李華 二四八
塞翁馬（練習） 淮南子 二〇七
杞憂 列子 一八三
越行成於吳 國語 二九六
范蠡滅吳 國語 二六七
輪扁斲輪 莊子 三〇一
老鬻廿勝小記 鹽谷宕陰 二八九
進學解 韓愈 二二三
佳字妙句 齋藤拙堂 一七五
三綱領八條目 大學 二〇九
釋誠意正心修身齊家格言 大學 二一四
亦各言其志 論語 二八七
上梅直講書 蘇軾 八九

獨樂園記　司馬光　一二五八
點鼠賦　蘇軾　一七五
學問思辨行　中庸　一七九
君子素其位而行　中庸　一八九
賜運人勅諭　勅諭義解　二三八
地利不如人和　孟子　二四七
深井鑑一郎訂正弘文館編纂

○訂中學漢文讀本之部

陳情表　李密　九四
格言四則　曾南豐　一二六
格言三則　韓退之　二一一
撫州顏魯公祠堂記　韓退之　二一一
雜說上　韓退之　五三
雜說下（四）　韓退之　五三
王彥章畫像記　歐陽永叔　三〇七
豐樂亭記　歐陽永叔　二八六
宮兩亭記　蘇東坡　一〇八
格言三則　柳柳州　一八
送薛存義序　柳柳州　一三三
捕蛇者說　柳柳州　二一三
種樹郭橐駝傳　柳柳州　二一三
王無罪歲　孟子　三〇六
孟母斷機　蒙求　二九四
宣王問孟子齊桓晉文之事（齊宣王）　二三一
宣王拜醜女爲王后　劉向新序　二三四
管仲傳　史記　一九〇
管仲論　蘇老泉　一九一
上尚德緩刑書　路溫舒　二三九
商君傳　史記　二一七
除肉刑詔　孝文帝　二六五
報任安書　司馬遷　二七九
答蘇武書　李陵　四三
蘇武傳　漢書　八四
諫伐匈奴書　主父偃　一六九
上范司諫書　歐陽永叔　二四〇
義圓記　錢公輔　一八四
岳陽樓記　范仲淹　二九
偃虹堤記　歐陽永叔　二九七
新修滕王閣記　韓退之　二三〇
袁州州學記　李泰白　九
師說　韓退之　二一〇
格言八則　宋晦庵　二一六
小學題解

獨樂園記　司馬光　一二五八
躁進徒爲耳　小學　二〇六
三戒幷序　柳柳州　二一〇
有齊人一妻一妾而處者（齊人驕妻妾）　孟子　二三〇
歸去來辭　陶淵明　一八一

あ之部

愛蓮說

【蓰】(シ)倍加する事 【李唐】唐は李氏なる故也 【染】ふれる 【淤泥】どろ 【濯】あらふ 【妖】なまめかしくうつくしい

斷文法

【斷】きらかにする 【文理】文章の筋道 【止】ただ 【資】たすけ 【丁然】善くわかる 【艱澁】わかりにくく、渋滞する 【謁】音「くは」訛に同し 【關疑】疑はしきを其儘にして手をつけぬ 【絕佳】すぐれてよい 【許】ばかり 【爲我物】すつかり手に入れて自分のものとす 【緣(ヨル)一生靠(ヨリ)此爲作文骨子故也】緣は因る靠も因ると訓すれども倚りかゝる意○一生其三十齒ばかりの手本を據り處として己の文章を作る要素とするからである 【識】見わける 【叙述】言ひまはし 【抑揚】上げたり下げたり 【運意】思想の着け方 【演證】說明 【開闔(カフ)】しまる事とはなす事 【關鍵】前後の分界 【次序】順序 【緜】より 【表】上の方 【會得】えとくをする 【如此作】さう云風に作る 【化工賦物】造化のわざて萬物にそれぞれ性質をわ

りつける【匾々摸擬】こせこせ眞似る【集義】むやみ【梯屋】屋根に梯子をかける【側房】わきの以養氣】今日一の義を行ひ明日も又一の義を行ふと云やうに日々義を積んでいって浩然と大なる氣を養ふ【俗子】俗人と曰ふか如し【肢】手足なり【排字】字を並べる【焉】いづくんぞ【骸】骨なり【文務】文は出來べきたけ【條達】のびること【倪元璐】明の名臣謚して文正公と云ふ【軌於法】文法に入込む

赤穗義士報讎

【詔使】勅使【接伴】せったい【手刃】手づから殺す【抱持】だきとめる【屏居】屏門【不獲命】大學が相續を許されないならば【宗室】本家【綱】もしこめる【按】しらべる【四次】四つみ【僦舍】かりずまい【裹】きこむ【鎖甲】くさりかたびら【韋服】皮ばおり【攢】あつまる【挺】ひっこぬく【縱】つく【襯衣】下着【視火】火元をしらべる【灾】災なり【遲明】あけがた【外廳】表座敷【追蹟】跡をつける【羅拜】ずっと並んで拝する【劃談】無中に話をする【訊狀】始末を尋ねる【分】別々に御預とする事【何待防護云々】是は罪ある者が他家へ御預となるときは、逃出さぬやう番をはつてる所から云ふ【客氣】つけ元氣【自盡】自殺【褫】はぎとる【委質】實は家來となるとき其證として君に奉る物○此では臣下となる事【庸器】平凡の人物【揮洒】画をかく事

與湖玄岱書

【皐皮】虎の皮○敎師の座する敷物の事【殆生蟣虱】蟻は「しらみ」の子○すはりきりの事【三寸欲爛】舌も「たゞれ」やうとする【村學夫子】田舍の先生【浸】水の「ひたす」處○此では海の事【遶】つらなる【砦】ひらく

與李公擇

【惘然】がっかりする貌【何乃爾耶】それになぜその通り別れて居る事を悲しむや【於邑】愁苦なり【坎壈】不遇の事【狂言】むちやの事【付與造物】造物者に任せて曰れは關しない【火】やく【酲病】わるく云ふ

與李鴻章書

【中堂】大學士の別號【代有】かはりばんに有る【灾】災に同し【恤】同情を寄て助ける【軫域】分け〳〵だて【荐】しきりに引續いて【旻天】元來秋の天を指せとも廣く天と云ふ事に用ゆ【生計頗裕】くらし向がゆたか【捐施】寄附【蓑爾】小なき貌【見量】現在の實數【上棧過斛】陸揚して、宝を通す【役夫】人夫【涓滴】一たらしの水【集腋成裘】狐の皮の腋の下に當る處を取り集めて皮衣とす、僅きものなり【勝於已】ないよりまし【鬻】依賴【往入凶區隨宜散賑】罹災地に往つたなら適宜に救米を出せと【津】天津の略語【拜候】罷り出る【衙門】役所【瀕死】死にかゝる【燃眉勢急】眉に火の着くやうな急場【哺】食物【斂竇】斂害【粥廠】粥の焚出し所【偸漏濫冒】盜まれたり、漏らしたり、無駄にしたり、くすねたり【虞】心配【縮】くらす【白礬】あうばん【稽察】監督と云ふが如し【周急】困急を救ふ【諳】精通する【情實】事情【運到】運んで來た【秤】はかりにはかる【窄】【運】つつぱ【日昃】日が傾く【弱質】よわ【袖衣】

きから〻【惻隠(ソクイン)】いたいたしい心　【異境殊俗】國が違ひ風俗が同しくない　【耗(カウ)(ボウ)】へらす

遊鞍馬記

【陪】隨從する　【詆】つつしむ　【呵】「下に居ら」ふことどなる　【擁】したがう事　【益々(マヅ)】あふれる貌　【樞(エツ)】こかげ　【蕭遠畫致】世を離れて物しづかなる畫中の趣　【爽塏(サウガイ)】空氣の流通よき高臺の地　【鰕(カ)】あはひ　【可掬(キク)】手でしやくって飲む事ができる　【丹碧】堂の彩色の赤や青　【源廷尉】義經の事○廷尉は判官に當る　【碁子】ごいし　【濕(シフ)翠】しめっぽい山氣　【拂々】ふうふう　【錯落】入り亂れる貌　【羽客】天狗　【冥助默祐】人知れざる祐助　【岐】二股になってある　【疋(ヒツ)練】一疋のねりぎぬ

新建新田公祠堂記

【鴻義】大義　【天步艱難】天運の不利なる事　【鸞輿(ランヨ)遠狩】主上の遠方へ逃れさせ玉ふ事　【蠹(チツ)】地を浸んでゐる虫　【萌(ハウ)芽】なり　【茁(サツ)】もえいづる　【岳崇海滯】岳のたかく海のひろきやう　【泰山義而鴻毛身】義を泰山の重きに比し、身を鴻毛の輕きに比する　【吁嗟(アア)】なげき嘆ずる　【陰森】物ぐらく立てこもる　【篔(モイ)】こまかい竹　【虺(キ)】まむし　【虬(クワク)】【旌表】旗じるしを立て、廣く知らせる　【詵】せむる　【靦(ヘン)】はぢ　【貞珉(ビン)】石碑の事　【形魄】有形の身體　【窈冥(エウメイ)】見えず知れざる有樣　【臭】香氣　【格】いたる　【仰止】止は語助、意義なし　【群黎(レイ)】一般の人民

い之部

戒兄子嚴敦書

【如聞父母之名】支那にては、凡て人の本名を唱ふるは、一體に失禮である、殊に父母の名は、尤も遠慮して、云はぬことになりている、故に今他人の過ちを聞くときは、兩親の名を人が呼付けにするを聞くが如くせよと云ふ、其の致し方は下にある通りである　【耳可得聞】人が云ふのを自分が耳で聞くは差し支ないが　【口不可得言】自分の口からは出して云ふてはならない、此れが即ち如聞父母之名、との致し方である　【長短】よしもし　【龍伯高】龍は姓伯高は字　【口無擇言(タク)】そのはなしに、よりわけて云へきがない、皆、よきはなし、ばかりだ　【清濁無所失】きよき人も、にごれる人にも、皆交際する　【數郡畢至】數郡の人が、みな會葬した、交際の廣き證據　【刻鵠不成尚類鶩(コク)(ドク)者】鵠は、「くゝひ」「はくてふ」「おほとり」、形、雁より大くして、羽毛白く、翔ること極めて高き一種の鳥、鶩は、家鴨「あひる」、鵠の像を彫刻して、できなくても、なほ、鶩に類似したる物ができる、即ち學びて、全くは成功せずとも、多少の成功ありとの喩なり　【畫虎不成反類狗者】虎の形を畫がいて、出來得ぬときは、あべこべに、大きく違ひたる狗に似た物ができる、即ち學びて、成功せざるときは、大失敗をやるの喩なり

隱趣好事

【高樓世外】世の中の外に氣高く隱遁の住をしてゐる　【王孫】博雅は克明親王の子ゆゑに——と云ふ　【且憂云々】此盲人が死んでしまつたならば、秘曲が後世永く絕える　【試造(イタリ)一見】ためしに一度いつ

て遂つた【窺聽】立ちぎゝする【悶癢(モンヤウ)】もどかしがる【冀及秘曲】早く秘曲を彈ずればよいがと心に願つてゐた【當此寂々】此さみしい時に方り【亦應語心耳】さう云人があつたら心の中を語らうか【向來】是迄の

瘞旅文(エイ)

瘞は埋葬なり旅客を埋葬する祭吊文

【正德】明の武宗の年號、是の時王守仁は、權臣劉瑾を彈劾せしを以て、貶されて貴州の龍場驛丞となれり【吏目】小吏なり【土苗】土地の苗民なり、貴州は往古苗種の遺族あり【離(リ)落】かきね【北來】北京より來りし事を云ふ【薄午】薄は迫なり、午時に近き頃【蜈蚣坡(ゴウハ)】地の名、坡「つゝみ」なり【畚鍤(ホンソウ)】畚は草索(ナワ)で造る、土を盛る器、鍤はすきくはの類【猶彼也】彼れも旅人、我も旅人である同情に堪えない【閔(ビン)然】憫然と同し【縶(アン)何人】縶は、曩息の辭、あゝ、一體に如何なる人ぞ【餘姚(エウ)】作者王守仁は浙江省紹康府餘姚縣の人【爾烏(ナンヂナンスレゾヤ)爲乎】烏爲は何爲と同じ「なんすれぞ」と讀む【妓(コノ)山之鬼】人の死して神となるを、鬼と云ふ【俸不能五斗(ナル)】毎月の俸給、五斗に足りない【蹙(シク)然】憂愁の貌【板援(ハン)】攀援と同じ【是吾爲爾者重云々】吾當地に來り三年間、一日も戚々として愛へざる身を以て今一旦汝が爲めに悲むとありては、是れ吾は他人たる爾か爲みには重くして、自から我か爲めには輕くする事になる、それでは、内外本末の順序を誤る次第である【達觀隨寓】通達して觀察すれば天地の間、身の在る處が、自分の寓所である【予宮】我の家宅なり、古は上下通じて家を宮と云ふ【率爾子僕來】聞野氏の句點は大に謬れり○此の歌は毎句押韻、韻は上平四支の韻にして來(イ)を音「き」と讀みて上下の期茲喜蠵と同韻四支の韻として用ゐしなり【驂(サン)】紫彪(シヒウ)】紫毛の小虎を車に馬の代用としてつけ【乘文蠵(チ)】あやのある美麗なる一種の龜に乘る、紫彪文蠵、皆な鬼神の乘り物となして云へる辭なり【而嘯(ヨ)】

晞分】曙晞は「すゝりなき」なり、以上の歌の大意は、自分が若し此の地に死せば、爾と共に伍をなし、仲間となるべしとなり　【無以無侶悲】自分が、生きて、中土へ歸りたらば、爾は他に仲間がないとて、悲しむことを、なすなかれ　【累々】かさなりて澤山ある

【多中土之流】誰中土から流浪し來りて死せる者の墓が多い　【相與呼嘯】爾らは彼等と相與に呼び嘯きて　【殘風】風を食物として食らい　【暮猿與栖】暮與猿栖と云ふべきを、故らに倒裝法をて逆きに云ひしなり此は、韓文の羅池廟碑に春與猴吟秋鶴與飛とあるに基きて、文章の巧を弄せしなり此又朝友麋鹿と一句とすべし舊點謬る　【無爲厲於空墟】厲は厲鬼とて、惡魔なり、爾らは吾れが去りて相手がないとて、決して強み怒りて、茲の土地にて厲鬼となりて、人を害することなかれ、爾らは、宜く他の中土の客の死せる者が、彼の通り澤山あるから、其れ等を友として相慰むべきてあるぞ

衛靈公夫人

【蹸々】車輪の鳴る音　【蘧伯玉】衛の大臣にして君子なり　【禮下公門】君の居玉ふ處の御門には、禮法に於て、車より下だりて敬意を表する　【式路馬】路は、軾と同じ、君主の乘り玉ふ公式の馬車なり、式は「よしやく」とて、自分の車に還りて、敬禮をなすなり、路馬に逢へば、車上にありて式するなり　【不爲昭々變節】あきらかなる場處だからとて、行ひを、平生とかへて、つくろうことは、しない　【不爲冥々惰行】くらくして、人が知らないからとて、行狀を崩ずることは、しない

燕昭王招賢士

【相】宰相　【子之】は名　【南面】君位○子之が一

—南面する也　【臨】（カイ）しほびしほ　【問生】生きいるものをいたわる　【孤】諸侯の自稱なり　【雪】そゝぐなり　【可者】賢士國を共にするもの　【涓人】（ケンジン）左右親近の臣を云ふ　【千里馬】一日千里も行く駿足　【亞卿】亞は次なり　【臨淄】（リンシ）齊の都　【縗】はなつ　【殘】そこなはれる　【騎劫】（キケフ）人名

袁州學記

【皇帝二十有六年】宋の仁宗慶歷四年なり、本文此の書き方は、秦の李斯が撰せる泰山碑文の體を學びて書きしなり　【德意】諸侯、意を音に作る、是なり、ありがたき詔勅　【假官借師】上邊だけ、言ひわけに敎官を設ける　【亡誦弦聲】亡は無と同し弦は絃と通ず書を誦し絃（琴）を彈ずるは古代學校敎授の重なる者より學問を講絃と云ふ　【蓄夫子廟】夫子は孔子【厥位面陽】廟の位置は南向きである　【門廡】門や、ひさし　【勦聖】（イウア）青黑き色を勦といふ聖は白土こ【舉法以故】定法の通にする　【百爾器備】數多き器械備へ付け　【舍菜】（キサイ）舍は釋と同し置くこと、菜は蘋繁の類、學校にて學神たる孔子を祭るを釋菜と云ふ乃ち菜を置て供へものとすればなり　【四代】虞夏殷周　【六國】燕齊楚趙韓魏　【劉氏】漢の高祖姓は劉氏　【關門不守】函谷關が守られずして秦の都が陷落して　【竇降恐後】降參を申込みて早く賞譽の判益を取ることを競爭する　【詩書之道】學問の孝道　【孝武】西漢の第五世主　【乘豐富】天下大平て財政の富裕なるにまかせて　【世祖】東漢第一世主　【弋行】軍隊の事　【靈獻】東漢の第十一世主孝靈第十二世主孝獻　【草茅危言者】民間て高尚なる議論を主張する人々　【折首而不悔】主義の爲めに首が斬られても、殘念に思はぬ　【功烈震主者】功勳が非常に大にして主君でも震へ畏れ位

なる大臣大將だち【聖神】聖明なる天子【賢君】賢良なる長官、祖無撰をさす【序庠(シャウジョ)】學校なり【以陶吾民】陶は鴈陶なり、養成すること【一有不幸】一旦緩急あらば【從大節】大なる節義に、もたれて【朝家】朝廷と同じ【若其弄筆墨以徼利達而已】それが、彼の徒に筆や墨を玩弄して、遊山半分に無益なる文章を作りて仕官の階梯として厚き祿や高い位を求むる目的ばかりなれば○支那は唐宋以來科學の試として文章を以て人才を試驗して任官せる法を設け天下の學者皆多の其れ目的として學問し眞正の教に志ざす者少ければ作者は之を戒めて云ふのである

松之部

大石良雄一

【大石莊】莊は莊園なり【閥族(バツ)】一族こぞつて【浮屠】佛なり僧なり、此にては僧を云ふ【披剃(ヒテイ)】かみをそる【元和元年】後水尾天皇の年號【戰於天王寺】天王寺は攝津大阪にあり、長重德川氏に從ひ大阪を攻めて天王寺に戰へり【國老】國の家老【齷齪(アクサク)自用】物事にこせついてゐうやうならざるを云ふ【韜晦(トウクワイ)】智惠をかくして

大石良雄二

【詔使】勅使なり【國除】國は取りあげらる【泉岳寺(センガク)】江戸の芝にあり【介弟(カイ)】介は大なり、御弟と云ふ意【拱傾繼絕】傾けるを扶けて引き直し絕へたるを繼ぎて存す即ち君家の滅亡を取り直すこと【是要上也】これは、上の者を、おびやかすと云ふものである【玷辱(センジョク)先君】亡君の御名をきづつけはじめる【逡巡(シュン)】しりごみて【澁縮(ジュウシュク)】おつくれる【此城者非祖宗之所築邪】祖宗は、御先祖のこと、赤穗城は長短の先代長友、幕府に請ひ私費を投じて築きし者なれば祖宗之所築と云ふ【藉(タト)令(ヒ)】「よしんば」と云ふ意

大石良雄三

【藩僚】同藩のなかま【外親】緣戚なり【寡居】私共の君、自分の君を他國の人に對し云ふときは寡君と云ふ【明府】閣下と云ふも同し、貴人の敬稱【有所少伸】衆人の願が、少しばかり、叶ふことができ得れば【敢布腹心】おしきつて、心底(シンテイ)を申し上げる【勿與大學君相聞】大學長廣と交通す

ることは無用である【事已至此】大學長麿と交通した【似有所咨稟】長麿に、さしづを、受けたやうに、見えて【紓大學君之禍】大學君が幕府よりうける處分をゆるやかにする【豈無死所哉】國を去つても、武士が命を捨て場所は、外にあるだらう【曉其意】良雄の眞意をさとる【闔城】城下をこぞつて【愕擾】おそれ、さはぐ【辭舍】役所なり【知其有材幹】今まで馬鹿と思ひしもこれぞ始めて良雄のはたらきのあるを知つた【寮僚】金錢のとりたて【怨讟】うらみ、そしる【國猶有人】今までは、國には人物がないと思ふて居たが、こゝて始めて國は亡びたれど、まだ人傑があると悟つた【錢鈔】鈔は紙幣なり【文簿】書類帳簿【目付】幕府の職名監察の官なり【勳閥】そせんのてがら【有以驗於他日】後日に、そのことがらを、しるだらう【冒外家氏】緣戚を外家と云ふ、良雄實は備前の藩士池田某の子赤穗の老臣大石氏に養はれて國となれり

大石良雄四

【託言大學君】いひぐさを、大學君の事によせる、乃ち大學君を、淺野氏の嗣となさんが爲めにて、あるとて云ふ【彈正大弼】官の名、彈正臺は百官の罪ある者を糾彈する役所、長官を尹と云ひ、次官を大弼と云ふ【上杉綱憲】出羽米澤の城主

大石良雄五

【宗室】同姓の本家を云ふ【淺野綱長】安藝廣島の城主【盟冊】血判狀を云ふ【責二人以大義】友信忠雄を責むるに復讐を忘れては、君臣の大義にそむくを以てせり【或有喜色】良雄が復讐を止めたので、自分の生命が、たすかりたと云ふて、喜色がある

【還上杉氏第】還は還の誤り

大石良雄六

【饋舍】寄留せる家【裹鎖甲】くさりじゆばんを、したにきごむ【韋服】なめし皮、火事羽織を云ふ【兜鍪】かぶと【家衆】けらい【烏炭】木炭なり【白襯衣】白色のしたぎ、當時貴人の便服に用ゆ【先君】淺野長矩をさす【號笛】しらせのふえ【無緣寺】今の兩國の回向院【外廳】ももての書院【大目付】幕府の職名大監察のこと

大石良雄七

【劇談】さかんに、はなしする【細用綱利】肥後熊本の城主【松平定直】伊豫松山の城主【常憲公】德川五代將軍綱吉薨して常憲院と謚す【有國家者】國家をたもちて主人となるひと【亦太苦心】矢張り、はなはだ、しんぱいだ【公命】幕府よりの御沙汰【聚徒結黨】徒黨を組む、幕府の時に武士の徒黨を組むは最も嚴禁たり、武士も亦之を恥となせり【委質寡君】我が君に奉公して委はまかすこと、質は我が身體を云ふ、君に仕ふれは、我が身命は君に差し上げる故に、委質と云ふ、又委は置なり、質は贄と同じ、初めて謁見の時、獻上する引手物を云ふ、君臣の義を結ぶ時は、贄を置て獻上する故に、委質と云ふと、兩說皆可なれども、後說尤も可なり【朋黨】組之徒黨

大石良雄八

【忠義天性】忠義は、うまれつきである【酷】きつく【伊藤維禎】仁齋と號す、和泉の人、京都に住し儒學を教へ別に古學の一派を唱ふ【揮灑】自筆書をかいて、自分でたのしむ【所親】親しき人【山

【鹿氏】山鹿素行、甚五左衛門と稱す、儒學並に兵學を以て著はる【唯大學君是憂】唯憂大學君と云へきを倒字法を用ゆるなり乃ち、ひとり、大學君の事が、氣にかける【甘心於大學君】大學君に對して、怨みをはらす【戎具】かたきうちに、もちひし、どうぐ、乃ち兜鍪鎖甲の類【天下翕然】天下いっぱんに【一時文人】そのときの文士、太宰春臺等を云ふ【著論非之】論文を作りて良雄等復讐の事をそしりて、國法を犯し幕府に抵抗する者と云はれた、春臺文集に四十七士論あり【准后】又准三宮と云ふ、昔し王朝時代に大臣の重き者に太皇、太后、皇太后、皇后と同樣なる祿を賜ひ、稱して准三宮と云ひ、又准后と云ふ、德川時代には、その名のみ存せり、實祿はなし【其額】石碑の頭の處

歐陽修等爲諫官　㊞

【如茀斯拔】茀を拔けば外の草も一集に拔けるやうに、賢人が引連れて進むなり【如距斯脫】距は雞の「けづめ」之を取れば、外の雞を害することが出來なくなる【爲此怪鬼輩壞事】本文の返り點は誤れり、當に此怪鬼輩の爲めに事を壞らると讀むべし○鬼輩とは日本で此畜生と云ふが如し、竦夏のことを云ふ

大友皇子

【多通】色々な事に達ずる【材幹】俗に云ふ手腕【親萬機】自分から政治をなし玉ふ【天命不遂】天武帝の爲に亡され玉ひし事【嚆矢】はじめ

甕江文稿序

【同甲】同年【總角】あげまき【源々】つづくさま【交懽】つきあって仲好くする【弱冠】二十歳【笈】書物を入れる箱【遊方】論語に遊必有方とあり、學問とか其他必要の爲にきまった處に往くを——云ふ【枉路】より道をする【楊】こしかけ、今のこたつ樣のもの【被】かひまき【暢達】のびる【放逸】勢よく充分に言ふ事【騁】馬のかける事【悖】もとる【抗】あたる【閥閱】貴顯【閭】町なり【根柢】本づく意【筮仕】華公する事○古は仕官の時に之を占なふ【踧踖】かがまる【冗】多事【攝行】兼ね行ふ【鴻儒碩學】大學者【束書】書物を重ねてしまい讀まぬ事【閣筆】筆を使はずにをる事【昕夕】朝夕【莫予若爲】君に及ぶ者はない【簡勁】しまってきつい【嚴整】しっかりしてまとまる【典雅】定規があって正しい【古作者】古の大文章家【瞠然】驚いて目を張る貌【區處】色手配する【展驥足】駿馬が十分に馳する事が出來る意

送溫處士赴河陽軍序

【伯樂】昔の能く馬を鑑定せし人【冀北】有名なる馬の產地【多天下】天下中で多い【輒】ちきに【士大夫之冀北也】士大夫が多く群をなして居る所と云ふ意【洛之北涯】洛水の北側と云ふ意【石生】生は先生の約語【羅】鳥獸をとる網の事【尤】すぐれたるもの【二縣】洛陽と河南【奚所諮而處焉】どこへ持て往てたづれて處置をしやうぞ【巷處】町ずまい○役所に對して云【小子後世】弱輩ものや後進の人【德業】德は行にかゝり、業は學にかゝる【無所禮於其處】禮遇を施すべき賢人の居なくなつた事を云ふ○昔德のあるものは賢人の家を過ぐる時は必ず禮を施せしもの【聽天下】天下の政事を聽くなり【麾】ひきかって【資】たよりにして【介然】不平

稱】國家が人を得たる事　【後所稱】自分の朋友を失つた事

送木廣子儉之歐洲序

【子儉】木廣重恭の字　【主編】編輯長たる事　【諧謔諷諭】おどけと遖まはしの言ひさとし　【艷稱】もてはやす　【式微】衰微の事　【莊語】まじめの語　【花柳】妓流界　【諤々】直言無數　【聲名】　【參大】大げさ　【瑕疵】きづ　【情勢】事情と形勢　【鼓舞】おだてる　【竦動】しげきする　【牧民】民を治める　【異其撰】撰は事なり　【情實】實際なり　【在予目睫】まぢかに在る事

送石處士序

【河陽軍】當時の藩鎭の名　【烏公】名は重胤　【嵩邙】二山の名　【澗穀】二山の名　【袤】ながは　【葛】くづかたびら　【盂】はち　【事後當成敗】事が後日に成るか敗れるか　【決下流而東注】川下にかけひらひて地勢の低い東海の方へ注ぐ　【熟路】なれた路　【王畏造父】共に昔の上手な御者　【爲之先後】あととなり、さきとなる　【燭照數計而龜卜】あきらかなる事火を以照すが如く、たがわざる事數學を以て勘定するが如く、適中する事龜の甲を燒て占ふが如し　【有以自老】自分隱居の積りである　【師環其疆】軍隊が其邊りをとりまいてをる　【殫亡】つきてなくなる　【歸輸之途】歸はをくる○輸重運搬の道筋にあたる　【治法征謀】民を治むる法と、敵をうつ謀　【宜有所出】どこからか出どころがなければならない　【強委重】むりに重任をゆたねる　【譔書詞】召狀を認む　【馬幣】乘馬と幣物　【書禮】召狀と馬幣　【行事】事は季の誤りである○荷物の事　【罰】杯の一種　【壽】ほよぎこび　【富其家而飢其師】石處士が自分の富を謀つて軍隊のあてがいを惡くする　【惟先生是聽】ひとへに先生の意見を用ゆる　【寵命】ありがたき御沙汰　【便其身圖】身がかづてをすること　【蚤夜】朝な夕なに　【祝規】祝賀と戒め

送石昌言爲北使引

【唉我】自分にたべさせる　【屬對聲律】屬對は對句を作る事、聲律は文句の調子を合はせる事、共に當時受驗の文體なり　【及第第四人】第四人目で及第した　【守官四方】各地方に轉任した　【摧折】吾と我を折て　【折衝】敵の鋒先をくじく　【恂然】おそれる貌　【心掉】ふるひおどる　【誇耀】見せびらかす　【奉春君】漢劉敬が事　【冒頓】云云　【冒頓】匈奴單于の名、此時老たる兵と瘦せたる馬とを軍前に置て漢高祖を誘ひし故事なり　【藐之】藐はかろんずと讀む

送東陽馬生序

【計日】日數を勘定して　【碩師】大先生　【先達】先輩　【叩】たづねる　【塡】みつる　【不稍降辭色】少しも顏色や言語を和げない　【屐】下駄　【鞾裂】あかぎれ　【疆直】棒のやうになる　【媵人】腰元　【享】あてがい　【纓】冠の紐　【容臭】香袋　【肄】さらさら　【奉】やしない　【綴】つらなる　【贗稍】扶持米　【葛】葛のかたびら　【黍】奔に同じ　【鄉人】同鄉人　【夷】やすらか　【夸】ほこる

送董邵南序

【連】しきりに○引續きての意　【有司】試驗官

【利器】役にたつ器量 【茲土】薊趙の地 【有合】薊趙の士と氣が合ふ 【彊】つとむる 【化】氣運 【吾惡知其今不異於古所云邪】今は昔の如く感慨悲歌の士が多いのと違がつて居らないと云ふ事を知らうや違てゐるかもわからん 【望諸君】樂毅の封號 【明天子在上】有司は不公平であるが、天子は聖明であると云ふ事を暗示す

送薛存義之任序

【俎】名を盛る器 【祟】みたす 【滓】はとり 【民之役非以役民而已】役人は民に使はれる者て、民を使ふばかりではない 【食於土】其土地で生活する者 【什一】十分の一 【使司平於平】我々人民の爲に平均を得させる事を掌らしむ 【直】あたへ 【若】なんぢ 【蚤作而夜思】朝早く務にかゝり、夜は又其善いか惡いかを考へる 【考績黜幽】明】昔し堯の世に役人は三年毎に績(功)を考へ、功が幽と云て暗れば黜け明かなれば之を陟せたる事

送賴承緒序

【賴承緒】名は元勉、號は聿庵、山陽の長子、安藝廣島に居れり 【雄偉奔放】つよくすぐれて、勢だちたる文章 【鏗戞高逸】鏗は金鐘の響く音、戞は物の摩擦して發する音、此にては、詩調の高くして、金石の聲をなすを云ふ、高逸は高くして俗を離れている こと 【聳拔巉峭】そびへたちて、けはしい、山に就て云ふ 【滔汨洋洪】水が、はびこりて、さかんなること、水に就て云ふ 【奔湊】奔りあつまる 【濯濯】ぎら〳〵として 【若人】かくの如きひとゝ 【卓犖】超越す 【江門】江戸を云ふ 【赤水之湄】赤羽川のほとり 【秀氣】すぐれたるきしやう 【溢於眉宇】眉の間に、こぼるゝばかりに、あらはれている 【典型】舊法なり、詩經大雅に、雖無老成人、尚有典型とありて、朱傳に典型は、舊法也とあり、型は「かた」なり、此にては山陽の面影(オモカゲ)を云ふ 【詭託之山川茫渺之說】いつはりて、偉人の出つるを茫渺として確知すべからざる山や川が生ずるなどと、怪しき說にかこつける

送岡山縣近衞將卒出征序

【天祖】天照太神を稱し奉る 【御劍之遺訓】叢雲の寶劍を、皇孫瓊杵尊に賜はりしは、尚武精神、御敎訓の爲めなり 【赫斯】赫然と同し、斯は助語、詩經に王赫斯トシテ怒ルとあり 【曆懲】無道をうちこらす、詩經に共汝斯膺、荊舒斯懲すとあり 【五千萬惟一心】五千萬の日本人、皆一心となる○書經に、我有臣三千唯一心とあり 【以敵王所愾】愾は恨怒なり、天皇の御怒なさる者に抗敵する○敵王所愾は左傳に出つ 【簞食】竹の器に入れたる食物 【壺漿】壺に入れたる飮汁○孟子に簞食壺漿以迎王師とあり、即ち敵國の人民が皆自から食物を軍隊に獻上し、歡迎すること 【後勁】あともし 【同縣舊藩諸公】縣を同くしている舊藩主の人々を云ふ、維新以前の岡山福山高梁(ハシ)等の各藩、今は皆岡山縣に隷す 【祖道】送別のこと、離別を送る時、道路の神を祭り、旅行者の幸福を祈ることあり、これを祖道と云ひ、又其の場所を祖筵と云ふ 【錦輝館】東京神田錦町にある集會處 【禹域】支那を云ふ 【官守】官職の役目、勤向きのこと 【戰不敎之民】戰爭を敎へざる、即ち戰法を知らざるの人民に戰をさするは 【古聖人所戒】論語に以不敎民戰、謂之棄民とあり、古聖人は孔子 【拔山之力】山をひきぬく力、強大なる力を云ふ 【蓋世之氣】世間を滿ちおほへる氣象

○項羽の歌に、力拔山兮氣蓋世とあり【徒勇】たゞ勇氣ばかりあるを、徒勇と云ふ【聚此難獲之多譽徳】我が日本國に固有してある、譽美なる道徳を云ふ【玉璽之遺訓】天照太神八坂瓊曲玉（ヤサカニノマガタマ）を皇孫に賜ひしは、光の溫潤にして光ある如く、人々たる者、當さに溫厚武勇を具備すべしとの遺訓である【若艾】艾をたうとぶこと【趨足】あしをあげ待ち兼る樣子【拭目】目をふきのごうて、又いざと云へば、昔より先きに見んとて、目をふきて、くもりなきやうにするを云ふ

贈人赴佛國博覽會序

【火輪船】汽船【萬里比隣】萬里の遠き處も近所隣のやう【賀遷】貿易【使聘】交通【若無足慮者】別に心配を要する事など無いやうになる【蹀血】血を踐む【塗炭】苦痛を云ふ【弱肉強食】禽獸の譬○弱い者は強い者の食い物となる

【易其主】主權者をかへる【掣肘】肘を引て自由にさせぬなり○干渉する事【世農】代々の農家【釋】すてる【耒耜】くわすき【從商賈之後】商人の尻尾に附て【市儈】町人【旺】盛【一空】盡く空虛になる【相懸】相違【不蠶不桑】養蠶の業などをせぬ事【貲】貨財【瘠】飢餓の爲めに瘠せたる人を云ふ【寧可不早爲之所乎哉】どうして早く其處置をしないでよかろうや【與】往く者の仲（ナカ）間に入てある【巧思】技術心【詫新創】新發明に誇る【弋奇贏】不思議なまうけを引かけて取る【今玆】今年と云ふ事【坤輿】地球【蹯】いたる【靴靼】おそろしい目つき【土莊子】昔虎を打殺したる猛士【勿爲魚肉】魚や肉のやうに人に食はれてはならぬ【羣】つよきなり

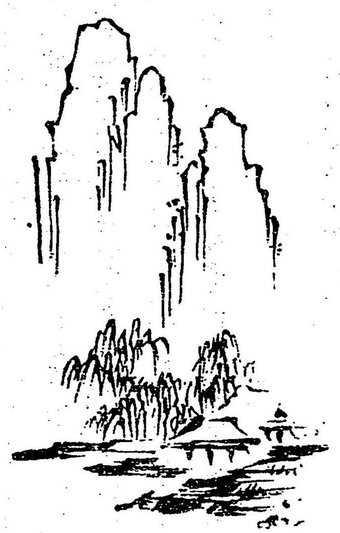
送揚少尹序

【廣受】漢の疎廣と其甥の疎受【供帳】別宴の設備【祖道】道の神を祭りて送別すること【古今人不相及】今人が古人に及ばざる事【爲傳】揚少尹の爲めに其傳を書く事【屬】つゐて【和之】和韻などをする【以官爲家】一生役人をして居る事【歌鹿鳴】鹿鳴は詩經の篇の名、唐の制度にては毎年仲冬、郡縣より受驗者を都へ差出す時、宴會を開いて此詩を歌ふ【鄉先生】老年になり位を辭して故郷に歸り、鄉人より先輩と仰がれ模範とせらるゝもの

贈周瑩歸省叙

【希聖希賢之學】聖人賢人たるべき學問乃ち正學を云ふ、宋の周濂溪の語に士希賢賢希聖聖希天とあり【悚然】懼る貌【千里而遙】千里餘なり【將亦無有強子者乎】何んと矢張り外方より子に是非に

行くべしと強ひて勵むる者がありたのでないか
【躍然（ヤク）】喜びて、飛びあがるさま　【起拜】起立敬禮する　【茲乃命之】先生が左樣仰せ下さる言が乃ち直ちに私を敎へて下さつた事になる先生の御辭を拜聽致しまして私は自から悟りました　【躍然】眼前に、おどりだす樣に、面白く感じまする　【擔石（タン セキ）】石は一石、擔は二石の量



格言

【業精於勤】唐の韓愈の言、業務は勤勉てくわしくなる　【至道】至極の善道　【合抱之木】幾く抱へもある大木　【是則】先生の敬を手本とする　【溫蒸自虛】おとなしく、つゝしみて、自分に心を、さつぱりとして外の事を思はぬ　【志毋虛邪】志は要中になり、又不正なることなかれ　【游居】出入りのこと　【有德】德ある人　【顏色整齊】かほつきが、しつかりとして、即ち眞面目なる事　【中心必恭】心底から、きつと、正しくする、手本にする　【衣帶必飭】衣や帶、はきつと、正しくする、だらしなき風はしない　【朝益】あさは、敎授を受け　【暮習】くれは、溫習する　【小心】心をちらさず　【翼々】つゝしむ事　【一此】これを純一にして　【弟子職】管子と云へる齊の管仲の宣行を錄せし書中の篇の名

格言

【必能忍小恥小忿】大なる智者大なる勇者は必ず能く小なる恥辱や小なる忿怒を忍耐する、小恥小忿を忍ぶこと能はざるは、決して大智大勇にあらざることは、自然に分かる　【欣戚】よろこびと、しんぱい　【不足動其中】その心を刺激するには足りない

格言

【學而不思則罔（クラシ）】罔は昏（クラ）きこと學問しても心に考へ求めざれば、昏くして得ることなし　【思而不學則殆】殆は危なり、如何に考へ求めても、其の事を學習せざれば危くして、落ち付かない　○論語爲政の篇に見ゆ　【學如不及】學問は間（マ）に合はないが如く、

日夜勉強しても【猶恐失之】それでも、とりはなして、しまうかと、心配する況や不勉強に於てをや【切問而近思】人に就て物事道理を尋ぬるには切實に精(ハク)しく詳かに問ひ自分の心に考へ求むるには近く己に反省して考へ思ふやうにすべしと、此は論語の子張篇に見ゆ孔子の弟子子夏(姓は端木名は賜字は子夏)の言なり孔子の言にあらず本文子曰となせしは誤れり【疏食(シ)】玉の食は香しよく、「くらう」と訓す下の食は、香し、くひものなり疏食は粗末なる飯【曲肱(マゲトウヂ)而枕之】肱は「ひぢ」腕ぬるに、枕なく、ひぢまくらをする【樂亦在其中矣】粗食窮乏なれとも、自然の趣を樂める愉快は亦其の中に存在している【於我如浮雲】富貴を絶對に排斥するにあらず、不義なる富貴は我に於て何かあらん、空に浮ぶる雲が我が前を經過するが如く何とも心花思はない(論語述而の篇に見ゆ)

格言

【君子】德ある人【先人而後己】他人の事を先になして自分の事を後にする、即ち人に讓るなり【司馬光】宋の賢宰相溫國公に封せらる【鹽鐵(エンテツ)論】書物の名東漢の桓寬の著

格言

【六尺(リクセキ)之孤】當時の一尺は今の大約六寸、長け六尺許りの孤子、即ち十三四歳なる幼者を云ふ【百里之命】百里四方なる疆土を有せし國家の政事、即ち曾子時代の諸侯の大國の政事【弘毅】志がひろくして、氣がたけきこと【任重而道遠】擔任は重くして、道路は遠い、士の天下國家に對する任務の重大なるを云ふ【己任】自己の責任

格言

【見危致命】危き場合を見ては、身命を差し出し、公家の爲めに盡くして逃るゝことをなさず【見得思義】財利の得を見ては、必らず義の當に取るべきや、否を思ふて、不義に叶はぬ取り方をなさず【論語】子張の篇に見ゆ【忠臣不事二君烈婦不更二夫】忠義なる臣は、二人の君には事へず、甲姓の君に事かへて、又乙姓の君に事へることはしない、貞烈の婦は、一人の夫に事かへて、二人の夫には事へない、一旦嫁したる以上は、終身事かへて、妄に離るゝことはしない【史記】田單の傳【志士不忘在溝壑(ガク)】志ある士は自分の命を棄てゝ、物事にかゝり、溝(みぞ)壑(がけ)の中へ死體を横へ棄るることを忘れない【勇士不忘喪其元】勇氣ある士は其の元(くび)を差し出たして働くことを忘れない【孟子】萬章の篇に見ゆ

改過

【自大賢】大賢人より以下○大賢と雖の意【刻】無情【殆】恐くはの意【規箴(ショク)】いましめる【自歉(ケン)】自分て小とする○愛想をつかす也【皎】【うゆる】【脫然】さつぱりと【甘心於汚濁終焉】けがれた行に滿足して終つてしまう

還附遼東半島詔

【允】ゆるす【簡】えらぶ【會商】會議【眷々】念頭に忘れない事【切偲(セツシ)】切は懇、偲は勉る【唯其然】只右のわけであるゆえに【容之】忠告をいれる【滋(ユ)】ます【渝盟】渝は「かへる」、背くことを云【炳(ヘイ)焉】明白の貌【其關還地措置】其土地還付に係る處置【商定】議定

韓信

【漂母（ヘウボ）】漂は水を以て綿を打つ事○せんたく婆さん　【王孫】貴公子と云に同じ　【屠中（ト）】肉を切賣する者の仲間　【若】なんぢ　【中情】內心　【能死刺我】死ぬ事が出來るなら、己をさし殺して見よ　【俛（フ）】うつむいて　【蒲伏（ホ）】はらばい　【千（オカス）】用ゐらるゝ事を求む　【多道亡】「をゝく道よりにぐ」と讀む　【信度何已數言】信はかるに何既に數々云ふことと讀む○韓信が考へたのに、蕭何が既にたびたび自分を用ゐろと云ふてくれた　【人曰丞相何逃亡】王怒如失左右手】或人が高祖に告げて、宰相の蕭何が逃げましたと云たので、高祖は非常に怒たと同時に、特にして居る蕭何が逃げたと云ふので、兩方の手をなくなしたやうであつた　【若亡何也】貴樣なんて逃げたか　【亡以十數】何十と云ふ程である

【無所事信】信は入用ない　【欲東】漢中より兵を東方に出して天下を爭ふこと　【爲公以爲將】折角も前が云ふとだから、將に用ゐてやらう　【慢】人を見下す事　【設壇場（ダンヂヤウ）】土をつみ上げ地をきよめ神に告ぐるを云

嘉言二則

【伊川先生】宋の大儒程頤（イ）　【相與】同志と云ふが如し　【圭角】かど　【橫渠（ワウキヨ）】宋の大儒張載　【氣合】意氣投合す

岳飛一

【母姚（エウ）】姚氏、支那では婦人は、皆其の姓を稱して、名いはず　【左氏春秋】春秋左傳のこと　【能左右射】左手右手共に弓を持つことてきる　【運用之妙】實際に運び活用していく微妙のことば　【存乎一心】ひとつの心掛け次第である　【南幸】宋高宗金人の汴京を占領せしを以て、江南に行幸せり　【汪廣】汪は汪伯彥、廣は黃の誤りにて、黃潛善のこと、此の二人共に金國と和議をなすことを主張せし者、故に岳飛と合はず　【張所】張は姓所は名　【欒枝曳柴（ランシヒクサイ）】柴は、小薪なり、晉楚の二國、城濮地の名）に戰ひし時、晉の將欒枝、軍卒をして柴を地に曳ひて、偽り走らしむ、楚軍塵の盛に起るを望見して、敵兵ありと思ひ、敢て犯さず、此の事春秋左氏傳に見ゆ　【莫敖采樵】莫敖は、楚の大官の名、楚の莫敖屈瑕、絞を伐つ、絞人敢て出でず、莫敖仍ち采樵者を山に放ち、ことさらに護衛を設けず、以て絞人を誘出せんとす、絞人果して出て、采樵者を執らふ、莫敖因て兵を山下に伏して、大に絞人を敗れり、亦左傳に見ゆ　【瞿然（グ）】驚き懼るゝこと　【行伍中人】尋常の軍人　【或撓或救】中には敵兵を撓まし中には味方を救ふ　【招撫】諸本多く招討に作る、張所を云ふ、所時に招討使の官たり　【太行】地名

岳飛二

【鄂（エン）城】地名　【中朝】中國の朝廷、宋を云ふ　【麻札刀】刀の名　【中原大震】此の時、中原金の所有たり、岳飛の連捷、兀朮の大敗を聞き、大にふるひおそれる　【朱仙鎭】河南省開封府祥符縣西南にあり　【兩河】河東河北　【頂香盆迎】通鑑輯覽歷代名臣傳及諸本皆、項盆焚香迎に作れり、盆を頂上に載せ香を焚きて迎ふるなり、謹て歡迎するの意を表するの意なり　【簽（セン）軍】軍を召集すること　【岳家軍】岳飛の帥ゐる軍を、當時岳家軍と云ふ　【旗榜（ハウ）】宋軍のしるしの旗や立て札　【黃龍府】地の名盖し今の直隸省順天府の境ならんと云ふ　【十二金字牌（ハイ）】皇帝の宸翰十二通　【鹵掠（リヤウリヤク）】鹵は虜と同じ　【撼岳（カンガクス）家難】

通鑑諸本、據の上に據山易の三字あり、此の三字あり
て、文意始めて明暢にして味あり、削るべからず

岳飛三

【河北圖】河北を回復する計略　【交章】互に上書して　【對簿】獄書に對照して詮議すること　【其事體莫須有】確證はなけれども、其事がらが、有りそうなことだ　【何以服天下】堂々たる大將にして有功の忠臣を誅するに、罪の確證なくて、事からがに、金には讓歩すべきことを、婉曲に宋帝に諷したるなり　【太子】金國には、汎く皇族を稱して太子と云ふ、兀朮はもと金帝の一門なれば、書生稱して太子と云ふ　【少保】岳飛少保の官たり故に云ふ　【況其他乎】まして、其の外のことができるか、でき得ない、早々に失敗するだらふ

學說贈葉徂徠（エフソ　ライ）

の技術に、壺に矢を投して、壺中に入るを以て勝となす者あり、支那にて儒者學士後世に至るも、往々傳習して講體の一となせり　【恂々】（シュン）謹直なること

【到河朔】朔は北なり、河北を云ふ到河朔とは金國が河北を侵奪せしを宋に取り返すを云ふ　【德無常師惟善爲師】道德の上には、一定の師範はない、ただ善なる者を師範とする、此は秦檜が和議を主として、時勢に鑑み、金國の強大には宋は敵し得られぬ故に、金には讓歩すべきことを、婉曲に宋帝に諷したるなり　【太子】金國には、汎く皇族を稱して太子と云ふ、兀朮はもと金帝の一門なれば、書生稱して太子と云ふ　【少保】岳飛少保の官たり故に云ふ　【況其他乎】まして、其の外のことができるか、でき得ない、早々に失敗するだらふ

【傳】賢人の書をーと曰ふ、此にては書物の意　【琢】ほって細工する　【璞】（ボク）石の玉を含んでゐる者　【譬諸苗】之を苗にたとふと讀む　【土化而耘薅】（ウンドウ）種を土と一緒にしてしまい、それから草を刈り取たり　【庶草】色々の草　【黃稗】（テイハイ）草や黑黍　【涇濁】（クハンダク）涇濁于俗】俗氣を洗ひ落し　【無幾異】いくらの差別もない　【諒】マコトナリ

岳陽樓記

【謫】（タク）罪せられて　【政通人和】政事が行屈き人民が順ふ　【百廢俱興】是まですたつてもつた種々な事が盡く興つた　【增其舊制】以前の造方より大きくした　【勝狀】すぐれた景色　【銜】ふくむ　【浩々湯々】（シャウ）浩々は廣き湯々は流るゝは貌　【朝暉】（キ）夕陰氣象萬千】朝日の輝く色、夕方の暮れる景其有樣が千も萬も變る　【述】詩ぞ文　【遷客騷人】（サウ）罪を得て左遷せられた人々、詩人墨客　【霪雨霏々】（イン　ヒ）長雨かなしよびしよ　【曜】光　【滿目瀟然】目に餘る處皆、ものさびしゝ　【春和】春がのどか」　【沙鷗】（オウ）沙地に下る鷗　【錦鱗】錦のやうな色をしてゐる魚　【芷】（シ）よろひ艸　【郁々】（イク）かうばしい　【長烟一空】長くたなびいてゐる烟が、づつときえ　【浮光躍金靜影沈璧】月が波に漾う時は金が動くやうであり、靜かに水底にうつる時は玉を沈めたやうである　【心曠神怡】心が廣々してたのしい○神も心の事　【寵辱】（チョウジョク）衆辱と云ふが如し○或は富貴功名或は貧賤窮愁　【洋々】さかんに溢れるやう　【不以物喜不以己悲】外の事物や自分の利害の爲に喜びたり悲しまない　【居廟堂之高】政府に立つこと　【處江湖之遠】長江や洞庭の都を離れて遠き處に遷客となつて居るときは　【徵斯（ナカリセハ）人吾誰與歸】斯のやうな仁人君子がなかつたら、何人にたよろう

賀立皇太子表

【垂統】統は絲口、一一とは血統口連綿として續くと【與天壤無窮】壤は地○天地の永久なるたけ皇室も永久で限りがない【元嗣】大なる御世嗣、皇太子のことを指す【應祥】瑞祥にかなふ【重日月】日を陛下に、月を殿下に譬ふ【天縱】天の存分に附與した【令聞夙達】善き譽が早くより行きわたる【辰儀所表】辰は星辰の辰にて東宮は蒼龍房心に當る、一一は其儀容と云ふと【稠襟】(キヤウハウ)むつきなり【聖眷斯鍾】聖眷は天子の御寵愛○鍾はあつまる【簡】えらぶ【玉册】册は札、詔勅を書きつけるもの○立太子の詔を云ふ【切磋】(キリツボ)劍の名、立太子の時天子より傳へらるゝもの【東儲】東宮のこと【轡】(ロ)大車【副】かなふ【垂拱】(キヨウ)手を「コマネク」「ヂット」して居らるゝこと【異日】他日【匪易】(アラス)容易でない【寔】(キ)まことに【徽】美なり善なり【丰采】(ボウサイ)風丰と神采○御樣子【盛儀】立派なる御儀式

霰關臨幸記

【車駕】主上の御乘物主上を指す【第】屋敷【高爽】(サウ)高臺でさつぱりしてゐる【官署】諸官署【布置】位地【肆廛】(テン)まちみせ【交錯】(サ)互い違い【歷列眉睫】歷は明か、睫はまつ毛○ありありと目にみえる【風帆雲鳥出沒乎碧波浩蕩之中】風を孕んでゐる舟の帆や、雲を掠めて行く鳥が碧の波の廣々と動く間に見えたり見えなかつたり【灣泊】みなと【麕至】(キン)むらがり至る【輻輳】より集る【搖々】びらびら【矚目殊豁】目に入る處の眺望が一段と區域が大きい【莽蒼】あほぐらい【攢】(サン)【翠疊嵐】(テフラン)みどりの色をそろへ、嶂をば重ね【上】主上【臺閣】政府【雲烟】書畫の形容【跋吹鉱】(クワウ)【勒鏗】(カウ)鼓はたゝく音、吹はふく音、共に音樂を云ふ、鏗鏗は聲の盛なる形容【上壽】御祝を申上る【豐豐】ふさふさ、つやつや【六馬】(リク)御駕の事【九重深遠】下々とかけ離れて中る事【搢紳】(シン)公卿【脅制】勢で無理に臨幸を致す【間隔】あけへだて【又】をさまる【駸々】進む貌【故格】從來の格式【懿親】皇族御外戚【勳蕃】功臣【殷阜】さかん【森漫】(ヒヤウ)はひこる【暨】およぶ【至治】此上もない治世【遊豫】豫は樂しむ【冒瀆】(トク)かしけがす○妄に其事を記述する事【蹇々匪躬】易の王臣蹇々匪躬之故と云へる語を取る、蹇々は「つとめはげむ」匪躬之故は自分の爲てなく天子の御爲と云ふ事【豐功偉績】さかんにすぐれたる功績【勒在簡策】ちやんと記るして記錄に載てゐる

き之部

汲黯簡靖

【濮陽】地の名汲黯の郷里　【東越】國の名　【家人】平民のこと　【屋比延燒】一に比屋に作る相接近せる家屋　【以便宜】上の許可を待たずして臨機の處置を爲すを云ふ即ち勝手を以てすること　【持節】漢の時代には勅使は節を以て信とす、故に勅使になることを云ふ　【矯制之罪】矯は託なり、制は勅命なり、勅命に託して偽はりし罪なり、漢の法律に制を矯る者棄市（死刑）とあり　【好清靜】一に清淨に作る、道家の教即ち老子の學説にて淡泊無辨にして休憩靜養を主義とする說なり　【大指】大なる方針　【闚閤】奥向きの門　【列於九卿】漢の時は、太常郎中令、中大夫令、太僕、太理、太行令、宗正、太司農、少府を九卿とし、外に中尉主爵都尉内史を九卿に准列す　【不拘文法】規則法令に構はない　【倨少禮】倨は「オホマカニ、オゴルと」　【吾欲云云】云々は「シカシカ」と云ふて此の如く此の如くとの意なり武帝の言は仁義を施し天下を太平に致さんとの事なれども、其の話が長き故に史家が略して「欲云々」と云ひしなり　【唐虞】唐は堯帝の國號、虞は舜の國號　【汲黯之戇】戇は愚直なること　【奈辱朝廷何】朝廷に立ちて天子を輔弼しながら、一身の利害を顧みて、思ひ切りて、皇帝の失政を諫めざる時は、朝廷に人物なしと云はれて、朝廷の體面を辱しむることになるではないか　【病且滿三月】漢の法百官病氣三月以上になれば、職を免ず　【賜告】休暇を賜はりて在官のまゝ、養生せしむ　【靡之不去】手まねぎして、去らしむるも、去らず、　【賁育】孟賁夏育の二勇士のやうな者でも　【社稷之臣】國家と安危を共にして、天子でも不都合あれば、廢立しても國家を安んずるの臣

季札掛劍

【壽夢】呉王の名　【徐君】徐の國君　【爲使上國未獻】國命を受けて上方の國へ使者として赴く途中なれば、徐君が自分の劍を欲望して居ることを知れども、贈らなかつた、歸りに贈らうと思ふて居た　【懸徐君冢樹而去】一旦心に約束したる事は、違はないと云ふ意で、寶劍を徐君に贈るとてその家の木に懸けて去つた　【丘墓】はかのこと

記承天寺夜遊

【積水】海の事　【空明】月あかりが水に映じた樣　【行藻】「アサノリト」「モ」

記峨眉松

【客蜀歸】蜀に遊歷して歸る　【亭々】すらすら高い　【宛然】さながら　【云去泥土取夾書帙中可四五月不壞】汪君云ふやう、泥や土を挿つてしまつて、書帙の中へはさんでおくと、四五月たつても枯れない　【復培以土水洒之】それから、再び土をかけ水をやると　【勃々然】生長の勢よき貌　【牛載】半歲　【雪盛夏不消】雪が暑中でも消えぬ　【耐澗】水がないに堪ゆる　【孤寄】獨り身を寄せる　【第鄉僻壤荒涼寂寞之濱】片田舍や荒れはてゝさみしい岸邊　【頹廢放棄】だらしなくなり、なげやりにする　【骨力柔脆志氣浮靡】骨も力も脆弱になり、志氣もうはつく　【有守有爲】しつかり守つて己を枉げず、進て仕事をする　【強毅堅忍】意地が固く辛抱強い　【生死可以自主】生きるも死ぬも外界の如何に由らず、自分の心でどうでもするもの　【此豈其識有明昧哉】前の二種の人物は、

其智識に明かなると暗いとがあるのに限つて居らない【孰能無藉於此】誰でも其氣を勵ます原動力をからないわけにはゆかぬ【遊幕】幕府に仕へた事【莫逆交】莊子に心に莫逆とあり、親密の交を云ふ【推闥】おしひらく

公信直諫

【劇飲】ひどくのむ【見納】いれらる○用ゐらる【死有餘榮】死んでも死にばへがある【昧爽】夜の引あけ【參內】入朝

木村貞行傳

【鄙夫】卑むべき奴○吉良義央の事【殞】おとす【有事殿中】吉良を殺せしと【貽】のこす【詬】はぢ【見親近】親近せらると讀む【不次】竄はづれ【心口相應】心に思ふ事が其儘口に出る【不可誣已】爭ふ事はできぬものだ

近古史談引

【簌々】がさがさ鳴る音【涔々】づきづき【喑啞叱咤】前に出つ【悍卒】勇兵【畸】奇【狷介】すねもの【琢磊磈隅】磊は「カド」、かどを彫るとは益〻角を立て、隅は「スミノ尖り」之をどけば益〻出張る、狷介の事を言ふ【爵】杯の一種【引滿】一杯に酒をついだのをのむ【晡間】夕方【兜牟】氣象【姚姒子姬】眞夏殷周四代の姓【黎元】人民

漁父辭

【行吟】あるきながら詩を吟ずる【憔悴】痩せ衰ふ【枯槁】かれ木【三閭】職名【凝滯】執着【淈】沒する事【餔】食ふ【糟】酒かす【歠】す

〻る【醨】薄き酒【深思高擧】獨り醒め、獨り潔き事【察々】讀白【汶々】汚穢【湘流】湘水の流【皓々】まつ白【皭爾】はゝえむ【枻】ふなばた【滄浪云々】――は水名○――の水が清ければ冠の紐を洗ふに宜しく、濁らば土足を洗ふに宜しい、世の治亂に隨ふて事をなすべし

擬褒崇岳忠武王議

【謟】作者の名なり【賊檜】國賊の桑檜【岳忠武王飛】岳飛諡して忠武王と云ふ【椎】うつなり【泣】涙【封】高く土をもると【未愜】滿足せぬ【挺】引く【關壽亭侯羽】關羽、壽亭侯に封ぜらる【通都巨鄉】便利のよき都會と片田舍【孺子】子供なり【純疵互見】善い處と惡い處と兩方見ゆる○是は關羽が忠臣なりしに拘らず一たび曹操に降りしを疵と謂へるなり【食報如此】崩て祭を受けたり爵を授けられたり、忠義の報を得たるとも此やうである【亘古無二】古來二つとはない【古今名將賢相可謂集其大成矣】古今の名將賢相少からぬが、それを一集にして大に仕上げた者と云へる【闔門】一門盡くなり【代爲自反】岳飛に代つて若しや過失でもあつたかと氣を附けて見たのに【織毫】少しも【故事】先例【塑像】土で像を作る【衮冕】衮は龍を畫きたる服、冕は長方形の板で前後に幾條となく玉を垂れたる冠にて帝王の衣冠【樺】ざはレ【如今制】現に今行はれてゐるやり方【捶鍛】むちうつなり【瞎】したしむ【剗夷】切崩して平にする【無嫌】妨なしと云ふに同じ【夷夏】夷狄と中國

く之部

黃州快哉亭記

【肆大】ひろかる【湘沅】二水の名【漢沔】亦二水の名【一舍】三十里【洶涌】勢がすさまじくて、湧くやうである【風雲開闔】雲氣が風に從て、開いたり閉ぢたり【得玩之几席之上】座敷の上で自由にせらるゝ【擧目而足】一寸目さへ擧げれば十分みえる【睥睨】にらみあふ【驰驟】奔走と云ふが如し【颯然】ざつと【風何與焉】風が何の關係があらふ【使其中不自得將何往而非病】若し心の中に、自分で十つ會得した事がないのなら【何處】往ても心配を免れない【坦然】平かなり【不以物傷性】事物の爲に本性を害せられぬ【收會計之餘功】錢穀出入の事を殘りなくととのへた後のひま【放】身體を大切にするなり【蓬戶甕牖】貧賤の住居を云ふ【挹】くむ

華山帝詔求直言

【東闈】東宮【粗聞前事欲圖後治】ざつとばかり昔の事を聞き傳へて居るがそれに因て將來の政治をやらふと思ふ【遊手浮食】無業居喰【約】つゞまやか【讜言】正言なり【面折】君主の非を面前にてくざくなり【尸諫】死した後も諫らずして君の改るを待つを云ふ【聚斂】多が上の非を言ふなり【澆季】輕薄を云ふ【勠】あはす【匡】ただす【逮】およぶ【露其臆】心中を吐出す【仗】兵器

管鮑之交

【管仲夷吾】管は姓仲は字夷吾は名なり【潁上】地の名【鮑叔牙】鮑は姓叔は字牙は名【不以爲言】苦情を、言はない【公子糾死】小白と齊の君たるを爭ひ敗死【九合諸侯】九たび天下の諸侯を會合して、ちかひをいふ、又一說に九は糾の誤にて糾合はたゞしあはすと云ふ【一匡天下】匡は正なり、一ひ天下を正すこと王室を尊ひ夷狄を攘ひしを云ふ【窮而更困】窮は窮の古字、以前より一層困窮した【召忽】管仲と共に公子糾を輔けし人の姓名【不羞小節】小節は小なる行爲なり、小節を汚かすことをはぢざるを云ふ【以身下之】自分よりして管仲の下位に就く【不多】すぐれているとしない

鶴學

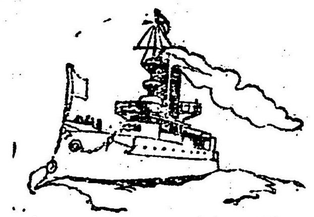
【學之】學をば也【卑輩】なかま【虛而爲盈無而爲有】虛盈有無の四字は才能學德を云ふ

【矜】はこる【使其人資稟雖甚超邁】其人の資稟をしてたとへ甚だ超邁ならしむると讀む【有弗疾惡之者乎】にくまない者があらうや【竊笑】かげて笑ふ【無能自處】自分で無能としてをる

下岐蘇川記

【天保丁酉】天保八年【東山】東山道【十三嶺】美濃にある峠の名【瘏痛】疲れる事【灘聲喧豗】急流のかまびしき聲【巒嶂】山の小にして銳りたるを巒といふ、山峰を嶂と云ふ【猩血】猩猩の血の如く赤き事【水簾】たき【蝀離】きらきら【皴】しわ【大小斧劈】畫家石を描く法に十六皴法と云ふ者あり其の中に大斧劈皴小斧劈皴あり皴の形斧皴を以てくが如くなるより云ふ【荷葉】亦十六皴法の一荷葉は蓮葉なり【披麻】同上の法披麻は麻葉を披くなり【荊關倪黃】荊浩關同倪瓚

貫公望四人皆宋元の間に善畫を以て著はる【摯微】山氣の青繚なる色【盛賡之】漢の人荊州記を著はす【酈道元】北魏の人水道經に注をなす【解縉】精進落ちの事【揩々】力を入れる事【倥傯】せはしく、くるしむ【端午節】五月五日【弔屈之學】楚の屈原五月五日を以て汨羅に投じて死せしより楚人之を哀み毎年此の日筒に米を貯へ水に投して祭ると云へる故事より思ひ付きて云ふ【入虎穴】東漢の班超の語に、不入虎穴不得虎子とあり、虎の穴に入らざる時は虎の子を取ることが得ない、乃ち冒險的行爲をなさざれば成功はむづかしきと云ふ喩なり【探龍頷】千金の珠は必ず九重なる深淵驪龍の頤下にありと莊子說劍篇に見えたり亦危險を冒さざれば奇利なきを云ふなり驪龍は黒龍なり頷下は、あごの下にて人に食らひ付き易き場處なり



教條示場諸生

【相從於此甚盛】此地で自分に就て教を受くる者が多い【恐無能爲助也】別に益を與へることの無いのを恐れる

諺語

【猿狖】猿はてながざる」猴の屬尾長くして善く物に攀ぢ上る狖はをながざる黒猿びり【好事不出門】よき事はなか〳〵外へ聞えない

荊軻入秦

【卓辭】辭を謙遜にして【督亢】地の名【搤其胸】搤は狙うひっつ事【利匕首】鋭利なるあひゞち【焠】毒藥を劍刃に塗り付ける【血如縷】僅かに絲筋位の血が出て【壯士】荊軻みづからを云ふ

乙之部

請褒贈賴襄上書

【惇】あつくす　【永其世】漢なら漢、唐なら唐の時代が永く續く　【撥亂反正】亂をおさめ平げて、正しい治まれる世に反へす　【乾綱】剛健なる紀綱なり　【承乏史官】史官のあき場處を補ふ○就官の謙辭　【日月末光】主上の御餘光　【葵藿微誠】葵藿の日に傾くと云ふ所より忠義のことに用ふ　【偃蹇】驕傲　【立言】文章　【衣被】廣く及ぶこと　【野史云々】太平記を指す　【正閏】正統と閏統○閏とは不正にて北朝の如し　【陵遲】次第に衰ふる事　【僭竊】本位を乘り越え權を竊む　【神器】此では天子の位を指す　【強禦】德川氏を指す　【卽世】死すること　【澆漓】薄くして濁る　【滔々】水の流るゝ貌　【日下】日月低い方へゆく○盛るくなること　【泉壤】地下　【冒瀆宸嚴】恐れ多くも、至尊の御威光を冒して　【屛營】謹みかしこむこと

孔子

【佐宋】宋に佐たりと讀むべし、宋の輔佐役たりしを云　【三命】臣民の階級の進むは皆君主の命に出づる、一一は三度命を受けたる事、三等進みたること　【滋益】二字合せて「ますます」と讀む　【鼎銘】鼎は家廟の祭に用ゐる食器、銘は祖先の功德或は自分の戒の語で、書たり刻したりするもの　【一命】士分となる事　【僂】一寸背をまげる事　【再命】大夫となる事　【傴】「かゞむ」　【三命】上大夫となる事　【俯】殆ど「うつむせ」になる　【循墻而走】「かきね」にそふて歩む○敢て路の中央を闊歩しない　【饘】粥の濃きもの　【糊】やしなふ　【紿】音きつ　【陳俎豆】陳は「ならべる」、俎は祭祀に肉を盛り、豆は菜菓を盛る器なり　【設禮容】儀式立てをする　【長】成人してから　【季氏】魯の公族三家の一　【吏】役人○是は倉庫の役人になられた事を謂へるなり　【料量平】出入が正當で、多寡が違はない　【司職吏】職は獸の「もり」、牛羊を畜ふ職掌　【畜】牛羊等　【蕃息】ふえる　【適】「ゆく」と讀む　【待以季孟之間】魯の國の季氏と孟氏に於ける中間の待遇　【川之不終】しまいまで用ゐられなんだ　【止之】孔子を陽虎と間違へて拘留に及んだ　【醜】「恥つ」と讀む、靈公が夫人南子と同乘し孔子を次乘として市中を乘り廻した故に孔子は恥ぢられたり　【伐】拔其樹】木を伐り倒して孔子を壓殺せんとしたるなり　【東門】城の一一　【顙】額なり　【項】うなじ　【皐陶】舜の時の司法官にして大賢人　【子產】鄭の君子にして外交家　【要】腰に同じ　【纍々然】

よはりはてたる形容　【喪家】喪式のゆった家　【河】黃河　【竇鳴犢舜華】二人共に晉の賢大夫　【洋々】盛なる貌　【濟】渡ち　【命】天命○晉の賢人が既に殺され、往ても益なく、事の此に至るは命也　【葉】「せふ」と讀む　【兕】野牛の如き動物、一角にして青色　【率】「したがふ」と讀む、取りしきつて居る事○陳蔡の兵卒を指す　【吾道非邪】斯く彼等に敵視せらるゝは、自分の道が宜しくないからであるのか、一體此方は何故に此樣の場合に遭遇したのであらう　【何病】何も氣にする事はない　【然後見君子】君子であるから容れられない、容れないので始めて君子がわかる　【書社之地】二十五家を里とす、里に各社あり○一一とは其社の人名を帳簿に書き載せたるもの、○七百里の土地人民　【令尹】執政楚國の稱　【序書】書經を次第する　【繆】「ぼく」と讀む　【子產】鄭の君子にして大賢人　【脫而】老年にて　【三千】三千篇　【彖、象繫】

辭、說卦、文言】皆篇名　【韋編三絕】昔の書物は竹の札を皮にて綴りたるものにて、韋は「なめしかは」三絕は三度きれた事、讀方の烈しかりし證據　【隱哀】隱公哀公　【絕筆於獲麟】麒麟を得た所で記事を止めた　【子夏之徒】子夏は孔子の門人中特に文學に秀でたる人　【贊】たすくる○不能一一辭一言一句も噯を容れる事が出來ない　【六藝】禮、樂、射、御、書、數

孔子世家贊

【高山仰止景行行止】止は語助にて意味なし○高い山は打仰きて見、大なる行はそれに倣つて行ふ　【鄉往之】その方に向ふ　【適魯】魯の國にゆく　【車服禮器】車や衣服や其他禮を行ふ道具　【低回】立ちさまよふ　【折中】眞中の道理を定める

答會子固

【不爲問】御尋ねを、しなかつた　【鄉往】嚮嚮に通ず、心がむかいゆくこと　【讀經】聖人の經書を讀むに　【故語及之】前書の語にそのことを御尋ねした　【某】王安石自から云ふ　【教之】某に御答へがあるに　【子固讀吾書每如此】足下が僕の書を讀むつねに以上の如く、十分に書中の言を理會しない　【全經】完全なる聖人の經書　【難經】支那古代の醫書、黃帝の傳授と云ふ　【素問】同上　【本草】草木の藥料となる者を示せし書、又神農黃帝に始れりと云ふ　【先王之時】昔し聖人の王となり實地を尊べる學問の時を云ふ　【不如是】以上の如く博く學問せざれば　【盡聖人】聖人の道を十分に知る事　【揚雄】西漢の學者　【墨晏鄒莊申韓】墨翟、晏嬰、鄒衍、莊周、申不害、韓非、皆周代の學者各著書あり　【所

以明吾道而已】世間の書中異學ありと雖も、理を知る者は、能く自から擇んで參考とすれば、正に聖人の道を明にする所以なり、何を聖經と併せ讀むを妨げん　【視吾所知】自分即ち王安石が今までに已に知れる所を注意して見よ　【非知我也】吾を異學を以て亂たすべき者と思ふならば、實に吾を知れる人でない　吾は異學で亂される者でないぞ　【以言相向】尚はたかぶると空言を以て互に自慢する事

答蘇武書

【李陵】李陵漢の將となりて、匈奴と戰ひ敗れて匈奴に降る時に、友人蘇武漢の使者となりて匈奴に至り、囚はる、李陵武に降を勸むれども武聽かず、後武漢に還る、陵匈奴の使漢に至る者に託して書を贈る、武答書あり、陵又重ねて答ふ、是れ此の書なりと云ふ、然れども後人の僞作なり　【子卿】蘇武の字　【足下】足下まで〳〵との意にて、先方を斥して云はぬ、尊敬の辭　【策名淸時】國家淸明の時に仕かへる、策名は、昔し臣が君に事へる時は、君の簡に臣の名を書するなり　【遠托異國】遠く異なりたる國に身を置く、此は李陵自身を云ふ　【依依】心が其の方へ引けること　【遠辱遠答】前度に李陵より蘇武に與へし書に躁武が答書をおくりしを云ふ　【異類】種類の異れる匈奴人　【韋韝毳幕】なめしがはのこて、射時に用ゆ一說に、柔皮にて造れるひもで、帳幕を縛り張弛すべき者と云へり、毳幕は毳にて造れるまく　【羶肉】なまぐさきにく、牛羊等の肉　【酪漿】牛羊の乳汁　【玄水】あつきこほり、冰厚ければ其の色黑し故に云ふ玄は黑なり　【胡笳】一種の吹笛蘆葉を捲ひて造る畢篥に似て孔なし昔し支那の李伯時西戎に入り作くる所と云ふ　【臨年被戮】老年になりて誅戮せられた、漢の武帝李陵の匈奴に降るを聞き詔して李陵の家

を族滅せり【禮義之鄉】禮義の行はるゝ國即ち漢を云ふ【傷已】已は曰の誤りにて宜く傷曰と讀むべし本書の點は謬れり、君親の恩を背棄して長く夷狄の域に處するは已に自から傷むべきを云ふなり、此の二字は下の又自悲矣と相對するなり、又と云へる字は、此句よりして生ずるなり【先君】陵の亡父、名は當時、李廣の子【孤負】そむく【刺心】むねをさして【於我已矣】國家は我に對して見限りている【不入耳之獄】きゝでも、面白からざることがら【先帝】漢の武帝【絕域】遠き國即ち匈奴【天漢】漢の國を云ふ【新羈之馬】あらたての騎兵を云ふ【搴旗】敵軍の旗を拔き取る【功難堪矣】功が過多にして、もちきれない、自分ながら、非常無雙の功勞と思ふた【客主】我は客兵、匈奴は主兵【步馬】我は步兵匈奴は騎兵【不任干戈】干戈をもつことができない【振臂】指揮すること【爲陵飲血】淚が竭くると、血が出つる、之を血淚と云ふ、飲血は血淚を飲むとの義にて非常に感奮せる極、血淚を流して悲むを云ふ【賊臣】單于漢に伏兵あるを疑ひ引き還らんとす、漢の將管敢と云へる人時に降りて匈奴の軍に在り、單于に李陵の軍は後援なく射矢も盡きんとするを告ぐ、匈奴因て大に新兵を進め戰ひ、陵竟に敗れて匈奴に降る【困於平城】平城は地の名、今山西大同府大同縣にあり、高祖自から將として韓王信の(淮陰侯韓信と別人)を擊ち遂に平城に至る、匈奴に圍まられ七日食はず、陳平の秘計を用ゐて始めて免るゝを獲たり【況當陵者】李陵の位地に居る者即ち李陵自身を云ふ【執事者云々】漢の朝廷にて政事をなす者が李陵を罪することの深きを云ふ【有所爲也】或る一つの事をなさうと思ふてである【前書之言】李陵が前度に蘇武に與へし書中の言なり【報恩於國主耳】これが、即ち前書の言である、匈

恩を天子に報じ奉らんが爲めのみである【虛死不如立節】むだじにには、みさをを、たつるに、しかず【滅名不如報德】名譽を滅してなくするは、恩德に報ゆるに如かずと【范蠡】越王勾踐の臣【不殉會稽之恥】殉は「シタガウ」一身をなげうつこと、越王勾踐呉と戰ふて敗れ會稽山に據む時、范蠡は勾踐の爲めに戰死もしなかつた【曹沫】魯の莊公の臣【不死三敗之辱】曹沫魯の將となり、齊と三戰して三敗せしも死せず【卒復勾踐之讎】范蠡は、しまいに、勾踐のかたきを、うつた、勾踐呉と和せし後范蠡大に爲めに力を國政に盡し、遂に勾踐を輔け呉を伐ち之を滅せり【報魯國之羞】魯國のはぢをむくゐてはらした、魯三敗の後、地を齊に獻じ、和を請へり、後魯君、齊桓公と柯に會す、曹沫匕首を執り、桓公の獨居を窺ひ劫かして盡く齊の侵せる魯の土地を回復せり【繩墨此耳】ひそかに、范蠡又は曹沫の遣り方を匈奴に、しむけやうと思ふて居た、此れが國主の恩を報ずるのである【骨肉受刑】漢、李陵が匈奴に降ると聞き悉く陵の一族を誅滅せり【蕭樊囚縶】蕭何、樊噲、皆漢の功臣なれども讒言を蒙り一時獄に投ぜらる【韓彭菹醢】韓信彭越亦皆功臣なり叛逆の罪を以て誅せらる菹はひたしもの醢はしゝびしおなり乃ち殺して其肉を菹や醢にーと云ふ【鼂錯】漢の孝景の時諸侯の勢力を弱はめ帝室を強くせんと謀りしに、諸侯の反抗に逢ふて竟に帝に誅戮せらる【周魏】周勃亞相となり竇嬰魏其侯に封ぜらる、共に讒を以て亞夫は孝文の朝に獄に繫かれ、嬰は孝武の時に死刑に處せらる【佐命】天命を以て帝王たる者を佐けたること【賈誼】孝文帝の學者【亞夫】孝景帝の大將軍【命世】世に名高きこと【彼二子】范蠡と曹沫を云ふ【遐擧】遐は遠なり、遠大なるしごと【陵先將軍】李陵の祖父、前將軍李廣なり漢の

有名なる將なり 【貴臣】大將軍衛青を云ふ 【朔北】北方を云ふ朔も亦北と云ふ事 【皓首而歸】蘇武壯年を以て匈奴に使いし、留ること十九年にして歸る、鬚髪盡く白しと云ふ 【老母終堂】老いたる母は、なくなりた 【生妻去帷】いきている妻は、他人へ嫁した 【茅土之薦】昔し天子が諸侯を封ずるとき其方面の土を茅土に載せて賜ふことあり、それより土地を天子より拜領するを云ふ 【千乘之賞】昔し大國の諸侯は兵車千乘を出たすべき土地を領するより大國を賞として賜はるを云ふ、凡そ兵車一乘に、甲士三人步卒七十二人の定員とす、千乘は此の數より推して知るべし○漢の何義門は漢の蔡邕の獨斷と云へる書に漢興、惟王子封爲王者、謂受茅土、其他功臣以戶數租入爲節、不受茅土、不立社とあるを證として、本文の漢人の作にあらざるを論ぜり、亦參考とすべし 【孤恩】孤は、そむくこと 【陵誠能安】たとひ、李陵自分が、忠誠にして能く事に死するに安するも 【北闕】禁闕なり 【刀筆之吏】獄の吏を云ふ 【弄其文墨】その文章を勝手に製造する、即ち勝手に李陵の身を罪におとすことを云 【生死辭矣】これが一生の別れじや 【幸謝故人】とうぞ、我が舊友に宜くたのむ、乃ち當時の執政者大將軍霍光上官桀等皆舊友たり 【足下胤子無恙】足下の子は、當地で無事である、蘇武匈奴に在る時、匈奴の婦人を娶りて子を生めり通國と名づく 【時因北風】此の北風は南風の北に向へるを北風と云ふ通常の北より吹く風を云ふと殊なり漢は南にあり、匈奴は北にあり故に漢より匈奴へ好便ある時を云ふ 【德音】ありがたきたより

答毛憲副書

【太府】太は尊ぶ辭、部下の役所より被轄の役所を尊

びて云ふ此にては貴州の巡撫府を云ふならん 【請謝】挨拶(アイサツ)をすること此にては不都合の謝罪なり 【道誼】誼は義の本字 【言無所容】御禮の申し上げやうがない 【差人】使(ツカヒ)の人なり 【龍場】王守仁時に貶されて龍場驛丞たり 【非某使之】某は守仁自から云ふ 【其爲取辱一也】どちらも、同じく、恥辱を取ることになる 【廢逐小臣】王守仁自からを云ふ 【剖心碎首】むねをさき、かうべを、くだく、即ち身を誅戮さるるも 【瘴癘蟲毒之與處】瘴癘は一種の熱病、支那南方に尤も盛に行はる、本文もと與瘴癘蟲毒處となすべきを、例の倒句法を用ゐて、與の字を下に移した、故に之の字を中間に加へたのである、此は修辭法の定則である、下の句も同樣なり 【魑魅】山林に生ずる一種の妖怪、オバケ 【魍魎】木石より生ずる一種の妖怪物、又水中の怪物をも云ふ 【日有三死】多く死ぬる場合がある、三は多數を意味して云ふ、必らずしも三度に限らず 【則亦瘴癘已而爾】已而爾は、活版の誤植、而已に作るべし、矢張り瘴癘が身に祟をなすと同じことで、仕方がない 【某也受教多矣】毛憲副よりの來書によりて、自勵の心を起したれば、即ち毛憲副の教を受くることが、多いと云べきだ

國書

【相依脣齒】脣と齒とは互に中外に依りて扶くるものなれば、日清兩國の相離るべからざる關聯あるに比す、脣齒相依はもと左傳にある語 【拏(ムシヨ)凶】凶徒を拘捕すること 【懲辦】懲治すること 【民教仇殺】民は平民、教は教徒とて支那人民の基督教を奉ずる者を云ふ、此の二者は互に相惡むこと久し 【祖(クンスニ)民】平民をたすけ 【我兩國】清國と日本 【虎視耽々(クン)】耽々は目を張りてねらむこと、虎が物を視てねらみつ

ける如く、何にか隙があれば、乘ぜんとして居る模樣なり【肫切】肫は懇誠なること【執牛耳】盟主となりて○もと會盟の時牛を俎に載せて盟をなすに會主たる者牛の耳邊に位するより會主のことをと云ふ

國書

【確耗】確報なり【各國欽差】各國の公使【署員】公使館員【某國使臣】獨逸國公使【上月】前月なり【起見】意見を起つること【開衅】開戰のこと

踰碓冰嶺過淺間山記

【諺俗】諺は此處にて田舍歌の意【愛子羈旅】かはゆい子には旅をさせろ【濟】レつ【瘡珠攢簇】かさぶたがあつまる【大戚】非常になげかはしい事【紛華】にぎやか【裙屐子弟】きやしやの若者【筋骸不相束】筋肉にしまりがない【端午】五月五日【啓行】出立【候】まつ【欵】たのしむ【盤饌甚殷】食物が尤も御馳走であつた【翕】あつまる【礉】小石【牙角】石のかどの形容【翳薈】おひかぶさる【坌入】あつまつて這入てくる【舁夫】かごかき【箏櫂】たけのこ【建瓴】建は覆ふ、瓴は瓶、屋根の上より瓶の水を倒に流すやう【一炊頃】一寸飯を炊く位の時間に【挾纊】綿入をきる【平楚】平野なり【物象頓異】有樣が忽ち違ふ【窰中】陶器を作るかまど【岳蓮】富士を云ふ【靄】つづく【華表】とりゐ【楔】兩傍の柱【輥出】ころび出る【深黝】つく黑ずむ【朝山】登山なり【磊磈】ごろごろ【滾】流るゝ貌【浩盪】水がはびこる貌【烏有】なくなる事【墮地以來】生れ落ちてから【批】本義は擊つ○評をする時に點など打つより云ふ【刺】つゞく事

昆陽之戰

【狗】となふ○略する【長人】背の高き人【級】ーは等也、秦の法律にて敵の首級を斬るものは爵の等級を進む、故に首は級を以て數ふ【敢死者】今日の所謂決死隊【中堅】中軍の手強き處【殿戰】をののきふるう【牧守】州郡の守令を云ふ

後赤壁賦

【是歲】前の壬戌の年【如此良夜何】此好い夜をどうするぞ、勿體ないではないか【薄暮】くれがた【安有所得酒乎】どこか酒を手に入れる、所がありさうなものだ【謀諸婦】妻君に相談してみた【待子不時之需】臨時に御入用の用意に備へおいた【曾日月之幾何】はて、どのくらい日數が立つたであらうか、まだいくらもたゝないのに【江山不可復識】前に遊んだ時のやうな萬頃の茫然と云ふ景色もなく、殆ど其時の山水は別物のやうで今、認める事ができない【攝】かゝげる【蒙茸】草の「もじやもじや」【虎豹】奇石の形容【虯龍】古木の形容【馮夷之幽宮】水神の住はるゝ奥暗いところ【剽然】さけるやうな音【悄然】愛に沈む形容【凜乎】ぞつとよう【聽】まかす【翅】つばさ【玄裳縞衣】下は黑く上は白く【憂然】かきりとした聲【翩躚】ひらら【俛】うつむく【嘯】昔【昔】昨日、又先頃

吳楚七國之反

【博】雙六をする【博局】雙六盤【提殺】打ちころす【吳過可倒】吳の領地が大きすぎるから倒つ

たが宜しい　【反亟禍小】謀反は早くをこるが、害は小さくして早くすむ　【有吳約】共に謀反を起す約束　【有緩急】若し一大事があつたならば　【復諸侯故地】削り取つた領地を返してやる　【兵可無血双而罷】一人も殺さずして軍がすむ　【同産】兄弟の事

吳越之爭

【闔盧】かつりよと讀む　【員】　【胥】　【郢】音えい、楚の都　【而忘】而は汝とよむ　【而父】而の字前に同じ　【夫椒】椒音せう　【餘兵】うちもらされの兵　【棲】其形勢、鳥の木に棲むと同じき故に云ふ　【太宰】官名　【伯嚭】嚭音ひ　【懸膽】膽は味苦きを取る　【坐臥】平生起臥する室なり　【嘗】なめる　【女】汝なり　【種】音しよう　【譖】讒言する　【怨望】怨を抱くなり　【屬鏤劍】劍の名　【樹吾墓槨】吾が墓に槨をうえよと讀む、槨は「ひさき」　【可材】材とすべき也と讀む、王の棺を造る木になる　【鴟夷】馬の皮で作りし囊　【越】越の國　【生聚】人口を殖し、民力を休養する事　【教訓】訓錬する事　【北】にげる　【成】和議　【無以見子胥】子胥に合はす顔がない　【瞑目】目や顔を隠すための被り物　【喙】口なり　【裝】荷造して　【私從】從者　【治産】産業を營む　【喟然】喟は嘆聲　【布衣】平民と云ふが如し　【不祥】不吉　【相印】宰相の印○印は役人が其職々に任官の日に受け解任の日に戻すもの　【貲】財産　【術】金持になる方　【椓】めす　【擬】比する

古岳庵記

【王摩詰】唐の詩人、名は維、摩詰は其の字なり　【衲】僧衣、即ちころもなり、因て僧侶の自稱となる

【黛色欲滴】山の青々として濃かなる色が、水のしたたるばかりに見へる　【巨觥】大杯　【婆娑】舞ふ貌　【先生之所以不記乃所以記之也歟】先生が文章に記さないが、反りて記さると同じ道理である、乃ち禪教より云へば、言はずして悟らさしむる筆法て、あるとなり　【破顔微笑】顔の相を崩して、につこりと笑ふた

さ之部

鷹院公主

【仙輿】御車を指す　【孤鳥寒花】公主自分に譬て云はるゝ　【春澤日光】聖恩に譬ふ　【穹蒼】天のこと○天子に譬ゆ

貞時行脚

【隱身】隱居する事　【出汲】外へ水汲に出る　【貧頽】貧乏やつれ　【蔗】以前の事　【曲悉】委細　【慝】邪事　【祚】運なく

三計塾記

【三計者何】三計とは何(ナ)を云へるかと尋ねて次きに一日之計云々であると答ふるなり右機の書き方を自問自答と云ふ　【一日之計】一日の間の計を立つるそのあさにある　【一年之計】一年間の計を立つるは年始の春にある　【一生之計】一生涯の計を立つるは其身の少壯時代にある何んても物事の計を立つるは早き内でなければ不可なり○月令廣義に一年之計在春一日之計在寅寅の刻今の午前六時頃)一家の計在和一身之計在勤とあり三計は此の語より變化して出てたるなり　【晏起】おそく、おきる、あされの事　【春嬉】春の陽氣にうかれ、たのしむ事　【此道】學問をいふ　【氣盛則動於物】少年血氣盛りは外物の欲に心が動かされて、もちつかない　【君父資我】君や父は自分に資本を予へて　【而終不能自標異於世】自分からして世間としるしだちて、ちがうように、することができずと、しまうて　【蠢蠢(シュン)乎】うじ〳〵とうごいて　【走尸行肉之中】むざ、むちうのなか、拾遺記に任永曰夫人好學雜死如存謂之行尸走肉行尸肉は死尸にして能く行き死肉にして能く走るが如き者にて身體は動けども精神はぬけがらてある　【三者之計】初めに云へる三計　【月覆一日】けふも、あしたも、と、だんだんに進みて　【心與習化】自分の心が、毎日の習ひくせと共に變化して善に近つたり　【邪爲(バク)】とうのきて　【不接于心】心に近かづけない　【爲之】病と稱して廢頽をよけるを云ふ　【肉袒負荊】昔しの謝罪の式なり、はだをぬぎて、いばらの木て造りたる杖をせなかに負ふて　【刎頸之交】くびを、はねるつきあい、其の人の爲めには命(イノチ)をなげだして救ふと云ふ極めて親なる交りを云ふ

雜說

【槽櫪(ソウレキ)】槽は鳥獸を養ふ食器、櫪は厩のねだ者】馬を養ふ者と讀む　【不知其能千里云云】此馬が千里の駿足てあると云ふ事を知つて食ふのではない　【策之】鞭をあてるなり

小霧瀑記

【備之後州】備後國　【枕】臨む　【治春秋】孔子の著はされた春秋の書を研究する　【家書】自分の家族の手紙　【汨】亂す　【性靈】英語「スピリット」　【發揮】ふるひ出す　【勝槩】善い景色の處　【悠遠】はるかなる事　【退老】隱居

諭陸海軍人勅

【殷】ねんごろ　【客歲】去年　【赴事】戰爭に從事する　【祁(キ)寒】大寒　【講晝警防(チウ)】謀を立て防備を誦ずる　【振古】古昔　【四表】四方　【服膺】心中に取守る　【癈罷】不具　【賴治平之慶】平和を樂しむと云ふ事　【遡遠】遠は遥　【報効】報恩

し之部

士規七則

【嘉言如林】よきことば、即ち模範とすべき格言は林の木の森々たるが如く多いことだ【躍々（ヤク）】活動して【卻讀不行（ムモ）】即ち若し或は、たとひの意に用ゆ、此にては、たとひ讀むとも、行はずとの意【亦詎傷哉（ナンゾ）】詎は何字書に未知の詞也、豈也何也とありて、此にては「なんぞ」と讀む、傷は痛なり、何ぞ傷害あらんの意なり【七則（ソク）】則は「もと佛經より出づ、條と同義に用ゆ、七則は七ケ條なり【萬葉一統】葉は世なり、幕世一系の皇室である【邦國士夫】くにぐにのさむらひ【世襲祿位】祖先代々祿や位をつぐ、此は作者時代は封建制度の世態あるにより云ふなり【人各養親】國君士大夫より以下は支配する、民は百姓を養育する【君臣一體】君と臣と、分限はちがへども、同一の身體の如く離れ得ない【忠孝一致】君に忠と親に孝とは、事はちがへども、歸着する所は一つである、致は「むねとするもむき」なり【義因勇行】道義も勇氣によりて行はる、勇氣なきときは、道義は、實行ができぬことあり【勇因義長】勇氣も義によりて長して盛になる、義によらざれば勇ひ血氣の勇になりて尊ぶに足らずつまり義と勇とは互に關連して離れ得ない【文過（カザル）】過失をかざりて、つくろう事【尚友】尚は上なり尊なり、上進みて古人を尊び友とするを云ふ孟子に尚ニ友古人一の語あり、孟萬章篇に以レ友ニ天下之善士一爲レ未レ足、又尚論ニ古之人一、頌ニ其詩一讀ニ其書一、不レ知ニ其人一可乎、是以論ニ其世一也、是尚友也とあり【成德達材】德行を成就し、材術を進達すること此亦孟子にある語【師恩】教師の恩誼【友益】朋友の利益【死而後已】諸葛孔明出師表中に

鞠躬盡力、死而後已の語あり【舍是】死而後已の語を外にしては【三端】三つの事件【成人】完成なる

朱雲請斬佞臣

【安昌侯】安昌に領地を賜はりし侯爵【平陵】漢昭帝の陵墓【肥牛亭】肥牛は地の名、亭は後世の驛の如き者、秦の法に十里に一亭あり、漢も亦同じ、張禹請ふて己が家墓を作らんと欲するなり【衣冠所出遊道】漢の制度に、先帝の陵墓に藏せし衣冠を乘輿に置き、先帝生存中行幸の儀の如くして、每月陵の附近を巡回する儀あり、之を衣冠出遊と云ふ、其の往來に當る道路を云ふなり【毀（スナハチ）以起居聞（アク）】每度飲食寢臥の情況を、奏聞するを云ふ【拜禹牀下】弟子、師に見ゆる時の禮を用ゐるなり【言淺異之應】天變地異が政事に關して見はるゝを云ふ【讒（ザン）切王氏】讒切は、そしり、きびしく論ずるなり、王氏は、時の皇太后の里方にて、即ち王根等の一門なり漢の時、日食地震水災等の變あれば、政事の過失を天より譴むる者となせり、故に災異の見（ケン）はるは、全く外戚王氏が政事を專にする結果なりと云ひしをそしり、議論する【未有以（テ）明見（スルニ）】天子も吏民の言に動かさるゝも未だ其の言が果して當るや否やを、明白に見定めることはない【春秋】孔子の修正せられし魯國の歷史の名【夷狄】夷の上に漢書には或の字あり【聖人罕（マレニ）言命】論語子罕の篇に子罕言レ利與レ命與レ仁とあり、利益や天命や、仁などは、皆な人が誤解を生じ易きを以て、孔子之を言ふこと罕なりとす【不語怪神】論語に子不レ語ニ怪力亂神一とあり【性與天道】論語の篇に子貢曰ク夫子之言ニ性與ニ天道一、不レ可レ得而聞一也とあり、孔子は未だ嘗て性命の理及天道は幽遠なれば、平生妄に云はざるを云ふ

【子貢】姓は端木、名は賜、子貢は其の字なり　【淺見鄙儒】あさはかなる、いやしき學者と云ふことにて、當時上昇して王氏を譏切する一輩を云ふ　【故桃里令】現任の令にあらず、故に故と云ふ桃里は縣の名、令は縣令なり　【尸位素餐】尸は、主なり、素は空なり、餐は食なり、尸位とは、其の職事を行はず、但其の地位に居るのみ、素餐とは、材德が官に相當せず、空しく祿を受くるのみ　【鄙夫不可與事君】いやしき下劣なる人は相手になりて君へ御奉公することは、むつかしきことなり、論語に子曰鄙夫可與事君也與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣とあり　【尚方斬馬劍】尚方は供御の器物を作くる官故に斬馬劍あり、斬馬劍は、劍の鋭利以て馬を斬るべきより云ふ　【居下訕上】論語に惡居下流而訕上の語あり、訕は謗なり、下ざまのくせに、上位に居る人をそしる　【殿檻】御殿の軒下（ノキ）のてすり　【下從龍逢比干（ホウヒカン）】天子に對して云ふ、故に下と云へるなり、龍逢は夏の桀王を諫めて殺されし關龍逢なり、比干は、殷の紂王を諫めて殺されし王子比干を云ふ、陛下の御前を下り退きて龍逢比干と共に地下に遊ぶ即ち死して彼等と同じく忠臣と呼ばれる　【未知聖朝何如耳】聖朝は神聖なる朝廷、當代の朝廷を云ふ、漢も亦將さに夏殷の如く亡びんと云ふなり　【然後得已】朱雲を殺す事は止みた　【輯之】折れたる檻を繕ぎ合はす　【以旌直臣】旌は表なり、表彰する事

眞將軍

【騎送迎】騎馬て送り迎へる　【殽（コウ）】はる　【持滿】ぱいに引つめてゐる　【居無何】さうしてゐる內○間もなく　【節】わりふ　【爲動】畏敬の念を生じたる事　【式（ショク）車】車の横木に倚て禮をする

秦密諷天

【蜀志】三國志の中の一一　【餞】送別をする　【詩】詩經の事　【鶴鳴九皐（カウ）聲聞于天】皐は澤水の溢れ出て穴となる所、九と云ふは深遠なる意○君子が隱れてゐて、其名聲の高く擧るに譬ふ　【天步艱難（カンナン）】天運がむつかしきことなれども此にては天の步行が艱苦すると云ふ意

支那歷朝興亡

【宇內】せかい　【開創】國がひらけて　【異姓更王】異姓の人が、かはる、おはる、帝王となる　【中國】支那の事　【七王國】秦、楚、齊、燕、韓、趙、魏　【五胡】匈奴、羯、鮮卑、氐、羌　【僞朝】眞正の朝廷に對して云ふ朝廷と稱すべき國にあらずして僞號せる者の朝廷を云ふ　【倏起倏滅（シユクキ）】たちまち起り、たちまち亡ぶ　【尊號】天子の號　【剏建（サウ）】はじめたてる　【禮樂之邦】古代支那の帝王は禮法と音樂とを以て政事教育の主要なる者となせり故に後世政教の明かに整くる邦をーーと云ふ　【反復】くかへす事　【依然】あひ、かはらず　【範型（ケイ）】一定のいがた　【西國】西洋各國　【運祚】國運帝祚なり

照會、丁汝昌呑日本海軍中將伊東祐亨

【丁（テイ）】丁汝昌なり、單に姓のみを書するは公文の體なり　【呑（シ）會】呑文を以て照會するなり照會と同じ　【照得】「曰く」の義、日本の陳者云々の陳者と同じ　【來函】來書なり　【軍門】陸海提督の異名本軍門とは丁汝昌自から云ふ、未便具覆】文を具へて回答するを具覆と云ふ、また回答の都合に至らぬ　【礮（ハウ）臺】砲臺と同じ　【中西】支那と西洋　【作證見覆】返事を賜りて　【須至呑者】此は照會文の常

奮の語なり吝者は照會先きの人なり此の照會は中途で止むることなく何卒主たる照會先きの者の手に屆くやうとの意なり

照會　覆清國丁督督

【頃接】頃は先日又過剋なり　【開】陳述なり　【等因】因は日本の書翰にある趣と云へる字と同義　【准此】此を領承した　【自應】自は勿論（モチロン）と同じ　【遵照辦理】貴命の如く取計はん　【悉數交下】悉皆交付せよ　【將弁】士官　【前赴】來る事　【本國】この方（ウチ）の國日本を云ふ　【所有】あらゆる　【咨商各節】細協議のありし各條

震畏四知

【茂才】もと秀才と云ひしを、後漢光武帝の名は秀と云へるを諱かて、茂才と改む、當時賢士を選拔する科目の一なり　【東萊太守】東の上に羣の字を加へて看るべし　【故人】舊き友達、楊震自から云ふ　【君不知故人】故人清廉なる心を知らざるは　【天知神知】天は上より照覽して、君が我に金を遣りて知る鬼神も亦之を知る　【子知子知】我も子に金を受けレを知る子も我に金を贈りレを知る　【清白吏子孫】清く潔白なる役人の子孫と云へば、天地に怍ぢない人に愧ぢない

諸葛亮卒

【巾幗婦人之服】巾幗は婦人の首飾又「カブリモノ」との說もあり孔明が司馬懿の卑怯にして男子の氣象なきを鄙みこれを送れり　【杖節】はたじるしをもちて　【辛佐治】佐治は毗の字　【將在軍君命有所不受】大將が軍中に臨む以上は、君主の命令でも、場合によりては、聽かざることがあるべきものだ　【苟

能制吾】苟は誠なり、「マコトニ」とよむ、誠實に吾（孔明自から）を制する能力があれば　【豈千里而請戰邪】何事ぞ、はるゝ〳〵と千里の遠方へ向ひ、彼れが主君に上表して、戰爭を願ふぞ、すでに君命を受けずして開戰して宜き筈である　【其饋食及事之煩簡】諸葛亮のねぎより、しよくじのやうす、なかびに、まるごとの、いそがしきか、ひまなることゝ　【不至數升】一升は今の一合ばかりに當る　【其能久乎】それではながくいきて、いられない　【省侍】病氣見舞のこと　【已別去數日復還】李福は孔明の處を一旦別れて去りたが數日ありてまたもどりて孔明の處へきた此は國家の大事を諮るべき詔を受けて至れども孔明の死後の事なれば、李福もくちにだしかねたのである、然しそれでは、すまないから、またたちもどりた　【前實失不諮詣】前度は實に問ひ忘れて、よく伺はなかつた○本文の點は謬れり　【彌日】いくにちもつゞく　【有所不盡】十分にはなさないことが、あるによりて　【更來求決耳】あらためて、きて吾に解決をもとるのである　【公所問者】きみが吾に問ふ天下の大事と云ふものは、吾が後任者であるが　【公琰其宜】公琰は蔣琬の字なり蔣琬は我が後任に適當である　【公百年後】公の御死亡のあとは　【文偉】姜維の字　【懿收軍退】司馬懿は孔明が策略で自分を、欺くのであらうかと、恐れて、軍隊を引き揚げてしりぞいた　【死諸葛走生仲達】死せる諸葛孔明が生きて居る司馬懿を走らした孔明はあらいと云はれた　【吾能料生不能料死】吾は生者の勢力を料のることが、できるけれども、死者の勢力は、いかなるものか、料ることができぬ、それ故ににげたのであると是れ畢竟笑ひて道化（タヌ）をいひたるまでの事なり

上諭十則

【著調補】著は命令なり調補は對品調補とて同等官中に就て轉任するを云ふ【松潍】人の名【補授】後任として授くるなり【欽此】上諭の結尾に添ふるを正式とす、文時に略して添へざるもあり「此を欽め」と讀みて、注意して行ふべしと命ずるなり、もと書經に欽哉とあるより出づ【硃筆】硃は朱なり朱にて書せし文上諭と大略相同じ【禮部侍郎銜】銜は資格のみありて職掌なきを云ふ【諭旨】皇太后の令旨を云ふ【八旬】八十歳【太監】內務府の官吏宦官なり【慈禧端佑康頤昭豫莊誠壽恭欽獻崇熙皇太后】慈禧以下十六字は西太后の尊號なり支那には尊號とて太上皇帝皇太后は皇帝より皇帝皇后へは臣下より美號を奉ることあり之を尊號と云ふ尊號は國家に慶禮ある時に加ふるものとす、長きほど

が、善なるものとす【恭親王】恭は親王の號【奕訢】恭親王の名【二人肩輿】二人て、かつくこれ【開復】取消を云ふ【降二級留任處分】官等二級を降だして現職に留任する處罰【革職留任】官を免ぜられて仍原職に留任すること【賞假】休暇を平生勤勞の賞として賜はるなり【回籍】鄉里に歸ること【修墓】祖先父母の墓參【一摺】一の書面なり摺は折手本なり清國の制、上奏文より下は普通の公牘文に至るまて摺を用ふ【藩司】布政使とて、地方長官のこと【開缺】辭職なり【丁憂】親の忌中を云【據情】依頼せられて【回旗】本籍が八旗の中にあれば歸鄉を回旗と云ふ【守孝】親の喪服をつけること【聯魁】人の名【署理】代理なり【該衙知道】者の次第は當該の官衙にて然るべく心得よ【出張】出張すること【兼署】臨時兼任の事

書海國圖志後

【元氣】宇宙の大氣【浩々】廣大なる貌【盪】うごく○運り移る事【無垠】無限【無慮】凡そ【瀛】海也【邈焉】はるかなる貌【異類】異種類物【殊俗】風俗の變つた處、即ち外國【偏地】片隅の國【皚々】得意の貌【滃々】たのしむ貌【膏澤】恩德のうるほい【牢】かたし【互市】貿易【壑谷】谷に滿つるほどの慾【莫以尚焉】尚は加ふる○其上はない【夢々】不明の貌

商鞅

【分土】地行【嬖人】氣に入りの人【民不可與虞始而可與樂成】民は新事業新政策など、凡て事の始に相談は出來ない、必ず彼是異論を言ふ、併し出來上つた上は共に其便益を樂しめる【什伍】十人組——五人組【收司】罪あれば一同を捕へる【連坐】罪あれば弥しく刑を被る【以率】比例に從ひ【本業畊織】田を耕し布を織る事を唯一の業とする【復其身】賦役をゆるす【末利】商賈【收孥】妻子を取り擧げて官の奴とする【處】音けん【豗】入れ墨をする【趨令】法令に從ふ【家給人足】家々不自由なく、人々家計に不足ない【井田】周公の立てたる田制、田を九分し、八分は八家之を有し、一分は政府之を有す、之を公田と云ひ、八家公田を助け耕す【阡陌】——は井田の東西南北の道路、之を開いて田畝を廣くする【驗】旅行券

生於憂患死安樂

【畎畝】田の「クボ」○舜歷山に耕して居りし故云ふ【版築】傳說は土工をなせし故云ふ【魚鹽】膠萊は——を賣れり【擧於海】孫叔敖は海邊に隱れもあれ

り【擧於市】百里奚は市に隠れ居れり【行拂亂(フツラン)】其所爲】行はいつも失敗して目的を遂げない【動心】奮興する事【忍性】天性を堅固にする【衡】差戻る事【作】奮ひ起る【色】人の顔色○怒などを云【聲】人の言語などを云ふ【法家】法度を守る譜代の家來【拂(フツ)士】輔佐の賢臣

書戴嵩畫牛(タイスウ)

【杜處士(ト)】名は詳かならず仕かへずして民間に在る士を處士は云ふ【戴嵩牛(タイスウ)】戴嵩は唐の畫家他物を畫かず、唯、水牛を畫く、韓幹亦善く馬を畫く○世に幹馬嵩牛と稱す【錦囊玉軸】錦の囊に納れ畫卷は玉を軸となす【尾搐(チ)入兩股間】搐は竦倒なり尾がひきよせられて兩股の間に入る【掉尾(フルフ)】しつこぼを、振ふこと【耕當問奴云々】物事は、それ〳〵に、專門があるを云ふ、耕作の事は奴僕に尋ぬべく、織物の事は婢女に尋ぬべきてある此は宋の沈慶之の語なり【不可改也】此の語は格言で、改むることはできぬ、眞理である

借松亭記

【蜿蜒(エンエン)】のたくる貌【嘵(ケウ)】やかましく言つて【羚羊】野羊【江都】江戸、今の東京【劉先主】劉備字は玄德【謖(ショク)々】松の風に鳴る聲【華彩】はなやか、いろどり【不可毛擧】一々細かく言ひ立てられぬ【固】融通のきかぬ事【觴客】觴は杯○客に酒をふるまふ事

謝枋得死節

【魏天祐】【縵(マン)言】輕侮の言【封疆之臣】國境をる守臣【安仁之敗】元兵江東を侵せしとき、枋得迎へて安仁に戰つて敗れ、妻子は捕はれたり【程嚞公孫杵臼(ショキウ)】杵臼晉の大夫趙朔と云者屠岸賈の爲に殺されたる時、朔の客――――は朔の遺腹の子なる武を匿し、別に他人の子を偽つて朔の子とし、程嚞は之を密告し、杵臼と他の子は殺されたか、後嚞は景公の命を受け眞の趙氏の子と共に賈を亡ぼせり【茹(ジョ)】くろふ【攢(サン)所】かりうめの處【瀛(エイ)國】――公卽ち德祐帝の事【雅素】そなり【風岸將峭(ケンチ)】其風采がけはしく切立つたやう【不能與世軒輊】軒はアガル輊はサガル、世の中に從つて浮沈するをがて」きぬ【植世教立民彝(イ)】彝は常○倫理なり【有德之者】恩になつた と思ふものがある【賄】にぎはす○財を助くる事

縱囚論

【刑人於死】死罪を以て論ぜらるゝ罪は【罪大惡極】大罪極惡に同じ【幸】といねがふ【寧以義死云々】義て死なか不義て生きるか、どちらかと云に、縱令義を守つて死ぬとも、かりそめなをて生きやうとは思はない【大辟】死罰【視死如歸】死ぬのを自分の家へ歸ると同やうに心得る【無後者】約束の期限に後れる者がない【此名】恩德が深いと云名【然安知云々】太宗が出獄させたのは、囚徒が屹度歸れば許してくれると考へて歸てくるに相違ないと思つて出獄させたのでないか分らん、必ずそれに相違なし【十賊下之情也】四人が歸つて來たくないのは眞情なり、然るに太宗が必ず歸つて來るとするのは下の情をそこなふわけ【不通之論】通用せぬ議論【不遂情以干譽(モトメ)】人情に背いた事をして名譽を求めない

春夜宴桃李園序

【逆旅】やどや【良有以也】まことに故あるなり

と讀む【陽春】陽氣の春【烟景】霞などの立こめたる春景色【大塊】天地【天倫】骨肉○此では兄弟【群季】大ぜいの弟ども【惠連】晉の謝惠連、詩文の達人【吾人】李白の自稱【康樂】惠連の兄の靈連【瓊筵】筵が月の輝にて玉を鏤めたるやうなるに因て云ふ【羽觴】羽形の杯【金谷酒數】晉の石崇と云ふ人金谷園を築き友を招いて宴會を開き、詩の出來ざる者に罰として三杯を飲ませたる故事

春窓記

【尙】久し【淡窓】九州の詩人廣瀨淡窓【下半】此首は七言律詩にて八句なり、下半とは下の四句【依々】したはしい思【叩】尋ね來て門を叩き案内を求むるなり【菅廟】天滿宮【溫柔敦厚】やさしくして手厚い【悠揚】のびやか【駘蕩】のどやか【春樹暮雲】杜甫の懷李白詩に渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論文とあり○空しく天地の景物に對し朋友を思ふ事【鞅掌之行】青鞋布襪は山水に遊ぶ旅裝【旋乾轉坤】天地の途を引き回らず、醫者て言へば起死回生【遊觀】いたり見る

詩話

【意在言外】文字に出て居る外に深い意味がある【使人思而得之】讀者に考へてから分らせる【言之者無罪聞之者足戒】詩人の方は「アカラサマ」でないから惡る口でも罪せられず、又之を聞く方では戒になる【近世詩人惟杜子美】杜子美は唐の大詩人杜甫のこと、司馬光は宋の人で、宋の前が五代、五代の前が唐、餘り隔つてゐらんから近世と言ふ

清國皇帝宣戰詔

【疊次】たびたび【字小爲懷】小國を、みぐみて、少ける【種種要挾】種々なる要求【撫綏】なだめやすんず【藩服】屬國【和平】平和なり【商弁】辨は一に辦に作る商議處置する事【暴威】暴威を奮ふ事【勢難再予姑容】ゆきかゝり、二度とは、おほ目に、許されぬ【並著】著は使と同意なり清國公文の用語

信陵君救趙

【壁】陣取り【鄴】地の名【上首功之國】戰爭して敵の首さへ斬れば、賢き者として褒め尊ぶ國にて甚だ野蠻なる國である【肆然】きままに【冠蓋相望】冠かんむり蓋はきぬがさと譯して車上に立つる犬なるかさなり冠を戴き蓋を立つる貴顯の人達が引き續ぎて至るなり【大梁】魏の都の名【夷】平げ滅す【五國】燕齊楚趙韓

自像贊

【偃仰】ふすと仰ぐ○起臥に同じ【失得】政治の一一【德】恩に云に同じ【嚘】いひつかり【躋】のぼる【大湖】琵琶湖の事【湮】淀なり【踵】いたる【朱頓】陶朱猗頓の二人、昔の大富豪【餂】舌で食物を取ると云ふ字○此では食ふ事【炙】燒肴の類【黔黎】人民を云

熟語

【抱關擊柝】門番や夜巡り至て賤き役【尾大不掉】動物の尾が、過大なるときは、身體が反て制せられて、尾を掉うことができぬ、臣下の勢が強過き地方の勢力が烈しいと反て君や中央政府の自由にならざるに比するなり【新序】漢の劉向の著はせる書なり、然れども尾大不掉は新序より淮南子に出でたり

【馬耳東風】人の言を、心に留めざること、又、その事に相關せざるを云ふ○李白の答王去一の詩に世人聞此皆掉頭有如東風射馬耳とあり又蘇東坡の詩に青山自是絕世、無人誰與爲容、說向市朝公子何殊馬耳東風とあり　【常山蛇勢】常山の蛇兩頭あり其一頭に觸れば他の一頭至る其の中に觸れば則ち兩頭俱に至り互に相救ふ因て左右前後相應じて互に救ふの陣法を云ふ又文章の首尾相照應するを云ふ○孫子の九地篇に善用兵者譬如率然者常山之蛇也擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱應とあり　【暴河馮河（ヒヤウカ）】暴虎とは虎を空手にて擊ち殺すなり馮河とは河を徒歩にて渉るなり因て極めて危險の行をなすを云ふ論語述而篇に子曰暴虎馮河、死而無悔者吾不與也とあり／　【簞食壺漿（クワンシ）】本卷第三十一を看よ　【渙然冰釋（クワンゼンシヤク）】渙然は、とけること、冰釋は氷の釋けたるが如く迹を殘さゝること老子に儽若容、若氷將釋とあり、疑がとけたること　【杜預】西晉の人　【盤根錯節（サク）】盤は蟠にゞ通曲りたる根と入り組みたる節なり世事の錯雜して困難なるに喩ふ○後漢書虞詡の傳に不遇盤根錯節何以別利器乎とあり

徐芝仙出塞（サイ）詩序

【衣短後】武裝をなして　【南望北斗】北斗星を南方に望み見ると云へば其の北地に深く入ることを知るべし　【明文皇（ミンノ）】明朝の天子太宗文皇帝　【險戲（ヒヨウ）】けはしきやま　【劇將】劇悍なる將校　【喘（ゼン）】あへぐ　【緩轡（クワンヒ）】たづなを、ゆるべて　【戰詠】詩吟のこと　【瑣屑（サセツ）】こまかなること　【攜拾（キンシコ）】取り拾ふ事　【偏饒有風致（ヒトヘニオホク）】其の詩は、とりわけて、風致即ちもむきが、多くある　【岑嘉州（シン）】唐の詩人岑參嘉州太守たり　【見今（ゲン）】現今と同じ　【一統志外夷考】大清一統志と云へる清國の全地誌中の一部

の事【非ヤサシ、繪畫の事】　なる外國考へ外國の圖を記せる書

す之部

出帥表

【先帝】昭烈皇帝即ち劉備　【天下三分】漢と魏と呉との三國に分る　【益州】漢は當時蜀に據れり蜀は即ち益州　【開張聖聽】天子のおみみを、開き張る、陛下の聽き玉ふ所を光大にする事　【恢弘志士之氣】こゝろざしある士の氣槩を大にし廣くし引立つること　【妄自菲薄】みだりに、わけなきに、御自分から、己れの德をつまらないやうに、思ひなされて　【引喩失義】御自分のことを比較するに、つまらないやうな者にひきくらべて、其の當然の義理を失なひて　【宮中】陛下の官中　【府中】大臣等の居る政府　【俱爲一體】ともに、ひとつの、からだの、やうなもので、同じ物で御座ります　【陟罰】のぼしせむる　【臧否】よしあし　【不宜異同】ちがへてはならぬ、官中の人は、御手近かだから、ほめて、上へのぼすとか、府中の人は、御そばに、なれているからとてせめをとすと云ふやうな、偏頗なる處置は宜くない　【作奸犯科】よこしまなることをなし、法律の科條を犯し　【及爲忠善者】又は忠義善良なる行をなす者は　【平明之治】公平明白にして、偏頗曖昧ならざるのおさめかた　【內外異法】官中は罪を輕くし賞を重くし府中は罰を重くし賞を輕くするが如きを云ふ　【侍中】官の名、左右に侍して衆事を贊導し顧問に奉答し行幸の時は陪乘することを掌る　【侍郎】宮中の門戸を守りて行幸の時は供奉することを掌る　【忠純】まことにして、一心にて、二心なきこと　【裨補闕漏】陛下のなされかたの、かげをもっている所を、たすけおぎなふて　【性行淑均】うまれつき、おとなしく、均一て　【先帝稱之曰能】昔日先帝の

時に試み用ひられて能將と御褒めになりた　【舉寵爲督】寵は中都督と云へる官にて、近衛兵をつかさどる　【優劣得所】すぐれたる者と、おとりたる者と、それぞれに其の居り場所に叶はしむ　【先漢】西漢の高祖孝文等を云ふ　【後漢】東漢の桓帝靈帝等を云ふ　【未嘗不歎息痛恨於桓靈也】先帝御在世の時孔明と毎々東漢の傾頽せし事を御談論がありて、毎度嘆息して深く桓帝靈帝が國を亡ぼせしことを恨み玉ざる事はない　【侍中】官の名時に陳震侍中尚書たり　【長史】張裔蔣琬　【貞亮】貞は、たゞしくて、堅たし、亮はまことにして、あきらかなること　【臣本布衣】昔し平民は老人になれば絲を服として用ゆるも壯者は麻枲を衣とす、故に平民を布衣と云ふ　【南陽】地の名今の湖北省襄陽にあり　【苟全性命於亂世也】苟は纔なり亂世なれば纔かに我が身命を全ふすれば、それで、よろしとなして　【聞達】名譽が高く揚り位が顯れ貴くなること　【不以臣卑鄙】臣がいやしき身分を、おかまいなく　【猥自枉屈】勿體なくも御自分から御出で遊ばされ　【先帝以驅馳】先帝へかけまわりして働くことを御約束した　【後值傾覆】その後に失敗に出逢ふて○東漢の獻帝建安十三年劉備曹操に荊州の當陽の長阪に敗らるゝを云ふ　【受任於敗軍之際】任務を敗軍の場合に承り玉はり　【奉命於危難之間】命令を危難の折柄に奉けたり○孔明昭烈の命を受けて呉の國に使ひし孫權の援兵を借り其の將周瑜等と共に曹操を赤壁に敗りし等の事を云ふ　【寄臣以大事】臣に御たのみになるに賊の魏を滅し天下を恢復する大事を以てなされた○昭烈崩ずるに臨みて孔明に後事を遺囑して曰く、君が才曹丕に百倍せり必ず能く國を安んじて終に天下を定めん、若し我が嗣子輔佐すべくんば輔けて立てよ若し其不才ならば君自から取るべしと、又太

子を召して曰く汝ち丞相と共に事に從ひ事ふること父の如くせよと、曹丕は曹操の子此の時東漢の位を簒ひ魏と稱し皇帝と號せり丞相は孔明を云ふ【付託不效】御たのみが、きゝめがなくて【傷先帝之明】先帝の明らかなる御德に、きづをつける、卽ち先帝の御目金(メガネ)を違へること【五月渡瀘】瀘は川の名、蜀の境外にあり、此の附近は瘴氣あり三四月頃に經過すれば多く死せり、然るを五月に渡るとは尤も其艱苦なるを想ふべし【不毛】草や木の生ぜざるを不毛と云ふ此ては不毛之地と云ふ意【今南方已定】瀘を渡り不毛に入りしは南方の賊に孟獲雍闓(イガ)等ありしを平げんが爲めなり然るに今此等の賊すでに平定(テイ)した【奬率】ひきたて、つれて【北定中原】中原は中國、漢の故都長安洛陽等の地をさす【斟酌損益】斟酌(シンシャクソン)共に「くむ」と譯す酒などを、ほどよく、くむことよりて、物事を宜きやうに、取り扱ふこと、損は、へずること、益は、ますこと、亦物事を裁斷するを云ふ、斟酌損益を概言すれば程宜(ホド ヨロ)取り計ひすること【忠言】まことのことば【攸之禕允之任也】郭修之費禕(禕井蓋允の宮中侍從の臣なれば此れが其の人の貴任である【託臣】臣に御一任なさるに【興德之言】善言を申上げて陛下の御德をたすけること【章其咎】章は彰と同じ、世に明らかに示して、罰を與ふること【諮諏】御相談なされて、詩經毛傳に訪問於善曰諮諏事曰諏とあり

睢陽城嬰守

【賊將安慶緒】慶緒は、安祿山の子、祿山唐に叛し、自立し、大燕皇帝と稱す、慶緒又祿山を弑し代り立て皇帝と稱す【蹄檀】通鑑の註、蹄當作(ナルベシ)蝭、蝭州也とあり、檀も亦地の名【同羅】地名【奚】夷狄の名【懦不習兵】懦夫で兵事になれぬ【智勇兼濟】智慧勇氣兼備してゐる【籌畫】はかりごと【賞不酬勳】賞賜が勳功に相應しない、通鑑の註に據るに、虢王巨が吝にして賞賜を與へざるを以て將士の怨望して、力戰せざるを恐れ、故に張巡先づ此の言を以て、慰撫するなり【陳留譙郡太守】河南節度使たり【膏草野】草莽原野に血ぬる【椎牛】(ツイ)つちて、牛を擊ち殺し【飛樓】たかきやぐら【剡(ケグリ)嵩爲矢】嵩は(カウ)くさよもぎ蓬蕭の屬剡は削なり、くさよもぎの軸を削りて、弓の矢となす【乃得其狀】そこで始めて、尹子奇の形狀を、みとめた【剡(クワク)虢王巨】巨は王の名なり、唐の親王にて、此の時張巡等の元帥たり【廩(リン)米】通鑑の註廩當作稟給也とあり給與の米を云ふ【死不加益】死しても、補充がない【雲梯】城を攻る高きはしご、杜佑曰く、以六木爲床、下置六輪、上立雙牙、牙有檢梯、節長丈二尺有四枕、枕相去四尺、勢微回遽、上互相檢、飛於雲間、以窺城中、有上城梯、首冠雙轆轤、枕城而上、謂之飛雲梯【牛虹】半形のにじ【騰入】おどり入る【拄之】二つの木で、さゝへて【鉤(カウ)車】かぎの付てある車【棚閣】假りやぐら、棚閣は、城上に木を架し、棚を爲り、城外に突出すること四五尺許、上に風雨を蔽ふべき屋宇あり、戰士之に居り、以て臨て外敵を禦ぐ、後世之を敵樓と云へり【連鏁(サ)】鎖と同じ、つらなるくさり【大鐶(クワン)】大いなるかねのわ【搨(タウ)其鉤頭】搨はうつこと【磴(トウ)道】だん〳〵【乾(カン)壕】かはける、くさよもぎを伐つは、道に順ふなり、賊に從ふて王室に敵するは、道に逆ふなりとの義理を述べて、說き付ける

睢陽城嬰守二

【許叔冀(キ)、尙衡、賀蘭進明】三人、皆官軍の將【不知存亡】今日となりては、靄雲が城を出でゝ日數も

あれば、睢陽城は存して居るか、又は亡びしが分らない【兵去何益】去は往くこと、援兵往きたとて、何にも利益はない、睢陽は已に賊の所有になりて居るだらう【以死謝大夫】大夫は、賀蘭進明御史大夫の位なるを以て、敬稱して云ふ、私しは一死を以て閣下に無益の御心配を掛けしことを御詫び致さう【即及臨淮】すぐに臨淮へ攻めてくる【譬如皮毛相依】皮は毛の蔽ふに依り、毛は皮の維持するによるが如く、互に相援ける【具食俱樂】俱の字、資治通鑑に、「與」に作る、食物と音樂とを設けるなり【霽雲來】全唐文韓昌黎集に、來の下に、「時」の字あり、霽雲が來らんとする時を云ふ【會無分災救患之意】會は必と同義畢竟の意、つまり睢陽の禍災を分かちて引受け患難を救助するの意がない【主將】張巡を云ふ【以示信】是迄來りたるしるしとして【城使廉垣】城使は、張巡初め寧陵より睢陽に入りし時、代りて寧陵城を守らしむるが爲めに置きし役人、廉は姓にして垣は名なり【睢陽江淮之保障】睢陽の地は江・淮二地方面の保障となりて敵を防禦する場處である、保障は保は「トリデジロ」堡と同じ、障も小城を云ふ、因て掩護の意に用ゆるなり【走必不達】城を棄てゝ逃走するも、目的地へはとゞかないに、きまりて居る【況密邇群帥乎】密邇は近く接するを云ふ、まして近接の地に居る、多くの大將が救恤せざる理はない、きつと援けるだらふ○密邇群帥と點してあるは誤れり、宜く密邇、群帥とよむべし、通鑑の註に謂張鎬尚衡許叔冀等とあり【西向再拜】此の時、帝都は長安にして、睢陽より云へば西方にあり【厲鬼】通鑑の註に、鬼無所歸者爲厲とあり、幽靈を云ふ【每戰皆裂齒碎】一に戰の上に「督」の字あり、君は部下の戰を督する每に、いつも瞋み叱ることが烈しい故に、目皆は裂け口齒は碎くと【吾志呑逆賊】吾

の志は逆賊の汝等を一呑にして食ひ殺さうと思うのだ

睢陽城嬰守三

【時卒僅萬人】兵卒が、一萬人以上ありた、字典に僅は小也餘也とあり、場合にあり、「アマル」と譯す、唐の時僅の字を、餘の義に用ゆる文章多し【本將】本部の將を云ふ【雲合鳥散】集るとき雲の合ふが如く、逃れるとき鳥の散する如く、節制なきを云ふ【呼吸之間】一呼一吸の間、極めて短少なる時間を云ふ【動詢大將】動くことを、一々に總大將に相談するときは【投之而往】其の將や兵を、差し向ける先方【與兵】兵を與してから【皆取之於敵】敵より取りし戰利品を用ゐて【推誠待人】まごころを、推し廣めて、人を取り扱ふ【與其食人】與は「ヨリ」、食は「ナンゾ」全【人】張巡が城中に人を殺して、兵糧に代へたるを咎めて、人を殺さんよりは、寧ろ城を棄てゝ、人を助けた方が宜しいと云ふ【愚巡以守死】愚は「トスルニ」張巡を愚人として譏るに死するばかりで何にも働きがないと云ふ【錄瑕棄瑜】張巡の瑕(キズ)を書きしるして、功用の働を棄てゝ言はず【乖其素】人を食したるは已むを得ざるに出でた、その平素の志ではない【功過相掩】功と過が、五分五分である【不睹休明】めでたき太平の御代【榮祿】位や祿【若不時紀錄】若し今時に早く取調べざれば【恐遠而不傳】時代が久くなると、うつもれて、傳はりのこらないだらうかと、心配致します【生死不遇】生でも、死でも、ふしあはせ【編列史官】歷史官の掌れる歷史に編修して列せらるゝやうに致したい

せ之部

西俗一斑

【平房】平屋(ヤヒラ)　【浮屠】寺などにある塔の事　【傳餐】食事をする事　【一律】一同の事　【冬令】冬の時候　【色相】いろ、もやう　【皷鑄】鑄物をなすときは、鞴を働かして風を起す、故に皷鑄と云ふ、皷は動なり　【持匙】かぎをもちて　【邏察】めぐり、しらぶる事　【君后】皇帝皇后　【旂號】は國旗を云ふ　【以彰龍異】榮譽を表彰す　【房間】へや　【學堂】學校なり　【兵勇】兵隊の事

齊桓公用管仲

【五霸】齊の桓公、晉の文公、宋の襄公、秦の穆公、楚の莊王を謂ふ　【子糾】桓公の第　【傳】附人となる　【帶鉤】帶に附せる金屬物の環なり　【公】桓公即ち小白　【賈】商業をする　【分利多自與】利益を分配するに自分の方へ多く取る　【謀事】何か計畫して　【九合】九度諸侯を會するなり　【一匡】匡は正す　【一則云々】一にも管仲、二にも管仲と特み尊ぶ事○仲父と言ふは敬稱

井陘口之戰

【猷】音あつ　【車不得方軌】方はならぶ、軌はわだち、○道がせまくして二輛の車が並びて歩けない　【絕其輜重】兵糧の道をたちきる　【深溝高壘】ひたすら堅固に守る事　【野無所掠】かすめとるべき穀物のなきを云ふ　【可致麾下】御采配の下へ持てこられる　【傳發】令を下して出發させる　【空壁】城中の兵が總出城をからにして　【殊死】必死となりて　【右倍山陵】右に控へ　【陷之死地】必死の場所に入れて　【置之亡地】たすからない場所にをいて

漸西三暴布記

【卒無複筆】天然の瀑布を人工に見立てて云ふなり　三瀑布が三つながら趣きを異にして、卒(サイ)りの處重複して同じやうなる筆法がない、皆それ〴〵に特色がある　【天台石梁】天台山の中にある山の名○天台道書に從曇華亭右顧、視三石梁、若レ在二天半一、廣不レ盈レ尺、長數十丈、下臨二絕澗一とあり　【率者厪義】率は危高なり　厪義は峰頭の巉巖なるを云ふ　【重者獵隊】隊は甃なり「コシキ」隊は厓「サケ」なり山の形兩巓を累ぬるが如きを云ふ　【環梁遮迣】環梁は石梁を環るなり、遮迣は「サヘギリ列ル」なり迣は迤に同じ列るなり　【若鰲脊跨山腰】鰲は鼇と通用す「オホウミガメ」海中の大龜なり、列子に渤海之東有二壑焉一其中有二山無一所一連著一常隨一波上下(中略)帝使二巨鰲十五擧一首而戴一之とあれば故ちにとあり、蓬と仙人とは古より文章上緣由を有す、鰲狀を假りて山の模樣を形容せしなり　【嵌空】穴の空虛なる事　【鰲頂】天台山最も高き處絕頂、海を望むべしと云ふ　【平疊】ひらたくかなる　【四層】四重なり　【穿空】穴の中を通り過るぎる　【石撓】撓はタユムルなり　【羣礨砢】多くの積み重さなる石　【攙枕】ウチタオスこと撞ひて擊朴するなり　【拗怒】すれ、いかる　【目光炫亂】目が、まぼしくなる　【雁宕】山の名一に雁蕩に作る、溫州府樂清縣にあり、頂上に十里四方の湖水あり凡そ七十二峰森然として天を摩すと云ふ　【大龍湫】雁宕山の東谷に在る瀑を大龍湫と云ふ、水絕壁より瀉下し高さ五千尺と云ふ東谷にあるを小龍湫と云ふ高さ三千尺と云ふ　【一疋】一匹と同じ。【琉璃絲】色琉璃の如くにして細長きを云ふ　【五色駃騠】五色

は青黄赤白黒なり駁は美なり或は駁の字を誤字にあらざるかと疑ふ者あれども誤字にあらず戦國策に郷忌形貌駁麗の語あり【憑緒】よりつく【不過爾】斯の如きに過ぎない【青田】浙江處州府にあり山の名【石門洞】青田の兩峰相對峙し洞あり石門洞と云ふ西南の崖に百餘丈の飛瀑あり宋の謝靈運の發見する所と云ふ【狡獪】ずるき、しごと【巨蚌】大なるハマグリ【考鐘鼓】考は擊なり【昔人有言】此れはもと唐の李翺が言なり、宋の歐陽修與吳充秀才書中にも引ひて云へり【讀易者如無詩】易經詩經書經禮記春秋を五經と云ふて支那學者の最も尊重する者なり、此にては其の各書それ〳〵に特色ありて他の特色を壓倒するかと思へるを云ふ、即ち易を讀みて居る時は易ほどの物はないと思ふて詩の事は思ひ出さないと云ふ意なり

赤壁之戰

【魯肅】吳の名臣【資】もとで【不協】和合しない【各有彼此】あちらに附くものもあれば、こちらに附くものもある【梟】極めて猛け猛けしきを云ふ【寄寓】かゝり人になつてゐる【撫安】なづける【離違】なかたがい【用事者】權力を持てゐるもの【治】俗に云ふたいぢする【兼道】一日に二日路をゆく【諧】和合する【徑】たゞちに【執】勢の字の誤り【致殷勤之意】懇切の意なり【欲何至】どこへ往かうと思はれる【投】からだをもちこむ○たよる【討虜】孫權の事、曾て討虜將軍たり【江表】江南を指す【腹心】頼みになるべき臣【結於東】東は吳を指す【世業】天下の事と云ふが如し【抗衡】兩方の車の長柄がぶつかりあつてさけない○互に張り合ふ事【芟夷】

艾は刈る、夷は平かにする　【按兵】按はとどめ場所を樂み念慮なきを云ふ　【除殘】殘はそこなう　【猶豫】見合はすこと　【抗】あたる　【輕騎】身がるに出てたる騎兵　【強弩之末勢不能穿魯縞】これは孫子の語、魯縞は魯の國で製する薄絹〇いかに強い弩も矢が遠くに往つて、勢が末になると薄い魯の絹をも透すことが出來ない　【蹶】たほす　【偪兵勢耳】兵勢にせまらるゝ耳と讀む　【協規】步調を一にする事　【鼎足之形】鼎には三足あり、劉曹孫の三氏並び立つを云ふ　【奉辭伐罪】天子の御沙汰を受て罪あるものを伐つ　【旌麾南指】(セイキ)都より云は吳は南にあたる　【會獵】一集に獵をして獲物を爭ふ、即ち戰て雌雄を決する意　【蒙衝】一一は細長き形の舟にて牛の皮を以て舟の腹背を包み、敵の舟に衝突するもの　【更衣】便所にゆく　【向】さきに　【下曹從事】極めて下等の官職を云ふ　【父兄之烈】父孫堅兄孫策の功烈　【樂業】自分の用ゐられ場所を樂み念慮なきを云ふ　【除殘】殘はそこなう　【猶豫】見合はすこと　【抗】あたる　【輕騎】身がるに出てたる騎兵　【強弩之末勢不能穿魯縞】これは孫子の語、魯縞は魯の國で製する薄絹〇いかに強い弩も矢が遠くに往つて、勢が末になると薄い魯の絹をも透すことが出來ない　【蹶】たほす　【偪兵勢耳】兵勢にせまらるゝ耳と讀む　【協規】步調を一にする事　【鼎足之形】鼎には三足あり、劉曹孫の三氏並び立つを云ふ　【奉辭伐罪】天子の御沙汰を受て罪あるものを伐つ　【旌麾南指】(セイキ)都より云は吳は南にあたる　【會獵】一集に獵をして獲物を爭ふ、即ち戰て雌雄を決する意　【蒙衝】一一は細長き形の舟にて牛の皮を以て舟の腹背を包み、敵の舟に衝突するもの　【更衣】便所にゆく　【向】さきに　【下曹從事】極めて下等の官職を云ふ　【父兄之烈】父孫堅兄孫策の功烈　【樂業】自分の用ゐられ

【猶豫】見合はすこと　【抗】あたる　【輕騎】身がるに出てたる騎兵　【強弩之末勢不能穿魯縞】これは孫子の語、魯縞は魯の國で製する薄絹〇いかに強い弩も矢が遠くに往つて、勢が末になると薄い魯の絹をも透すことが出來ない　【蹶】たほす　【偪兵勢耳】兵勢にせまらるゝ耳と讀む　【協規】步調を一にする事　【鼎足之形】鼎には三足あり、劉曹孫の三氏並び立つを云ふ　【奉辭伐罪】天子の御沙汰を受て罪あるものを伐つ　【旌麾南指】(セイキ)都より云は吳は南にあたる　【會獵】一集に獵をして獲物を爭ふ、即ち戰て雌雄を決する意　【蒙衝】一一は細長き形の舟にて牛の皮を以て舟の腹背を包み、敵の舟に衝突するもの　【更衣】便所にゆく　【向】さきに　【下曹從事】極めて下等の官職を云ふ　【父兄之烈】父孫堅兄孫策の功烈　【樂業】自分の用ゐられ場所を樂み念慮なきを云ふ　【除殘】殘はそこなう　【猶豫】見合はすこと　【抗】あたる　【輕騎】身がるに出てたる騎兵　【強弩之末勢不能穿魯縞】これは孫子の語、魯縞は魯の國で製する薄絹〇いかに強い弩も矢が遠くに往つて、勢が末になると薄い魯の絹をも透すことが出來ない　【蹶】たほす　【偪兵勢耳】兵勢にせまらるゝ耳と讀む　【協規】步調を一にする事　【鼎足之形】鼎には三足あり、劉曹孫の三氏並び立つを云ふ　【奉辭伐罪】天子の御沙汰を受て罪あるものを伐つ　【旌麾南指】(セイキ)都より云は吳は南にあたる　【會獵】一集に獵をして獲物を爭ふ、即ち戰て雌雄を決する意　【蒙衝】一一は細長き形の舟にて牛の皮を以て舟の腹背を包み、敵の舟に衝突するもの　【更衣】便所にゆく　【向】さきに　【下曹從事】極めて下等の官職を云ふ　【父兄之烈】父孫堅兄孫策の功烈　【樂業】自分の用ゐられ場所を樂み念慮なきを云ふ　【除殘】殘はそこなう　【猶豫】見合はすこと　【抗】あたる　【輕騎】身がるに出てたる騎兵　【強弩之末勢不能穿魯縞】これは孫子の語、魯縞は魯の國で製する薄絹〇いかに強い弩も矢が遠くに往つて、勢が末になると薄い魯の絹をも透すことが出來ない　【蹶】たほす　【偪兵勢耳】兵勢にせまらるゝ耳と讀む　【協規】步調を一にする事　【鼎足之形】鼎には三足あり、劉曹孫の三氏並び立つを云ふ　【奉辭伐罪】天子の御沙汰を受て罪あるものを伐つ　【旌麾南指】(セイキ)都より云は吳は南にあたる　【會獵】一集に獵をして獲物を爭ふ、即ち戰て雌雄を決する意　【蒙衝】一一は細長き形の舟にて牛の皮を以て舟の腹背を包み、敵の舟に衝突するもの　【更衣】便所にゆく　【向】さきに　【下曹從事】極めて下等の官職を云ふ　【父兄之烈】父孫堅兄孫策の功烈　【樂業】自分の用ゐられ

【操自送死】必勝の策なくして來り攻むるは自分で死にに來たと同然である　【籌】はかる　【舍鞍馬伏舟揖】得意の陸軍を捨て、不慣の海軍に依てと云ふ事　【禽】擒と同じ　【保】自から任じて　【二表】袁紹袁述　【水步】水軍と步兵　【校】はかる〇計算する　【所得表衆】手に入つた劉表の人數　【子布元表】子布は張昭の字、元表は秦松の字　【難卒合】にわかに合せがたし　【程公】程普のこと、此人諸將軍の內にて最も年長者なりしゆへ、人々尊んで程公と呼べり　【邏吏】巡警の役人　【水次】水軍の溜所　【委署】うつちやりばなしにしておく事　【儻能云云】儻はもし〇もし恐れ入つた事であるが、こちらへ御出でくだされたならば、願つたり叶つたりである　【深爲得計】まことに好き思召である　【可別過之】改めて御出

掛になつたらよろしい【指言蓋降】敵船を指して、あの船は貰蓋が降參に來たのだと言合せておつたしないのが肝要【教學相長】教ゆること學ぶことと兩方で進歩する、師弟互に益する事

が、つゝかゝらないのが肝要、婉が宜しいが隱し立をして、手に善い方へ手引する【婉曲】かどまかい禮【拘縶繁碎】ひつかゝりが多くしてくだくだしい【局促】かがまる【玉帛鐘鼓】禮の機關【攻】おさめる【治】政治【家學】家傳の學問【矯枉過直】曲つたのを直はして眞直に過ぎる○極端を云ふ【列莊】列子と莊子【道】いふ【純駁】純粹と雜駁【不蹈襲古人】古人のやり來つた通りを眞似ない【誦法孔子】孔子に法つて其教を誦す【經義】經書の意義

【輕銳】身がるく銳兵【鼗鼓】雷の鳴くやうに、烈しく大鼓を打つて【羸兵】弱り疲れたる兵【塡之】泥の中に草を入て人馬の通れるやうにする【踏籍】ふみしかる【飢疫】飢餓と疾疫

責善

【責善】善をせよとせがむ也【忠告善道】信切に話してやり、上手に善い方へ手引する【婉曲】かどまかい禮【拘縶繁碎】ひつかゝりが多くしてくだくだしい【局促】かがまる【玉帛鐘鼓】禮の機關【攻】おさめる【治】政治【家學】家傳の學問【矯枉過直】曲つたのを直はして眞直に過ぎる○極端を云ふ【列莊】列子と莊子【道】いふ【純駁】純粹と雜駁【不蹈襲古人】古人のやり來つた通りを眞似ない【誦法孔子】孔子に法つて其教を誦す【經義】經書の意義

先秦學風

【唐虞】堯舜の代名【契】人名【司徒】教を司る役【五教】五倫の教【夔】人名【典】つかさどる【胄子】長子【經禮】根本の禮【曲禮】こ

【附】【勝】向にまさる負の反【克】得難き勝利【捷】戰勝の報知【戩】きりかつ【巘】遊技に於ける勝【截】たちきる【切】きりはなす【斫】きりいる【剪】はさんできる【斬】身體をきる事

澶淵之役

【誰謀此策】誰が此策をたてたのだ【卿姑云云】鬼も角も其善いか惡いかをきめてくれ、誰の考だと云とは問ふに及ばぬ【鼙鼓】大鼓に血を塗て軍神を祭るなり此一句は俗に云ふ軍神の血祭り【駐蹕】御駕の暫く駐るをいゝと云ふ【準力】力はつとめてとよむ骨を折てなり【如喪考妣】父母をなくしたやうである【何不賦一詩退虜耶】詩を作つてそれで敵を退けたらよかろうに【氣奪】氣をのまれてしまつた【隻輪】一輛の車も【生靈】人民【南朝】宋を云【北朝】契丹を云【天雄軍】河北魏博の節度【城下之盟】敵兵が城下まで迫まつて來て已むを得ず盟ふを云【孤注】カケに負けた時、殘つて居る所のものを悉く投げ出して、一か八かを試みる事

前赤壁賦

【既望】十六日なり【赤壁】黄州の大江に沿へる處にある赤色の絶壁【擧酒】杯を取り擧げて【屬】すゝむるなり【明月之詩】詩經の陳風に、月出皎兮、佼人僚兮、舒窈糾兮、勞心悄兮、とあり、古來の注に此詩の事とすれども容易に信じがたし【窈窕之章】窈窕は「タホヤカ」○詩經關雎に「ー淑女、君子好逑」とあるを云ふとの説あり、亦確かならず【少焉】しばらくして【徘徊斗牛之間】斗牛は二十八宿に屬する二つの星の名○徘徊は「サマヨウ」○斗牛の間は月の軌道に非ずと云ふ説あり【縱一葦之所如】一章は小舟○小舟の行くまゝにして萬頃の波がひろびろして居る處を凌ぐ【浩々乎】ひろびろとして【馮虛御風】虛空に倚りかゝり風に乘る【飄々乎】物が輕く風に飄るやうに【遺世獨立羽化而登仙】此浮世をすて、我獨り羽がへをなし、天へ上つて仙人となる【舷】舟ばた【桂棹蘭槳】桂の「ガヂ」蘭の「サホ」【空明】月に移る水明り【流】光波に動く月影【望美人兮天一方】美人は君子○天の一方は天の遙かあなた【洞簫】底のなき簫【倚歌而和之】歌の聲に簫を合はす【嗚々然】あわれほげ【嫋々】「ナヨナヨタヨタヨ」と細く長く【縷】いとすぢ【舞幽壑之潛蛟】奥まりたる谷に潛める水龍も、感じて躍り出し【泣孤舟之嫠婦】嫠は「ヤモメ」、捨小舟の寡婦も哀を催して泣く【愀然】憂い顏をして【危坐】膝立て直し【何爲其然也】どう云ふわけでさう感に堪えぬのか【月明星稀】月の光が皎々とさへ渡り、それに押されて星の光が所々づか外ない【烏鵲南飛】「カサヽゞ」か月に驚き、曉かと宿を離れて南の方へ飛びゆく【曹孟】孟德は魏の曹操の字

【山川相繆、鬱乎蒼々】山や川が繞りつゞき、立てこもつてあはあほして居る【周郎】吳の周瑜の事【舳艫千里】舟の「へ」と「トモ」が相並んで、千里も蓋ふばかり【醼】くも【橫槊賦詩】曹操は武勇に風流を兼ね、戈をよこたへて月明星稀の詩を作る【今安在哉】其英雄も今は名計で、其人はどこに在る【侶】相手なり【匏尊】「フクベ」や樽【蜉蝣】朝生してタに死する虫、小さな短かき生涯を云ふ【滄海之一粟】限りもなく廣い青海へ粟一粒を浮べたと同樣【須臾】僅かのひま【騶】しばし【託遺響於悲風】洞簫の聲の名殘を悲しい風に寄せる【逝者如斯而未嘗往也】流れ去る者は此水のやうに流れ去るものの、いつまでも盡きないので、見れば決して往かぬのである【盈虛】月を指す【不能以一瞬】一度目ばたきする程もつゝかない【無盡藏】つくることのない藏【蓙】さか【肴核】さかな【狼藉】散亂【枕藉】ねこんで

そ之部

澡泉餘事小引

【蕞爾】小さなる貌 【椒】山頂 【偁父】いなかおやじ 【羌豎】きこりの童子 【衲】僧 【大牧】牧は牧民官、知事の如き者 【紅粉青蛾】紅は「べに」、粉は「オシロイ」、青蛾は青き眉○共に美人を云ふ 【紫髯綠眼】西洋人 【翠微】山 【嵐光】山氣の色 【煙霏】煙のたなびき 【歗吹】歌だの、笛だの 【呻吟】苦しさうに口つさむ 【咒】じゅもん 【頃刻】忽の間 【儻】ことによつたら

曾文正公神道碑

【聖清】聖は清朝の德を賞して云ふ 【載】歲に同じ 【相】宰相 【翰林】役所の名、文學の事を掌る 【御極】卽位に同じ 【大臣之言】大臣たるに恥ざる議論なり 【母憂】母の喪なり 【惰窳悾怯】怠り弛み臆病なるなり 【團練】地方軍隊の名 【金革之事】兵事を云ふ 【不食於官】官から養はれて居らぬ 【緩急不可恃】事の有つた時あてにならぬ 【丁】わかもの 【勇營】義勇兵 【艘】舟なり 【舟師】海軍 【自効】自分で罪を彈劾する 【悍賊】強くたけだけしき賊 【不得逞】心の儘にできぬ 【累詔起復視師】度々詔があつて家から出でゝ再び兵を監督させる 【小祥】一周忌 【慮旌旗他指】公が他處へ出陣することを憂ふる 【皖】安徽省 【規】はかる 【趨超】恐らくは詔趨の誤 【西夷】英佛を云ふ 【薄】せまる 【戡】勝つなり 【粵賊】長髮賊の事 【方夏】中國なり 【會疾作】たまたま病おこると讀む 【西事】對西洋の事 【黔】貴州 【效順】こちらに味方する 【緩其師期】援兵を出す時期 【報可】其通にせよとの指令 【力贊】一生懸命に賛成する 【寢】中止する 【虛儀】實際の利害に關係なき儀式 【肇】はじむる 【劇】ひどくなる 【賻賜】賻は香奠なり 【適】ゆく○嫁入する事 【效法韓歐】韓退之歐陽脩を模範とする 【漢賦】漢代の賦 【臥治之】ねながら治めさせた 【薨於位】在官の儘死なれた 【遺疏】死後の上書 【一室米鹽】一家の些細なる活計 【專篇】專門の書物 【經緯乎萬變調理乎鉅細】澤山の變化を節の立つやうにし大小となく能く調和を保ち整頓する 【墓道之碑】墓へ行く道に立てる碑

蘇秦

【恐喝】おどす 【資之】旅費を與へて 【擯秦】排斥する 【鄙諺】下賤の諺 【寧爲鷄口無爲牛後】小さくとも鷄の口となりたる方が、大きくして卑しい牛の尾となるにまさる、卽ち寧ろ小國の君となるも大國の臣とならん方が宜しい 【從合】六國が同盟して秦に向つて從ふ 【困而歸】困窮して歸る 【妻不下機嫂不爲炊】妻も馬鹿にして機から下りて來ず、兄嫁も飯を炊てくれない 【車騎輜重】車は戰爭に用ゆる車、騎は騎兵、輜重は糧食器具を載する車 【側目】まむきに見ない 【俯伏侍取食】いつくばつて給事をする 【倨】横風 【負郭田】城郭を背にしてをる田、土地が肥えて作物のよく出來る處を云ふ 【頃】百歩を一と云

蘇軾被貶

【發錢】青苗錢を出す 【業】なりわいをたすける 【贏得云々】田舍者が青苗錢を借りに都へ來て俄かに金が出來たので、國へ歸るのも忘れ一年中大かたは城中に居て都言葉を覺へた位が能である 【讀書萬

巻云云】萬巻の書を讀んでも、法律書を知らなければ天子を輔佐して蕃弊の様な聖君に仕立て様と思つても、別に方法がない【東海云々】東海が民利を重じ賜ふ名君の御心を知つたならば、何にも作物の出來ぬ海邊の地をば桑畑に換るであらう【豈是云々】昔孔子は齊の國で舜の音樂の詔を聞て肉の味を忘れられたと云ふ事であるが、我れはそれとちがひ此の三月許り鹽の味を知らない【推治】吟味【蟄龍】地にもぐつて居る龍【飛龍御天】龍は天子に譬へ飛龍は九五の位即ち天子の尊あらるゝを云【獄成】裁判が極つてから

曹彬伐江南

【歸順】降參する【匣劒(カフ)】箱入の劒【而下】以下也【不第】落第なり【不報】何等の御沙汰がない【度江廣狹(ハカル)】揚子江の廣さを測量する【浮梁】舟橋【不差尺寸】前に測量したのとみしも差はぬ【以小事大】小國を以て、大國に事ふる也【數百】數百言也【臥榻之側云云】寢室の脇に他人の「いびき」をかいて寢る事を許さふや【捷書】勝報なり【宇縣】天下の事【鋒鏑(テキ)】刀のきつさきや矢さき【閤門(ガウ)】宮中の小門【榜子(ホウ)】名札【伎】功に誇るを伐と云ふ

蘇武

【班(ハン)固】東漢の人前漢書と云へる西漢の歴史を著はせり然れども今此の書に擧げし蘇武の事は漢書の文にあらず乃ち班固の作にあらず後世史家の漢書より略抄せし文なり【單于(ゼンウ)】廣大の意味にて匈奴天子を云ふ【尚可得乎】再び我れに見へて降らんと思ふとも、叶はぬぞと、おどかする【北海上】北海匈奴湖を云ふて亦海と呼ぶ北海は北方の湖水を云ふ【氐(テイ)】乳乃得歸】氐は牝羊なり乳は子を産するなり牝羊が子を産したならば、歸國を許してやる、絶對に出來得ざる事を云ふて、必らず歸さないとの意を示すのである【去草實】くさのみをとりて去は取なり【漢節】漢の天子より使者の證として賜はりしはた○節もと竹にて造れる割り符これども漢時代には一種の旗を以て代へり蘇武が臥しも起ても漢節を持するは漢臣となりて敵に降らざる意を示すのである【節旄(ボウ)盡落】

蘇秦說六國

【從親】連合する【秦甲】秦兵【妻不下紝(ジン)】紝は機織にて即ち「はたい」となり織機を下りて出迎をせず【昆】このかみ兄をり【側目】横目で見て

續雪花圖說

た之部

高山彦九郎傳一

【白晳】いろがしろ〳〵として【綺悍】かい〳〵しくして、きかぬきのたち【廬於冢側三年】廬は倚廬と云ふて喪をつとむる場所、三年の喪をつとめて、つかのそばに、倚廬を構へていつた、支那の古禮に父母死すれば子喪を服すること三年とあり三年とは其の實二十五ケ月なれども概稱して三年と云ふ【饘粥不給】かゆも、十分に食はぬ○饘は濃厚なる糜【健訟】訴訟に力を入れる事【獄胥】獄吏なり【江門】江戸なり【奮袂起】たもとを、ふるうてたつ、憤發してたつを云ふ【嚥以哀甲】はなむけに、きごみを、おくる【板橋】東京より上州へ赴く路【時不闕】ふまないときは【睨曰喝】ねらみてしかりつける、喝は怒りて叱する聲【難當漢】手に餘るおとこ【要人】人をまちうけ、おどかして【行劫】おいはぎをやりた【股栗】ももが、がたくふるへる【能死能死】下の二字は衍文削るべし【刀欄】かたなのつか【喑啞】したうちする、又、うなること【折節】おこないを、かへて

高山彦九郎傳二

【殷殷】さかんなる事【平安】京都【草莽臣正之】在野の臣の正之と云ふ意、孟子に在市曰市井之臣、在野曰草莽之臣とあり【行路聚觀怪笑】路をあるいて居る人が、あつまりみて、ふしぎに思ふて笑ふた、當時帝室衰微、京都の人民と雖も、亦天皇あるを知らざる世なれば、正之の突飛的の遣り方を、きちがいと思ふたのである【一權人專利】一りの權勢ある人が利益を己れ獨りて勝手にする德川家治の時田

沼意次罷を侍みて政治をみたせしを云ふ【公上】おかみ、此では將軍家をさす【山廟門外】上野の德川將軍の靈屋の門前【豎子】こども、一種人をさす【聞者掩耳】きくひとは、みな、おそれて、耳をふさいで、取り合はない【其後弊事悉革】それからのち、弊害の事が、悉く改革になりたり、此れは松平定信が幕府の執政となり、田沼を翻け惡政を除きたるを云ふ【游道】交際【一侯】或る大名、此れは松平定信である【政路】政事をする役目【袴褶】禮服は「パカマ」騎兵の着する袴【饋食】食事の、きうじ、する事【長者】年の長しているかた正之を云ふ【關風敎】世の敎の上に關係致します、德川時代には父兄の讎を打ちたる子弟は官より厚く褒稱することになりいるに罪人同樣の取扱にしては、敎にならぬと云ふ意【在東不得意】關東に居て、目的を遂げない【願勿殊以待】どうぞ、殊にと、待ちつけるよ【剚刃】刃を腹にたて、【摳刀】刀を、腹から、ぬきとる【寄語】てんごんをする【好在】ごきげんてあれよ【三都】東都、江戸、大阪【渠】かれ彼と同じ正之を云ふ【果於殺人】人を殺すに、思ひ切りがよい【蓋有所感於夢寐中爾】夢にみたことに、心が動いて自殺した此れは正之は平生尊王の志ありて王政の復古を圖り居りしも時勢の未可なるより感じて自殺したのであるなれども作者の時は幕府の全盛の世であれば、故らに文筆を回はして右の如く云はれた【先人】なくなりた父のこと、山陽の父頼春水を云ふ【其好義不無所自】正之が義理を好みて篤きは本がないではない南朝忠臣の後裔である故だ【不軌之民】不法の人民、むほんにん

上高宗封事

【按】觀察する　【狎邪】狎は「なれけがる」邪は「よこしま」　【市井】町　【無賴】ならず者　【宰相】姦臣乘槍を指す　【虜】「エビス」金と云ふ國　【天聽】天子の耳　【驟】にはか　【美官】端明殿學士　【誘致】ひつぱつてくる　【以詔諭江南爲名】金の使、江南詔諭使の名義にて來る、江南は宋朝の事　【我】來を指す　【臣妾】君を臣とし后を妾とす　【南面】一一の位に居て　【不拔】拔かうとしても拔けざる程固い　【豺狼】金を指す　【改慮】氣が變つて【捽】髮の毛をりかまへて　【爲虜】虜は「トリコ」　【商鑒】詩經に殷鑒不遠在夏在之世」とあり、殷の善い鑒は遠くもない、前代の夏に在るとのこと○商は殷の一名一口に云へば戒めの手本なり　【犬戎】金を指す　【簒臣】諸侯　【廟社】宗廟と社稷　【赤子】人民の事　【左衽】衣服の左りまへ夷狄の俗　【宰執】宰相執政　【陪臣】またげらい　【冠冕】士大夫の被りもの　【異時】他日　【三尺童子】小さい子供　【怫然】むきになつて　【曾童孺之所羞】童子の方が反て恥に思ふ所　【梓】梓は「アヅサ」天子の棺に用ゆる木、此一一は徽宗帝の柩を指す　【淵聖】一一皇帝とは欽宗之號　【變故】金が宋の汴京を陷したる事　【陷】餌とする　【驗】結果　【情僞】一一は實と僞、此では情の字は附けたりの文句　【甘心】心地よく思ふ　【濟】成すなり　【陵夷】段々衰へる事　【間關】艱苦　【陸梁】つよき事　【僞豫】僞王の劉豫　【萬乘】天子　【穹廬】夷狄は天幕に住し、天幕の上が圓くもつて居る、故に一一と云ふ　【索】つくる　【魯仲連云云】秦が趙を攻めたるとき、魏王大に恐れ新垣衍をして趙に說かしめ秦を尊み帝とせんするや、魯仲連は衍に向ひ若し無道の秦が帝とならば、己は東海を踏して死するのみと云へり　【洶々】盛に起る事　【道】いふ　【腹心】天

子の腹とも心ともなる地位　【石晉】後晉の石敬瑭　【某】此も原文には賊とありしなり　【書】書經　【君奭】一一は篇名、奭は召公の名、君は敬稱、周公召公と共に成王の後見たりし時、召公が周公に對し不滿の事あり、周公因て一一を作る　【鴟鴞】周公が成王の疑を解く爲めに賦して王に送つた詩の名　【陳蔡】云々、秋山の孔子の注を見よ　【顏淵】顏回　【仲由】子路　【匪兕匪虎】秋山の孔子の注を見よ　【油然】喜ばしき顏色の形容　【回使爾多財吾爲爾宰】孔子は顏回を知己とし、汝がどうか金持になるやうにして、我は汝の家のつかさとならうと戲れ玉ひしなり　【管蔡】周公の兄の管叔、弟の蔡叔、二人周公が二心あるを疑ひ兵を擧げ亂をなす　【孟軻】孟子　【韓愈】韓退之　【上下其議論】議論を鬪はす　【對偶聲律之文】是れは受驗文體にして、對偶は對句を用ゐ、一句を四字六字となす者、聲律は對偶に因

【某官】原文に何々と本當の官名が有るを略せし也　【君奭】召公と共に成王の後見たりし時、召公が周公に對し不滿の事あり、周公因て一一を作る　【鴟鴞】周公が成王の疑を解く爲めに賦して王に送つた詩の名　【陳蔡】云々、秋山の孔子の注を見よ　【顏淵】顏回　【仲由】子路　【匪兕匪虎】秋山の孔子の注を見よ　【油然】喜ばしき顏色の形容　【回使爾多財吾爲爾宰】孔子は顏回を知己とし、汝がどうか金持になるやうにして、我は汝の家のつかさとならうと戲れ玉ひしなり　【管蔡】周公の兄の管叔、弟の蔡叔、二人周公が二心あるを疑ひ兵を擧げ亂をなす　【孟軻】孟子　【韓愈】韓退之　【上下其議論】議論を鬪はす　【對偶聲律之文】是れは受驗文體にして、對偶は對句を用ゐ、一句を四字六字となす者、聲律は對偶に因

上梅直講書　梅ハ姓直講ハ國子監直講ト云テ經書ヲ講スル職

【充位】地位にはまつてゐる　【長驅】のりこむ　【樞密院】の屬官、當時胡氏は同院の編輯官たり　【藁街】蠻夷の屋敷町なり

て文調を整ぶるなり【斗升之祿】僅かの扶持【禮部】當時試驗を掌る役所【軾不自意獲在第二】第二人目で及第しやうとは考へなかつた【先容】豫め取りなす【非親舊爲之請屬】親類や故人が御願をしたわけでない【此樂】知己の樂【傳】論語【尤】答める【優】和なり―哉遊哉て「心ノドガ」の意となる【五品】―官五位なり

玉川網魚記

【發軔】車を發す【瞢騰】眠り氣がさめぬ【車轣】車が、がた〳〵【龜亭】龜屋と云へる飯獵を營業とせる家【蹩步】驚の歩むが如くにして行く、ぬき足、さし足【杳靄】遠く横はるかすみ【坡仙前遊】東坡の前赤壁の遊【後遊】後赤壁の遊【所恨非古戰場】東坡の赤壁が、曹孟德が周瑜に苦められし古戰場に比戰すると、玉川は、古戰場でない が殘念だ【歸遺細君】細君は、妻なり遺は、おくること、昔し西漢の東方朔は、天子の詔を待たず、擅に宮中の肉を、持して歸りしを、天子が召して、朔をして、自から責めしめしに、朔は歸而遺二細君一何仁也と云はれた、本文は、其の故事を應用して云ふ

大塔宮南走

【尊雲】大塔宮の法號【重繭】足をいため皮のよれる事【櫟】とち【安得咒師禳病】どうか「マジナイ」の先生に病氣をはらつて貰いたい【大檀越】大だんか【哀愍止宿】あはれに思つて御とめ下さい【擢邪祟】わるい物の怪にたゝられて居る【解羈倦】旅の疲れを慰める【師家常態】あなた方のつね【浹旬】滿十日のこと【促膝】促はすゝめる【月額】さかゆき【稽顙】ぬかつく【若微前言】微なかりせばと讀む○若し前にあゝ云ことを咄し出さなかつたなら【柵絕諸要】矢來を以て方々の要路を立ちきる【極】誅する【欵布】さし出す【梗】ふさがる【搴】拔取る【驗】しるし【諧】かなふ【孤】大塔王の自稱【自盡】自殺【努】はぐ【不爾】しからざれば【旅】もろもろ【一介】一人の使者【神之】神の仕業と思ふ【私貧】ひそかにたのむ

題蘭相如奉璧圖

【眇然】ちつぽけな【不足以維鵝】鵝は力弱き鳥なり、それを、つなぎ、とめることが、できない、至て力の弱きを云ふ【貌不足以加人】もしだしは、人に、すぐれるまでゝない【氣之能伸萬物之上也】英氣が萬物の上に向ふて、伸張する事【志奮於義】志は義理からして奮ひ興る【虎狼之秦】秦は亂暴なる國なれば、虎狼の猛獸に比して云ふ【屈於廉頗】廉頗に對して讓歩する事【悻悻者】孟子に小丈夫を形容して悻々然見レ於二其面一の語ありそれより局量の狹隘なる者を云ふもと悻々は狠り怒る貌【則別有在焉】即ち義から發する英氣が本となる居るのだ【抑末矣】抑は、意なり、意は「オモウ」と訓す末を折きしは末でありて本は義氣であると思なり

ち之部

竹廬記

【麑（カゾ）】獣【泥】なづむ【滌盪（ベウ）】水のひろくはうたる貌【涯涘（ガイアイ）】きし【明日易地】是が非となり、非が是となる【牛酥（ワ）】牛乳の事【歉然（ケン）】もの足らぬ心地

中尊寺

【隧】とんねる【掇】つらぬく○著る事【偃月（イン）】なぎなた【法笏（ホツ）】ずし【扮（フン）】よそほふ【奥】一州【標異】目だつ【甲筐（キヤウ）】具足櫃【所事】主人【顚沛（テンパイ）】こける事○雛壇の時【貌】像などを作つて【蕞爾（サイ）】小さき【褪剝（タイハク）】色がさめ落が取れ【械】國の誤【絶品】此上もなき品【塑（サウ）】土細工する【閫壺】「かきにせめぐ」内輪の爭【崎嶇（ク）】本意は山路などの高びく、世を渡るの困難なる事【首丘】狐死て丘に首を向けると云故事により、死場處の意に用ふ【疫鬼】疫病神【諗（ジン）】おもふ

中東戰紀本末初編叙

【員球（エン）】地球【軿車相依】車のそへ木と、車との關係の如く、互に援けあること、左傳に出づ【斐（ヒ）洲】あふりか【孤掌難鳴】相手がなくては、物にならぬ【俄羅斯（オロス）】露西亞【法】ふらんす【德】どいつ【奥】おうすたり【意】いたり【突厥（トククツ）】とるこ【鷸蚌（イツポウ）相持利歸漁父】鷸は「シギ」の鳥、蚌は「ハマグリ」となり、鷸と蚌と相鬪ひ双方離さずして居る處を、漁人が過ぎて兩者共に取り去りたとの談戰國策に見ゆ、それより、兩者互に鬪ひ他の第三者以外の人双方の利を專有するを云ふ【畛域（シンヨク）之見】内と外との區別

張良

【謝病】病を言ひたて、【辟穀（ヒ）】穀食を止むると、仙人の術を學ぶを云ふ【爲韓報讎】張良は本韓の人、高祖を佐けて秦を滅ぼせしを云ふ【萬戶侯】戶數一萬もある土地を領する諸侯【赤松子】仙人の名【圯】音い、元來土橋なれども、楚國では橋の通稱とす【歐】本文の一は毆の誤○たたきのめす【可教】教へてやれる【如期往】約束通りの時刻に行つた【後何也】なぜをくれた【異日】他日なり【旦】翌朝【太公】周太公望の事【上】高祖を云

黿鼉論（デウソ）

【下可爲者】手の付けられぬもの【不爲之所】これが所をなさず○其法方を立てなければ【不吾信】吾を信ぜずと讀む【朞月】朞は一年を云ふ【亦能收之】自分で始末を付けをうせる【有辭於天下】世の中に對して申譯がある【循循焉】しりごみする【去之】難儀をよける【不之察】之を察せずと讀む【爲之說】本文の點は誤れり、當に之れが說をなすと讀むべし○申譯する事【潰冒（クワイボウ）】潰は散亂する事、冒は逆流する事【已爲難首】大難を發する主唱者である【至安】留守をすることを指す【至危】出征する事を指す【淬礪（サイ）】骨をる事

陳平

【社】土地の神なり【宰】社の事をきりもりする役【分肉】祭りの時、神に供へたる肉を其社に屬する里中の人に分配する事【孺子】若者と云ふ意【典護軍】典はつかさどる、護は監督する事【平雖美如冠玉其中未必有也】冠を玉で飾ると、表は立派なれども、其中は「ガランダウ」である、陳平は夫れと同

じく、美丈夫であるが心中の徳が缺けてをる、諸大將から賂をとる【譲】言語を以て人を責むるを云ふ【能】はたらき【行】みもち【尾生孝巳】尾生は昔し婦人と橋の下に逢ふ事を約束した處、婦人は來なかつたが尾生は正直に待つて居て、水が來ても立ちのかずに橋杭を抱て溺れ死だ人、孝己は昔の孝子の名【敷】實也

陳情表

陳情とは我が志情を述べて陛下へ請願するの意なり作者李密初め三國の時蜀に仕かへ蜀滅びて後に晉帝徴して太子洗馬の官となす時に密の父母早く死し祖母の劉氏密を養育し年既に老ひたるを以て密と相離ることを欲せず是に於て密此の表を上り歸て祖母を養はんことを乞へり帝其の誠を嘉みし婢二人を賜ひ郡縣に命して祖母に供給せしむ後祖母卒し密は漢中守に任ぜらる

【險釁】不安の意、運命の不幸を云ふ【夙遭閔凶】はやくより、あはれ、うきめに、あひ【慈父見背】じひある父には、しなれ【舅奪母志】母の兄弟を舅と云ふ、母は貞節を立てんと思ひしも兄弟が強ひて母を再嫁せしむ【零丁】おちぶれ【孤苦】ひとりもので、くるしむ【伯叔】伯父、叔父【門衰】家門は、もとろへ【祚薄】幸福はうすく【晩有兒息】年とりて始めて、むすこが生れた【期功彊近之親】親族の喪に期、小功、大功あり、期は一年の喪、小功は九ケ月の喪、大功は五ケ月の喪を云ふ、伯父叔父兄弟等は期の喪を服す、出嫁せる姉妹、姉妹等は大功の喪を服す、從兄弟等は小功の喪を服す、彊近はつよくしたしきこと【應門五尺之童】門に出て取次ぎをなす十二三歳の童子【煢々】さびしく【子立】いつぽんだち【形影相弔】たゞ己れ身ばかりで形と影とが互に同情を表するのみである【聖朝】晉の朝廷をさす【前太守臣達】前度には地方長官實、達臣達とは皇帝へ告し上ぐる時は凡て臣下たる者は其の

の名を稱し上に臣の字を冠らするが正式書のき方である【後刺史臣榮】後回は刺史の官の臣顧榮【舉秀才】秀才は當時人を上に推薦する科目の名なり【養供無主】祖母を養ふに主たる者がない【鄙中】官の名【洗馬】天子行啓の時前驅を務むる官【非臣隕首所能報】厚大なる國恩は臣が生命を棄つるも報じきれない【切峻】急切嚴きびしい峻せわしく【責臣逋慢】臣の職務を逃れて怠慢なるを責めらる【催臣上道】郡縣の官吏がせまりて臣を催促して急に道中に就き出發せしむ【急於星火】火花の飛ぶよりも【狼狽】狼と狽と二獸の名、狼前二足長くして後の二足短く狽前の二足短く、後の二足長し、狼は狽なければ立つことを能はず、狽は狼なければ行くこと能はず、若し相離れば進退共に如何ともすることを得ず、故に人の進退に困むを狼狽と云ふ【以孝治天下】孝道を大本として天下を治むる【僞朝】うその朝廷蜀の國を云ふ【郎署】【本圖官達不矜各節】私ふぜいものは、本と官職の早く上達して一身の榮譽をなさんことばかりを計るに過ぎないもので、何にも、ことさらに仕官を御斷りして高尚に構へ名聲や節操を世にはこらうと云ふ考は御座りませぬ○此は李密はもと蜀の臣なれば晉帝が自分に仕へるを厭ふて辭するのであらうと疑はるゝを恐れて、わざと、このやうに云へるなり【過蒙拔擢】まちがつて、多くの人の中から、抽出て召出をかふむる、太子洗馬の官に任ぜらるを云ふ【豈敢盤桓有所希冀】盤桓は進まざる貌、たちもどりすること、なんと、もしきつて、たちもどりをして、此の外別に富貴利達とか高尚なる名譽とかを、釣り取らうなどの希望はない【日薄西山】老人て、さきが短い、一生を一日に喩ふれば祖母の年は夕日の西山に迫るが如く僅に息(イキ)の未だ絶ぬまで云ふ意なり○楊雄の反

離騷に何恐日溝於西山の句あり【氣息奄奄(エンエン)】奄奄は將に絕へんとするなり、いきがた〳〵である

【母孫二人更相爲命】祖母と孫の二人相互に生命をたすける【區區】こゝろせばくして【是臣盡節於陛下之日長】思孝共に大切なることなれども、臣は今年四十四なれば、年未だ老と云ふにあらざれば此の以後陛下に御奉公をして忠節を盡すべきの日は行く末長くある【報劉之日短】祖母劉氏は九十六の高齡なればいつ、たくなるも、知れざれば、劉に養育の恩返しをするの日甚だ短い【烏烏私情】烏烏は烏にて「からす」なり、烏の母餌を其子に與へて飼ひ後に其子餌を母に飼ひ反す、之を反哺と云ふ、蔡邕喪伯父記に烏烏之情誠篇傷痛とあり、翰曰烏烏反哺其母と此にては祖母に受けたる養育の恩義を報じたき心情を云ふ【二州】梁州益州、即ち當時季密の居れる蜀は梁益二州に屬せり【牧伯】地方長官を云ふ【皇天后土】天のかみ、地のかみ、皇后共に君と云へる義なり【生當隕首】此の御恩を報ぜん爲めには生きて居れば首を落しても即ち生命をうちすて、報謝すべし【死當結草】死すれば亡靈となりて國難のある時は戰場に出で、味方を助け敵を破りて報謝すべし○昔し晉に魏武子と云へる大臣に愛妾あり子なし、武子病に罹りし時嗣子の魏顆に遺命して曰く、我死なば、此の婦人を宜く嫁すべしと、其の病急なるに及で又曰く妾を殺して我が葬に殉へよと、武子死す魏顆は其の治命即ち正氣たしかなる時の命に從ふが父の本志なりと云ふて其の妾を他に嫁せり、後ち晉軍秦師と戰ふに及で魏顆は一老人の草を結びて秦の勇士杜回をふせげるを見る、杜回は大力の人なれど老人の結べる草に躓ひて仆れぬ、魏顆遂に杜回を打ち取りて大に秦の師を敗る、後に魏顆夢に一の老人を見る、老人曰く我は彼妾の父なり、君が父武子の治命に從ふて我が女を嫁

せしを以て、故に出て來りて其の恩を報ぜん爲めに杜回を防げりと、此の事春秋左氏傳宣公十五年の文及史記の魏世家に見ゆ此より結草の故事起る死するも靈魂留まりて恩を報ずるを云ふ

忠孝一本

【身體髮膚(フ)、猶不敢毀傷】身は一身、體は手足、髮は毛髮、膚は皮膚なり、不敢毀傷とは、毀ひ傷ることを忍んで爲さゞるなり、孝經に、身體髮膚、不敢毀傷、孝之始也とあり【委吏(イ)】租稅及び出納の雜務を掌るは小吏【乘田】牛羊等を牧畜する小吏、昔し孔子委吏と爲りし時、料量平かに、乘田と爲りし時、蕃蕃息せりと、歷史に見ゆ【苟且(コウシャウ)】かりそめにもせず、必らず職務に注意して勤める【忠孝不全】忠と孝とは、兩全ならず、何れか闕ける【夙夜(シュクヤ)在公】夙は朝(サ)早く、夜は晩遲く、官事に勉強する、在公は、公所にありて

【扶植(ショク)】たすけたてる【綱(カウ)常】三綱五常の道なり、君は臣の綱たり、父は子の綱たり、夫は妻の綱たり、乃ち君臣父子夫婦の道を、三綱と云ふ、仁義禮智信を五常と云ふ、綱は、綱に綱ありて維持するが如く、三者は各々其の道を維持するを、以て名く、常は、永久不變の義なり【冬溫夏淸】冬は溫かにし、夏は淸くして、能く父母に盡くす【殺身成仁】まさかの場合には一身を捨てても、仁道を成し遂ぐる、論語に、志士仁人殺(サイ)身以成仁とあり

徐芝仙出塞詩序

【短後】武人の着ける着物【跡】たづねる【沙磧】すながわら【險巇(キ)】山のけはしくそばだつ貌【剽將】猛將と云ふが如し【喘汗(ゼン)】息がきれ汗が出る【緩輿縱觀】たづなをゆるめて十分に見物す【一往雄健】どこまでも勢がある【瑣屑(サセツ)擯拾(キンシフ)】些

細の事までもとりあつめも【偏饒】ひとへにおほくと讀む【備員史館】修史館の役員の末に連る【排纂】編修

つ之部

月瀬圖卷跋

【疇昔】きのふ【恍然】ゆめまぼろしの貌【玲瓏】ぴかぴかすき透るやうな色【闃寂(ゲキ)】しんとして靜か【諦視】善く目を留めて見る【華嚴(ケゴン)】一經【香(エウ)】深くして暗き貌【夢境】夢て見た所【紅塵】塵が日に映して紅色をなす○俗世界を指す【振衣高岡云々】古語に振衣千仞之岡、濯足萬之里流とあり○浮世の外に出る事【安知北吾所居之幼云々】疎によると、今自分の實際居る所が「マボロシ」て、夢に見た圖齋の方が反て本當の宅であるかもわかちん、又模窓が月瀬へ遊んだのが夢て、余が書くのが本當の境界かも分らぬ

て之部

展喜郤齋師

【我】咎の事　【犒(カウ)】牛を殺して兵士の盛勢をする【竟】境なり　【從之】敵のまだ境に入らぬ内　【否】しからず　【懸磬(ケンケイ)】空虚のこと　【青草】馬を飼ふ草【夾】共になり　【載】載書即ち誓書　【職】つかさどる　【率】したがふ　【保聚】衆を集めて保守す

と之部

戇窩記

【馳譽(チヨ)太過(ハナハダ)】かけ、まはることが、ひどく、すぎる【釣奇】奇矯なる行を求め　【偃蹇(エンケン)】驕傲なり傲強自から肆「ホシイママ」にする様子　【汲(キウ)長孺】汲黯字は長孺　【張子布】張昭字は子布、孫策江東を鎮ずる時師友の禮を以て待遇せり、策の弟權の世に及で嗣直を以て憚かる　【昌言】昌は美なり當なり、正しき言論を云ふ　【瞷其進退】のこ戇人の進と退くとを、うかゞうて　【以爲荼肆】戇人進めば、小人は畏れて恭敬をなし退けば畏れずして專肆をなす　【薑桂之和】薑は乾薑、桂は桂枝、皆ひり〳〵とする味あり以て剛直の風に比す　【斯須】しばらくも　【遇合之術】君臣遇合して相用ゆるの遣り方　【近代】胡元を云ふ　【風厲】風は諷と同じ、さとし、はげます　【潘君伯理甫(ハクンリホ)】潘は姓なり、君は敬稱なり、伯理は字なり、甫は父と同じ、字の下へ付くる辭なり、一説に五十以上の人は字の下に父を付け、以下の人は甫を付けて呼ぶとの説あり　【於其名】戇と云へる名を付けしを見て　【不累乎用舍】世に用ひらるゝと、舍てらるゝとに、ひかされない　【泯然(ニビン)】うづもれて　【事爲(非)】事業行爲なり

唐太宗　一

【龍鳳之姿】天子の相　【天日之表】德が四海を照すやうな趣き　【幾冠】冠は男子二十才にして冠を加へる、幾は近なり二十才近くと云事　【採其語】濟世の世と安民の民とを取り、世民と名づく【傲】尊大の風　【開府置屬】天策府とて、役所を建て、附屬の役員を設く　【褚】音ちよ　【姚】音えう

【最】音さよく 【孔穎達】クアーウダツ」と讀む
【三番】三組交番 【直宿】宿直の事 【轅】いつても 【登瀛州】瀛洲は神山の名○仙人になる事
【補外】外は外官、地方官 【王佐】帝王の輔佐
【經營四方】天下を定むる事 【剖決如流】事務を取り捌くことが少しの滯もない 【吾兒】太宗の事 【決策】兄の建成弟の元吉を取り除きたる事
【四部】一十の書、即ち經書、歷史、諸子、詩文集なり
【聽朝】朝廷で政務をきかるゝ 【内殿】御裏 【前旨往行】古人の言行 【商搉】商は「ハカル」搉は「引」く論議する事 【瀹】油斷 【草味】草は創、昧はくらし、開け初の意、此では天下昏亂の時 【角力而後臣之】力をくらべ、向をまかしてから、始めて自分の臣下とする 【往矣】もう去つてしまつた 【神采】風彩の事 【來之】諫むる者を引寄る

唐太宗 二

【陽怒】怒つた風をして 【番】人夫に使ふ事
【自】自然と 【遣】もとしもの 【商旅】商人や旅人 【刻】剝ぐ事 【賈胡】胡地の商賈人 【有諸】之れありや○さう云ことあるか 【賕】賂の事 【徇】身をしまう 【大寶箴】大寶は天子の位○天子の戒
【不以天下奉一人】天下を天子一人に供しない
【壯】立派にする 【九重】皇居は九門あるを以て一と云 【瑤】美珠 【瑰】赤玉 【八珍】八種の珍味 【惟狂罔念】唯狂者は考へなしに 【丘其糟】而池其酒】糟て丘を築き、酒で池を作る 【汶々察々】溷父醉に出づ 【冕】天子の冠 【旒】冕の前後に垂れたる紐にして、紐は五色の玉を通ず 【黈纊】黃なる綿玉にて冕から兩耳の側に垂れたる者、天子が妄に物事を耳に入れざる爲の具 【故事】例規

【檢察】譴謫や不當を吟味しあふ 【卿曹】汝等なり 【雷同】わけなしに他人の言に附從ふ事 【稷契皐陶】舜の臣 【龍逢比干】殷紂王の諫臣

唐睦不辱使命

【寡人】諸侯の自稱 【其許寡人】まー聞入てもらたい 【大王加惠】有難い思示て 【受地於先王】先祖より傳はつた領地 【不說】說は悅 【不措意也】攻取らうと思はない 【請廣於君】御領地を廣くして上げやうと思ふ 【徒跣】すはだし
【槍】突く 【休祲】吉祥と凶兆 【與臣而將四】私を入れて尊諸葛と四人になる 【伏尸二人】秦王を殺し己も亦死する事 【縞素】喪服 【諭矣】諒解致した 【果】案の通り 【遂】とうとう 【致】おしきつて 【決】どうしても

北史序

【越】一後 【羽】田一 【行間】陣中 【炳耀】かゞやく 【竹帛】古は一一を紙の代に用ゆ 【鈐韜】兵書 【死生不容髮】髮の毛一筋程の間で生死が分かれる 【煥】あきらか 【卓犖】不遇の貌 【論長短】善い惡いを論ずる○そしる事

唐太宗論治道

【廉吏】正廉にして利慾に汚れぬ役人 【野宿】野原に寢ても物を取られぬ故 【刻民】人民をひどい目に逢はして 【賈胡】商賈をしてゐるえびす 【賕】音きゆう、賂なり 【有諸】コレアリヤ)と讀む 【抵法】法律に罹る 【徇】はまりこむ

唐莊宗遇弑

【寢】やや【伶人】音樂師【粉墨(フンボク)】をしろいやきゆづみ【敬新磨】歌は姓、新磨は名【前】すすむ【批】うつ・【理天下云々】理と李とは同音、そこで天子が李天下李天下と二つ重ねて自分の事を呼ばれし故、理天下即ち天下を者むる者は只獨りてあるのに、もう獨りは誰の事を仰せらるゝのか【宮掖(エキ)】奥向【莫敢出氣】氣色にあらはすものはなかつた【納貨展轉】賂を出して段々と手づるにすがる【蠹政(トセイ)】蟲が物を喰破る樣に、政事の害をなすを云ふ【宿將】古い將軍【從馬直】天子の親軍の名【詭辭(キ)】言ひぬける【上章自理】上書して辨駁す【殿】しんがり【旋師】兵を返す

桐葉封弟辯

【成王】周の武王の子【小弱弟】叔虞のこと、唐に封ぜられたるにより唐叔虞と稱す【以時】言ふべき機會に【不中之戲】道に當てはまらない戲【其得爲聖乎】周公は聖人の名あるが故に云ふ【且周公云云】その上周公は王の言葉はどうしても一時のかりそめにしては宜しからんと云ふ點で、どこまでも其言葉に就て之を遣り遂るのであるか【婦寺】婦人や近侍【何若】いかん【設】もし【從容優樂】ゆつたりと樂しみがてら【大中】ごくの中道【必不逢其失而爲之辭】決して成王の過失のあるのを取りなして言譯の語をなすべきでない【馳騁(チシウ)】かけまはさす【急則敗矣】何んでも取り急ぐと失敗する【以此自克】東縛馳驟することはできん【缺(アウ)々】小智慧のある事

讀書法

【謄書】書籍の紙をまくる事【掐(カフ)】爪を立てる【汚穢(オクアイ)】きたなくなりへこむ事【糢糊(ボコ)】是は字がはつきり分らなくなる事【痾瘽(クロウ)】元來病名、せむしなり、此にては「しまがる事【狂塗】無闇に棒などを引く事【馬牛襟裾】牛や馬が人間の着物をつけてゐると同樣【齊整】ちやんと揃つてゐる【部伍行匀(ヒトシ)】部類が續つてゐて列が均しい【秩然】秩序のある貌【齷齪(アクサク)】がたくさ【卽】「たとへ」の意として讀む【亦可云々】此句恐くは誤あり【恰】よろこばす【廉隅】「カド」なり、意氣地と云ふが如し

な之部

楠氏論

【外史氏】作者山陽自から云ふ、外史は、私史と同じ、山陽の日本外史を作るは、官府の命によるにあらず、全く一個人の作なれば、外史と名づけたり、氏は人と云ふ意なり、外史を作りたる人と云ふ心にて云へるなり【攝播】攝津と播磨【所謂櫻井驛】本文の中に載る楠氏父子訣別の地にて、名高き處、故所謂と云ふ【山崎路】山崎街道と云ふ、京都府柱より向日町を經て高槻茨木通り大阪に往來する道なり【不省】きがつかぬ【驛址】宿場のあと【世故】よのなりゆき【道里】街道里程【隨轍改耳】世につれてかはる【低回】低は、徒に作るがよろし、ゆきつ、もどりつするさま【凝立】高くそばだつ。

【臣而未死】臣が、もし、死せざれば、而は管氏而知禮、富而可求の而と同じく、それがもしの意【賊不患不滅】通常なれば不患賊不滅と書く處を倒字法を用ゐしなり【以兵衛尉】一人の兵衛尉の微官ながら【居然】ゐながら【自任】一身に引きうけ【感激値遇】知己の君に出て遇ひたるをありがたく思ひ【以身許國】いのちを、さしだして、國にうけあふ【赤手】空手と同じ、何にも手に持たず【障江河】揚子江黃河の大流をさへぎるを、千寶城にて賊の大軍を防ぎしを云ふ【回天日於既墜】天の日を、既に墜ちてしまうた、あとから、引きかへす、天日は天皇に比す、後醍醐天皇が既に隱岐の國へ御迁座なりたるを、もとの京都を迎へ奉りしを云ふ【一城】千寶城【擒其空虛】賊のあきすを、つきうちて○鎌倉の兵寡きに乘じて攻むるを云ふ【巨魁】賊の大ひなるかしら、北條高時をさす【復辟】辟は君なり君

の位に復び即き玉ふを云ふ【醜酋】酋は首なり【結城】結城親朝【名和】名和長年【擧措】取りはからひかた【殆致掃殄】掃殄は、盡く掃ひたやすこと、尊氏を關西に走らせしを云ふ【以所任新田氏】新田義貞に御依賴になりたる事、即ち官軍總大將の役目【犬羊狐鼠之賊】いぬ、ひつじ、きつね、ねづみの如き穢れたる小さがしき賊、尊氏一流をさす【蹂踐】ふみ、あらす【其臨死戒】櫻井驛父子の訣別を云ふ【又曰】そのうへに、いふには、○上文の對天子曰にかけて又と云ふ【知天下之不可爲】天下の、到底も、救ひきれないことを、知りながら【設心】心のおきかた【雖古大臣何以遠過】昔しの堂々たる大臣が、時の天子より遺命を受け幼少なる主を輔くる心掛けも、此の上一、「遠くすぎこゆることが、あらうか、必らずない、此れ上文以一兵衛尉云々より應りて云ふなり、楠公は微官ながらも、精神のおきかたは堂々たる大臣であるぞ【正統天子】すじめただしき天子南朝の天子を云ふ【彈丸黑子之地】はじきだま又面部のほくろほどのいさゝき土地を云ふ【三朝】後村上長慶後龜山の三朝【擧一門之肝腦】親族一同の肝や腦髓を、のこりなく楠氏一門が皆命をすて【漸盡灰滅】氷のとけつくるが如く、火の灰となり消ゆるが如く、皆盡く跡方なくつきて【莫以加焉】この上はない【不深揆其實】資望大小】官位名望の高と低と實際を、ふかく、見くらべない【亦與當時之見等耳】當時は楠公時代を云ふ、楠公時代公をして、結城名和の輩と比肩せしめたるけんしきと同一である、取るに足らざる論だ【三器】三種の神器、即ち鏡劍璽玉【繫四方望】四方の人望をつなぎとめる【笠置夢兆】後醍醐天皇笠置山中に於てみ玉ひし南木の夢のしるし【南風不競】南の風の勢がぬるきこ

と、左傳に楚の鍾儀の語、此にてに南朝の衰を云ふ
【倶傷共亡】楠氏南朝と共に、やぶれほるぶ【終古】いつまでも【莫恤其勞】楠氏の勤勞を、あはれむものがない【正閏雖殊】正は正統、閏は閏位、即ち年に閏月あるが如く本數に入らざる天子の位、南朝は正統、北朝は閏位て相違はあれども【卒歸於一】はては、一つみもさまつた、後小松帝北朝の天子を以て神器を後龜山帝に受け兩統合するを云ふ【溟鴻號於無窮】窓はてしらす、鴻は大なり鴻號は天子の號なり、天子の大號を、いつまでも、てしらす○韓退之爭臣論の話【使公有知】楠公に死後の靈があらは【與山河竝存】山や河と、いつまでも、ならびにのこりて亡びない【姦雄逸起】北條足利等の姦雄が迭に起りて

に之部

憎蒼蠅賦

【嗟爾爲生】生物として汝をなげく【蠆】蝎【蚩】あぶ【腎】ロばし【不爲人之長不爲人之喜】人に長れられず、何ぞ人に喜ばれざると讀む【眇】小【盃盂】杯や皿【湛凡】まないた【所希秒忽過則難勝】求め希つ所は僅なれど、人の食事する邊を過ぐれば穢しく堪え難く【營々】いったりきたり【華幮】幮はコタルキ――ば飾のある幔【簟】たけむしろ【燠】ぼやぼや【蠅】こんつ【委】だらしなくして【眊】くらも【茫洋】うつとり【一覺】一ねいり【煩歊】あつくるしい【於吾之見殃】吾の方に對しては殃をかける【睚眦】にらむ【攘】かゝぐ【孔子云々】論語によれば孔子曾て魯要に周公を見られたり【髣髴】ほのか【莊生】莊周是も莊子の書に夢に胡蝶となるとあり【蒼頭】僕【丁謦】腰元【顛倒】打たほれる【沽市】共に買ふなり【脯】ちかん【頓足】足ぶみ【王衍】晉の――、清談とて老子の學より出てたる虛無の談を好めり【醯醢】しほからしほ【醯鷄】味噌漬のひしほ【窺覬】のぞく【大蔵】大切の肉【藏稍露於罅隙】物をしまふ場處に、少しにてもすきがある【淋漓】散々【索爾】與の醒むる貌【臧獲】奴婢【止棘之詩】詩經の中に在り、青蠅を讒人に譬へた作【比興】詩經の詩格の名、比は甲の事物を乙の事物に比する作方、興は甲の事物より乙の事物を呼出す作り方

二程先生

【顥】音かふ【頤】音イ【嚴恕】嚴しき中に思い

遺がある【以名節自矯】自ら名譽節操をきたへる【雅有趣(ツネニ)】本生高尚を情操を持つ【悤】窓と同じ【與自家意思一般】草の生へ次第なるは自分が萬物生々の志と同樣【瀟落(シャラク)】さつぱり【光風霽月】雨後の風月【太極圖】無極と太極、並に陰陽五行の妙を圖にしたるもの【斯文】聖人の學【一命】士を謂ふ【濟】益する【新法不合】王安石の建てたる新法に反對したるなり【表叔】母方の叔父【善治(チ)】善い政治【淑諸(チユク)】人の善を見て之を己によくするなり【賓(ボウ)々】見えない形【無所不學】博きを主としてもつた【弃】すてる【玩心高明】高尚精明の事に心を樂しむ【消長】一衰一盛【精於物數】數理計算の事【加一倍法】倍增に推開く遣方、譬へば易の太極が陰陽兩儀を生じ、兩儀が老陽老少陽少陰の四象を生じ、四象が八卦を生ずる如き法【長】ます

【執非其人】執るべき人が執らざれば【人之不特】不特人と云ふべきを倒字法を用ゐしなり、下の贈之不增亦同レ【來襲而不知拒】是非榮辱の物事が、外より來ふてきても、拒き止めるを知らない【聲色】音樂や女色【三尺秋水】秋水は刃劍を云ふ、三尺は、刀の寸尺なり【戰慄(リツ)】がた〳〵ふるへる【其何問敵國哉】敵國の事を云ふまでもなく、一層夫れさへ、右の如くうたへることだ【列聖】御代々の天子さま【光芒】ひかり、はのう【腥羶(セン)之侮】外夷の侮辱、腥羶共に「なまぐさき」こと、因て夷狄を云ふ【藤原氏】藤原鎌足【不然(テ)】若し人を特み膽を磨かされば【安知不爲亂臣賊子之用哉】どれが、君を弑する亂臣、父を弑する賊子、即ち極惡大罪の人達(タチ)に、利用せられないと云ふことが、分かるぞ、必らず利用せられ勝ちになることだ

日本漢學 一

【五經】易、書、詩、春秋、禮の五書を五經と云ふ【大寶】文武天皇の年號【斯文】儒學を云ふ【莫不有學】學は學校なり【貢人】朝廷へ推薦せらるゝ人【律學】法學の事【大炊寮(オホヒ)】宮內省に屬し、春米雜穀を諸司に分給し及諸司の食料を掌る【補於式部(シキブ)】式部省に於て大學生に補入する事【郡司】郡の大領少領、今の郡長の如き役【補國司】國司は國守を云ふ國守が補ふて國學生とする事【朝集使】地方より京都へ公用にて上る役人【辨官】左右ありて、其の長を左大辨右大辨と云ふ、庶事を受付し官內を糺り判し、文案を調製し邦國の朝集等の事を掌る【釋(セキ)奠(テン)】孔子を祭る事【蔚(ウツ)起】さかんに、もこる【延喜】醍醐天皇の年號【天曆】村上天皇の年號【彬(ヒン)々乎】さかんに、〳〵にして【王綱解紐(デウ)】王朝の政が衰へて【保元】崇德天皇の年號【區宇雲擾(ジヤウ)】世界が、みだれて【從事金革(キンカク)】いくさに、力を入れる【晉建一校】一の學校を建てる、此れは下野の足利學校を云しなちんも事實は違がふ【藏(イ)】あつめ、もさむ【綴(ル)流】僧侶なり【一綫(セン)】ひとすぢ【僅賴浮屠氏】佛法家によりて、此は多く京都五山の僧徒を云ふ【投戈講藝】いくさを、やめて、學藝をならふ【林忠】林羅山名は忠【國祭酒】國の學校のかしらやく【信篤(アツ)】鳳岡と號す【遂變僧服種髮(コロモ)】僧侶の衣をかへて、衣冠の服とし髮を剃ることをやめた、是より先き儒者仕官すれば皆、髮を剃り僧形となり、僧衣を衣て法印と稱す、即ち羅山も道春法印と云へるの類なり、然るを信篤に至り建白して之を改め士人の服を服し髮を蓄へ從五位下に敘し大學

日本刀說

說は文章の一體にして、大要は、論と多く異なるなし、文體明辯に、說「解也、述也、解釋義理」而以己意也とあり

頭と稱す【先聖祠】孔子の廟、即ち今の湯島の聖堂
【德川常憲】五代將軍綱吉、常憲公と諡す【大成殿】此の額今現に聖堂に存す、孟子に孔子集大成と云ふる語より取りて殿に名けたり【鳥革翬飛】革は翼なり翬は雉なり鳥の翼を張れるが如く雉の飛ぶが如く立派なる家の構造をいふ、詩經小雅斯干篇に如鳥ノ斯ニ革如翬ノ斯ニ飛とあるより云へるなり【輪奐】家屋の高大美麗なるを云ふ、禮記に晉の趙文子成室張老曰、美哉輪焉奐焉とあり、輪は輪圍高大なり、奐は奐爛衆多なり建築の立派なること

日本漢學 二

【藤原惺】惺窩先生と云ふ【程朱學】宋の程顥程頤朱熹の主張せし學問、世に朱子學と云ふ【陽明之學】明の王守仁、陽明山人と號せし人の唱へし學問【伊藤維禎】仁齋先生と云ふ【講學自樹一幟】學說自から別に一派を立つる事【物茂卿】徂徠先生と云ふ【史漢】漢の司馬遷が著はせる史記と班固が著はせる漢書【指斥宋儒】程朱等を排斥する【漢唐註疏】漢の馬融、鄭玄等の註せる諸經の說を唐の孔穎達等が解釋せる十三經註疏の類、註を解釋せる文を疏と云つ【成一家言】一流義の學說を成立する【詩詞之學】作詩の學【汗牛充棟】書物が多く過ぎて牛に引かすれば汗を流し、家に積めば屋内に充つること、書物の多く有りすぎること

日本漢學 三

【宋明人】宋や明の時代の學者、即ち程朱陽明等を云ふ【黨羽】黨徒羽翼の義にて、味方のこと【爭貢束脩】皆が、吾れ先きにと、束脩を立派に手厚くすること【兼金】善良にして、通常に二倍の價ある金【草茅】民間を云ふ【廣借聲譽】有名の學者を其の藩に招き抱かへて、學問を好むと云ふ評判を博すること【亦得溫飽】溫は、暖に衣ること、飽は腹に十分食ふこと、學者の方でも、亦安樂なる生活ができる【浸淫】次第に、しみ入る事【外舶事起】外國船の事件が出來して、米國渡理嘉永五年に始めて浦賀に來ることを云ふ【皆假借春秋論旨】昔し孔子は當時の王室、周の天子が微弱にして、諸侯驕恣なると、夷狄が侵略して支那が蠶食せらるゝを憂へて、春秋と云へる歴史を作りて、尊王攘夷の大義を明にした、日本の尊王攘夷の論は孔子の春秋の說を假りて利用したのである【西法】西洋の法【當路諸公】政府の大臣【斯文會】細川潤次郎、谷干城其他漢學の各家が創められし漢學研究の學會、今は寥々として振はず

【濫觴】起源と云ふこと【厲禁】嚴しき禁制【教士】宣教師【塗抹】ぬりけす【及是】寶永年間を指す【詢】問ひ尋ぬる【閒歲】一年置き【入覲】來朝と云ふが如し【輒】いつも【沿】引つついて【迭】更る事【推步】天文を測る事【外舶】外國船【當路】當局に同じ【蕃書】外夷の書と云ふ事【逮】をよび【末造】おわりぎわ【翅】楚】拔き出でたる人【資裝】學費旅費【壹意外交】心を外交に專にす【婦職】女子の仕事【蒸々】進む事【日上】日に升ると讀む

日本之西學

の之部

野矢藜園傳

【悃（コン）】まこと　【國典】國學　【藩學】藩立の學校　【逃將安往】にげたとて、まあどこへゆく　【諄々（ジュンジュン）】ねんごろ　【三致意】一方ならず思を込める　【其櫻非驛曰】きみがため、されとおしへて、おのれまづ、あらしにむかふさくらいのさと　【其櫻曰】ゆみやとるみにこそしらめときゝありて、さるをひかりのやまざくらはな　【玉父】祖父　【魁梧（クワイゴ）】大

は之部

白石新井先生傳

【岐嶷（キヨク）】けだかくすぐれる　【頴悟夙成（エイゴシユクセイ）】利口て早くからおとなびる　【幼慧】小どもながらさかしい　【戯劇】しばゐ　【吾門】吾が家門　【給事】小性となつてゐる　【坐父與誅】父が頼直を廢する計畫に關係したと云ふことにまきぞへとなり　【俶儻（テキトウ）】大志ある貌　【封侯】大名　【閻羅（エンラ）】えんま　【丘言】俗諺　【他山】外の山　【尋】八尺をーと曰ふ　【國除】領國を召上げらる　【晏如（アンジヨ）】泰然としてゐる　【閭】里門なり　【先容（センヨウ）】紹介　【釋褐（トクカツ）】褐は賤者の服、仕官する事　【落魄（ラクハク）】おちぶれ　【何國之擇請捨美薦仲通】私はどこの國と云つて別により好を致さんから、私の方をよして仲通を加州へ御推擧下さい　【除封之人】久留里侯を指す　【回路】孔子の門人顔回と子路　【陳蔡之厄（ヤク）】孔子が楚に往かうとせられし時、陳蔡の二國孔子が楚に用られ其盛になるべきを憂ひ、之を妨ぐる爲に兵を發して孔子を圍む、此災難を稱して一一の厄と云ふ　【遺事】昔し物語　【儲副】將家のあとつぎ　【西城】西九　【襲軍職（ソング）】征夷大將軍の職を繼ぐ事　【采地】領分　【歳租】一年の石高　【諏（ハカル）】問ふ　【驛傳供給】宿驛傳馬等種々の設備　【進見饗賜辭見】御目見え、饗應、下され物、御暇乞ひ　【筆話】筆談　【甘盤】殷の高宗の師にして賢人　【四花炙】炙の名　【裨祿（キヤウハウ）】むつぎ　【豐渡駒雅（シユンガ）】肉合ひがたつぷりして、穩かで風致がある　【盛唐】唐の詩を初盛中晩の四期に分つ、盛唐は其中の黄金時代　【頴（ケツ）】頭を下る頭は上る○匹敵する事　【典故】典例故事　【清明】時が清く君が明か　【蘊蓄（ウンチク）】抱負

【鞹斎】ゆりかたまる　【林說蔓論】論說の多數にレて區々なる事　【滋】ますます　【裨】補　【折中】を斷ずるの意○標準とする事

白石先生年譜序

【浮慕】うはつらて慕ふ　【干】關係する　【精氣光怪】精神、氣象、光采、怪異　【其社】白石の著書を刻する社

伯夷頌

【適】合ふなり、はまる事　【第天地亘萬世而不顧者也】天地の廣大なる間に只一人、萬世の久に亘つても只一人、特立獨行、他の是非を顧みん　【昭乎】昭は明白○此句は伯夷の節操の光、日月も陵ぐの意　【峙乎】山の峯を立たる貌　【巍乎】大なる貌　【緦子】紂の腹異の兄　【抱祭器而去之】祭器は宗廟を祭る道具、是は微子が紂の亡ぶるを知り、殷の祀を存ぜんが爲に持つて去れるなり　【繇】よる　【豈有求而爲哉】何も爲めにする所があつてしたわけでない　【彼】伯夷　【雖然云々】聖人は萬世の標準である、伯夷齊は其標準の外に出てゐる、然しながら伯夷叔齊が無かつたなら亂賊が絕えなからう、二人が亂賊を愧ぢしむるの功は偉大である

伯牙絕絃

【峩々】山の高大なる貌　【洋々】水の流るゝ貌　【長】有形の物に係る○短の反　【永】時に係る　【脩】のびのび長い　【曼】或度より長い　【悠】はかるの意　【緩】ゆつたり　【徐】そろそろ　【漫】ゆたゆた　【綽】たつぷり　【寬】くつろぎある

橋本景岳之碑　一

【藤田東湖】名は彪、通稱虎之助、後、誠之進と改む、常陸水戸の藩士、烈公に重用せられ、氣節を以て著はる　【岳武穆】岳飛諡して武穆王と云ふ　【景岳】岳飛を、景慕するより取れり　【緒方洪庵】名は章、關學を、江戸の坪井信道に學び、後ち醫業を大阪に開く、門下英才甚だ衆し　【性理】宋の程頤朱熹等の學說を云ふ、性命義理の論を主張するより、性理の學と云ふ　【仕學竝長】學術と吏務と、一方に偏せずして、並び進むを云ふ　【翕然】盛に合同して　【安政】孝明天皇の年號　【朝旨】天朝の御意　【幕議】幕府の評議　【牴牾】くひちがひする　【溫恭公】德川十三代將軍家定の諡　【一橋黃門】一橋中納言慶喜今の德川公爵、黃門は中納言の異名　【儲貳】ぁとどり　【越侯】越前藩主松平慶永後ち春岳と號す　【幕府親藩】越前藩の祖秀康は東照宮家康の二子、二代將軍秀忠の兄、慶永は又幕府の支族田安家より出て越前を嗣げり　【青蓮院宮】尊融法親王京都青蓮院の門跡たり、後ちに髮を蓄くは〳〵中川宮と稱し、維新後朝彥親王と改め久邇宮と稱す　【鷹司】右大臣鷹司輔熙　【近衞】左大臣近衞忠熙　【三條】內大臣三條實萬　【井伊直弼】近江彥根の藩主、掃部頭と稱す幕府の大老たり　【紀侯】紀州和歌山の藩主、名は慶福後家茂と改む、十四代將軍たり　【尾水士諸侯】尾張中納言德川慶勝、水戸前中納言、德川齊昭、同慶篤、松平土佐守、山內豐信を云ふ　【獲譴幕府】幕府より譴責せられて謹愼或は隱居を命ぜられた　【訊鞫】訊問の事　【抗然】たかたかとして、屈せざる事　【建儲】幕府の儲嗣を建るを云ふ

橋本景岳碑　二

【白晳】しろ〳〵として　【纖妍】やさがたにして　【溫粹】おとなしく、上品なる事　【臨節】大事に差

しかゝり【幹事】物事を引受けては【侃々】剛直なる事【必竭忠曲】ぬけめがない【皆詐心腹】思ふことを、うちあける【川路聖謨】左衛門尉と稱す幕府の旗下近世の名士なり【剴切】適切にて、よく當(ア)て、はまる事【截取】きりとられる【武田耕雲齋】水戸の藩士名は正生、烈公に重用せられ老臣となり伊賀守と稱す、後ち尊王攘夷の說を以て兵を筑波山に擧げ、幕府の爲めに刑せらる【弱冠】二十歳を云ふ、二十曰弱冠とありて、二十歳なれば弱と云ふて、始めて元服するより云ふ【寇準】宋の眞宗時代の名宰相【韓琦】宋の英宗の大宰相【范仲淹】宋の仁宗時代の賢宰相【沈潛】ふかく、もちつきがある【夙達】あらかじめ通達している事【中主】道徳の人主【中興之際】明治維新の時【左提右挈】左にさげ右にてひいて、互に活まげおう事【鴻業】維新の大業を云ふ鴻は大なり【匡益】たゞし、ひきたて【晩節】晩年の行【江戸小塚原】東京千住にあり、幕府時代罪人を埋葬せし處【蘇文忠】唐宋の學者【杉田成卿】名は信梅里と號す【祭粢】粢は神に供ふる穀なり、左傳桓六年に潔粢豊盛とありて註に黍稷を曰粢とあり神饌料を云ふ【天祥大節】文天祥の大なる忠節を云ふ【胸心折】胸は骨の誤、平生より心に推服して居る【土室】獄屋を云ふ【正氣歌】文天祥の作りし正氣歌を云ふ

林子平傳

【削籍】臣籍を除かれた【本藩】仙臺の事【側室】妾【俸】扶持【酬豢】たのしみなれる事【寒素自給】自ら貧しい暮をする【伎倆】てなみ【蕃】をひす【衆願】おとがいを動かす○かむ事○食ふたく感ふ【必也】どうしたらよいと云ふに

【國用】國の費用【瀕海】海岸【以逸征勞】こちらが樂をして居て向のくたびれを待つ【委】放任ずる【張皇】大げさに云ふ【毀棹】絶板する【逍遙】此では世事にかゝづらはぬ意【甲】甲州流【越】越後流【閭】里門【裨】益する事【神風】元寇の時の——を云ふ【行裝】旅裝【椿大】書生の事【鄙野乃爾】そんなに野鄙なのか【廢】禁錮のことを云ふ【東陲】東の國は【鄂處】露國の事【間】ありあり【消遣】氣をはらす【隻歩】一足も

梅谿遊記

【昏黑】日がたつぷり暮れたとき【還】また【併之】花と實とを合せて賣る【伊】伊賀【開謝】ひらくとおつる【虧盈】かくるとみつる【齟齬】くひちがふ【遲】まつ【望】十五日【奈其無月何】その時分月がないのには困る【看花切莫見離披】花を看るなら、成べくさかりを見るな【爛漫】さきみだれた形容【悵々】うらめしい【滿貯酒】酒を一ぱい入れる【負荷】背に負ふたり、肩に荷なつたり○持たせる事【讒】さかづき【甜】あまたるい【醺然】醉つた心持【揮灑】筆書を作る事【小奚】小僕【二更】午後十時【玲瓏透徹】玉のやうに光つて影がすきとほる【鉚】婦人の髪飾に用ゆる具【釵】かんざし【錯落】ばらばら【漾】たゞよはす【簪】ひたす【隱約】うすかすかに【一棹中流】一艘の舟で中流に掉させば

賣柑者言

【煒然】ひかる貌【善藏柑】上手に柑をかこつておも【敗絮】ふるわた【邊豆】神に捧ぐる食器

○瑒は竹で造り、豆は木で造る　【虎符】虎が蹲いてゐるわりふ　【皐比】虎皮　【洸洸】武ばつた形容　【干城】王侯のたてとも城ともなる武士の事　【孫吳之略】孫武吳越の兵略　【戟】高く載く事　【拖】しく　【昂昂乎】勢のよき貌　【伊皐】伊尹皐陽　【斁】やぶる　【糜鹿粟】御藏米をむだにして　【醇醪】よき酒　【東方生】漢の東方朔

馬援評公孫述光武

【蓄】古なじみ　【陛衛】きざはしの前の護衛兵を云ふ　【吐哺】哺は口中にある食物、昔周公が食物を容み下す暇もなく、之を吐き出して賢人に應接したる故事　【邊幅】虚飾、【子陽】公孫述の字なり　【穡】とめむる　【東方】光武を指す　【無下】無は通り越下の如きもの　【岸幘】岸は冠を着ゆず額を露すこと、幘は髪を包む頭巾の如きもの　【陟哉】戦ばこ○陛衛と同じ　【簡易】手がる　【盜名字】帝王杯と稱する事　【恢廓】廣大なり　【同符高祖】高祖とわりふを合せたやうに同じい　【見誠】誠をあらはすと讀む　【闊遠】遠は達の誤り○氣象が大がかい　【文辯】立派の上に、とゞこうりなくゆきとゞく　【卿謂何如高帝】高祖とどちらがそういと考へる　【不如也】高祖に及ばない　【不懌】面白からず思ふ　【反復勝乎】光武の方が却て高祖より勝つてをる樣に思はれる

巴黎斯戰爭

【禁旅】近衛兵なり　【大纛】皇帝旗を云ふ　【名簡】名刺　【連】つらなる　【崇閎】たかく、ひろく　【聲麗】かたく、うるはし　【列肆櫛比】列れる商店は櫛の齒の如く、ならぶ　【麗棟】美麗なる家屋　【崇甍】高き屋根の家　【珠聯璧合】立派に

ならびあつている　【齊歸一律】そろうて、一樣である　【叱嗟立辦】一と息の間に出來あがる　【聯鑣接軫】馬や車をつらねならべて

ひ之部

百科全書序

【極】最終の點　【始印】第一版　【景象】ありさま　【沈酣(カン)】ふける事　【翹企(ケフキ)】のぞみ、くはだてる　【竅要(カン)】竅は「アナ」、骨肉の要處○要點と云ふが如し　【面墻】かきねに向てゐると同じく向の見えざる事

淝(ヒ)水之戰

【投鞭於江可斷其流】馬の鞭を江中に投げ入れば、それで、江の流を斷ち止めらるゝ、軍隊の人數、非常に多ければ、長江の險も、さまで、畏るに足らざるを云ふ　【慕容垂】苻堅に亡ぼされし燕王の一族降りて秦の臣たり　【姚萇(エウヂヤウ)】亦苻堅に亡ぼされし秦王の一族、降りて苻堅に臣たり　【欲乘其釁(キン)】苻堅の失敗に付け込みて、故國を復興せんとの野心がある　【南伐】南方晉を伐つ　【憮然(ブ)】失望の貌　【朱序】前に執はれし晉の臣なり　【風聲鶴唳(カクレイ)】風の吹く聲、鶴の啼き聲

閔損至孝

【閔損(ビンソン)】孔子の高弟なり　【失靭(イン)】靭は「ヒキカハ」「ムナカハ」、牛馬の胸に約して車を引く革なり、失靭は、靭を、とりはなすを云ふ　【不ㇾ自理】自分から辯解しない　【仲由】孔子の弟子　【不ㇾ擇地】土地の便否を、言はず、何れの場でも休息する　【漿(レイクワク)藿之實】あかざ、まめのはを入れてある汁　【萬鍾(バンシヤウ)】六斛四斗を、一鍾と云ふ　【累菌(キン)】しとねを、かさねて　【惰其四支】手足を四支と云ふ、手や足の働らきを、なまけて　【從(ホシイママニス)耳目之欲】從は縱と同じ、「ホシイママ」にすること、耳では美聲を聽くを貪り、目には美色を見るをほしがる勝手氣儘にするを云ふ　【鬪狠(コン)】喧嘩をし、人に逆ふ事　【搉(ソウ)官】官吏となりて、事を取り扱ふに　【戰陳】陳は、陣と同じ戰場を云ふ　【栽及於親】栽は災なり、はざはい

ふ之部

普法戰紀序

【夏少康】夏の世中興の君の名　【師】兵なり　【一成一旅】一成は田地十里、一旅は五百八　【坼(キ)】恐ちくは誤字、坼(キ)の訛ならん歟なり　【法】佛國　【迥(ハルカニ)不相侔】非常に遙ふ○侔は均し　【度於(ハカル)一步不可復西】ほとんど一步も佛國の方へ進めない　【爲雄】傷勢となる　【摧陷剔撻(サイカンテキジヤウ)】向の陣を打碎き向の兵をかり拂ふ　【驟馳電掃(ヘウチサウ)】早風のやうに馳せ電のやうに拂ふ　【鴻功駿烈(コウニ)】鴻は大、駿はすぐれる　【撰】はかる　【世子】太子の事　【郡王】親王の事　【謀主】智謀長　【轉運】輸送なり　【折衝(シヤウ)行陣】突擊遊軍　【僊人(チユ)】衆人と云ふが如し　【宗潢(クワウ)】皇室を謂ふ　【效命(ノクス)】生命を差出す　【効】結果　【捷於影響】影の形に從ひ響の聲に應ずるより速か　【抵】相當する　【粵(エツ)東】廣東以東　【生齒】人口　【押(アウ)】狎の誤なるべし　【連】デンマーク國　【蹶】たはす　【誰何(スヒカ)】答めだて　【曠觀(クワウ)】達觀と云ふが如し　【恍然】さとる貌　【制其死命】急所を取て押へる　【握樞機】樞を握ると云ふが如し　【向者】「サキニ」なり　【廣文】王室證の號なり　【獲我心】自分と同說　【載】はじむるなり　【纖悉(シツ)】詳細なり　【付手民(シユミン)】手民は板木屋○印刷する事　【鈔(セウ)本】寫本なり　【未易(ヤスカラ)才】容易にない所の才　【戕】音たう　【鎗(サウ)】小銃　【咸豐】年號の名　【灼然(シヤク)】あきらか　【旅寄】寄寓する事　【香海】香港と海外　【一星】一年　【菰蘆(コ)】「マコモ」と「アシ」○草莽と云ふが如し　【外事】外國の事　【羈(キ)臣】外國に居る臣民　【濫觴】前に出づ　【足以表見】其人物を世に發表する　【述撰等身】著書が自分の身のたけほど積山ある

【經濟】天下を治る事　【邃(スヰ)】深し　【軼(イツ)群】衆人に過ぎたる　【殊尤】特に秀てたる　【濩落(クワク)】おちぶれる　【荒畑煙雨之鄉(シヤウ)】僻地の事　【偃蹇(ケン)】威張てゐる事　【僻壤遐陬(スウ)】片田舍の地や遠きはて　【物色】探し求むる　【朔漠】こひの沙漠　【滇(テン)】國の訛、雲南なり　【粵(エツ)】廣東　【浙(セツ)】浙江　【閩】福建　【版章】版圖なり　【恢廓】廣濶なる事　【長駕遠馭(キヨ)】遠方を征伐する事　【舛(ソン)】おそづみの菜　【類】皆】おほむねみな　【素】平生なり　【正朔】曆を云ふ　【慍】おそる　【生聚】人口　【絕域】懸け隔りたる國　【徼(ケウ)外】國疆の外　【沛然】水の盛なる貌　【當不河漢斯書】必ず此言を取止めのない事と爲すまい

富川攬勝(ラン)

【甲斐之爲言峽也】甲斐とは、もと言語上より云へば峽と云へる義なり、峽とは山間を中間に流を夾めるを云ふ、乃ち日本語では、峽をカヒと云へるより漢字を假り頃めて甲州の地名に當て甲斐と書くことになれり、其地山國にして峽なればなり　【銳利】とがつて　【浚】さらへる　【灘(タン)】水の急流　【颯(アユ)澤】　【笛薗二水】笛吹川、薗川、　【人煙】人家　【簡(カウ)師】船頭　【觀月橋】　【竹樹蕭洒(シヤ)】竹や樹が、さうぼりとしている　【荒涼】あれなるけしき　【寂寞(セキバク)】物のさびしきこと　【汗漫(カンマン)】水の盛なる貌　【杳(エウ)茫】はるかに、ばあとしている　【鐮柄瀨】　【摩蕩(マトウ)】うち、うごかす　【無人色】人ちしき顏色がない　【巖淵(イハブチ)】　【襯托】とりあはせ　【嫌於幽】幽閑すぎる

撫州顔魯公祠堂記

【皆有大節以死】其の事下文に見ゆ　【楊國忠】楊貴妃の從兄、玄宗用ゐて宰相となせり　【潼關】關の名、長安にあり　【肅宗】玄宗の次ぎの天子　【遷太上皇】太上皇は玄宗を云ふ、玄宗安祿山の亂平きをもて長安に還り興慶宮に居る、李輔國肅宗に奏して上皇帝に不利を謀ると云ひ之を西內に遷す、上皇快々理に願ひ、そのうへ、忠誠なれば　【天寶】玄宗の年號　【久不見兵】久くいくさをみない、天下太平である　【開土門】土門は門の名　【苟順且誠】まことに道　【天下從之矣】天下の人は、それに、從ふことは、きまりている○以上安祿山を伐ちしめ一案を明らかにす　【小人】魚朝恩、李輔國、程元振、元載、盧杞、楊炎等　【天子輾出避之】天子は、そのたびに、京を出て大盜をさける、吐蕃、長安に入り代宗陝州に幸し、姚令言反し德宗奉天に幸し、李懷光反し再び梁州に幸す　【失所】身分の位を失ふても　【若公是也】顔魯公のごときは、即ち上に云へる天下一人の人であるぞ　【不皆合於理】勿を以て宜く道はすべしと奏す、帝乃ち眞卿に詔して往かしむ　【初慚其言】李希烈も初めは眞卿の忠義なる言に對して慙ぢた　【後卒縊公以死】李希烈顔眞卿を降だし曰に從はしめんと欲し百方勸說すれども眞卿屈せず卒に殺さる　【天寶】玄宗の年號

【久不見兵】久くいくさをみない、天下太平である

【開土門】土門は門の名　【苟順且誠】まことに道理に願ひ、そのうへ、忠誠なれば　【天下從之矣】天下の人は、それに、從ふことは、きまりている○以上安祿山を伐ちしめ一案を明らかにす　【小人】魚朝恩、李輔國、程元振、元載、盧杞、楊炎等　【天子輾出避之】天子は、そのたびに、京を出て大盜をさける、吐蕃、長安に入り代宗陝州に幸し、姚令言反し德宗奉天に幸し、李懷光反し再び梁州に幸す　【失所】身分の位を失ふても　【若公是也】顔魯公のごときは、即ち上に云へる天下一人の人であるぞ　【不皆合於理】勿論（モチロン）で、理に合ふていることはあるが、十から十迄が、理に合ふては、いない　【雖中人可勉爲】中等の人でも勉強してできる　【此足以觀公之大也】顔公の大節、一時の能く死する點にあらずして終身自立し死に至るまで悔ゐざる點にあるを云ふ　【伯夷之清】伯夷は事ふべき君にあらざれば事はないと云ふ流儀であるから孟子は伯夷聖之清者也と云はれた

【伊尹之任】伊尹は殷の湯王の宰相、初め未だ湯に仕かへざる前より天下を救ふを以て志となして居たから、孟子は聖之任者也と云はれた、任は天下の事を己れが一身に引き受けること　【孔子之時】孔子は進むべきとは即ち進み、退くべきときは即ち退き、久かるべきときは即ち久しく速かなるべきときは即ち速かにすれば孟子は孔子聖之時者也と云はれた　【古之任者】即ち伊尹をさす　【睠顧（ケン）】したひ、かへりみる、心に未練を、のこすと　【同隱】さけ、かくれ　【以市於世】世間に利名を、釣り求めんとして　【鄙夫不可以事君】いやしく、利欲一方のものとは、相手にして君主に事へることはできない○論語に、鄙夫可與事君也歟與哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣とあり　【殺身以成仁】身も大切なれども、仁も大切と云ふ場合には、むしろ、我が身を殺して仁道をしとげる○論語衛靈公篇に志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁とあり　【至和】仁宗の年號　【聶君厚載】聶は姓、厚載は名、君は敬稱　【林君慥（ザウ）】林は姓慥は名　【嘗爲是邦】顔魯公、かつて撫州を治められた、ことが、あるによりて　【親炙（シヤ）】直切に感化をうける　【非法令所及者】法律や命令で催促しない限りは　【執】捕なり　【弘範】元の都元帥　【左右】弘範の

事【張世傑】宋末の忠臣、官は節度使に至る、崖山に宋の天子を護り兵敗れて水死す【索之固】索求して已まなかつた【一經】一つの經書【落々】大となり【四周星】四年【水漂槨】國家の有樣【風打萍】巳の身に譬ふ【皇恐句】皇惶と同じ東坡惶恐灘を過ぎて、地名惶恐孤臣泣の句あり【零丁云云】東坡の詩に出づ、零丁は危き事【汗青】書籍【皐上】元の天子【捄】救【死有餘罪】死しても罪が盡きぬ位【燕】今の北京【供張】設備【寢處】床にやすむ【南之揖北之跪】南方即ち宋の方では揖が禮、北方即ち元の方では跪が禮、南の揖は北の跪に相當してゐる【可贅跪乎】余計に跪くことを爲すべきでない【抑項】ゑり首をもさへる【盤古】上古【盡吾心爲不救則天命也】不救は不能に同じ【分一死】死ぬのを本分とする【黃冠】野人の服○道士などを云【方外】僧

但道士等を云ふ【不直亡國之大夫可以圖存擧其平生云々】亡國の大夫が生存を圖ると云ふことが道理でない計でなく、それでは平生の守つてゐる道を棄てることになる、其道があるから、自分を彼是用ゐやうとせらるゝのであるが、道を失ふ以上御用になる所はない筈【置吾十人於何地】自分等十人をどうするか分らん○自分等が危險であるとの事【未嘗起草】草稿を立たことはない

文王武王

【西伯】周の文王の事、殷紂王文王を西方諸侯の長とし眼せざる者を討つ事を許せし故に——と稱す○伯は長の義【虞芮】虞國芮國【爭田】田地の分界を爭ふ【如周】如は「ユク」【界】周の疆【畔】【遜畔】遜は讓畔は「アゼ」【長】目上の者【漢南】漢水の南【受命】天より命ぜられた

【上】「ホトリ」邊と云ふ事【卜】龜の甲を灼き、其裂目により吉凶を知る占の仕方なり【麗】雨龍の角なき者【貔】豹に似た猛獸【霸王之佐】霸者や王者の輔佐【子眞是耶】先生こそ本當に其聖人であらう【載】車に載せ【尙父】父の如く「タットブ」意【觀兵】觀は示す、行軍して示威運動をする【盟津】「マウシン」と讀む【自」上復干下】下から上へ上り、又下へ復る【王屋】王の居る所の家根【魄】おちついてゐる【不可】きかず【悛】改心する【木主】木で作つた位牌【叩】引止め【及干戈】兵を動かす【以臣弒君】紂は君、武王は臣【欲兵之】兵は武器、此では殺す事【追尊】死した後より尊號を奉つつて【宗周】本家に對する如く尊び服する【粟】米の皮を殼れる者、此では穀物の意、要するに周の祿を受けざる意味なり【薇】わらび【以暴易暴】紂王は周より暴なり、然れども君を弒するも亦暴なり、武王が紂を亡して天子となるは即ち一一【不知其非】非道である事を自覺しない【神農虞夏】黃帝神農氏や虞や夏の時代の聖君【安適歸矣】どこにようぞ、暴人の治の世故に【于嗟】あゝ【徂矣】死なうぞよ【命之衰矣】天命も最早末てある

文學消人猜疑

【釋然】うちとける【茗醼】茶の會【延】席へとほす【伴接】せったい【雲橫之詩】唐の韓退の詩【曲】典故【匕首】あいくち

蚊對

【天台生】天台は山の名、浙江省台州府にあり、方孝孺は台州府寧海侯城の人天台山に近し因て自から號となす【縞帷】帷は「マク」、ひきまく又ひらどはりと

云ふ、横に引き張りて圓みなす巾なり、精細なる蚊帳は【羅布】を絺と云ふ「ホソヌノ」なり、絺帷は日本の蚊帳の類なる物【持婆】婆は扇なり【適甚】心持が至極よろしい【其音如雷】いびきの高きを云ふ【嚂面】かほを、かむこと【毛髪盡竪】毛や髪が、みなそつとして逆立(サカダツ)なり【腥然】なまぐさき、にほいがする【皆集惲旁】惲は「タレキヌ」又「トバリ」と云ふ、ひど一張りの帳【如蝨】蝨はしらみ大蟣なり【利觜】鋭利なるくちばし【飫腹】腹一杯たべる【充赤】總身が赤く【圓紅】血で圓るく紅色になりて居る【塞帷】帷をもちあげて【防之苟至】苟は誠なり蚊を防禦することが十分に行き屆けば【其烟勃鬱】わらびの烟が、さんかに、こもる【繞牀數匝】數匝は數回なり【天胡産此微物】胡は何と同じ「ナンゾ」と讀む、天は何ぜに此の微小なる蚊の如き物を産んで【啞爾】笑ふ貌唖々をも云ふ、宜唖の唖

は音「ア」となる【覆載之間】天は物を覆ひ地は物を載する故に天地を覆載と云ふ覆載の覆は音「フ」顧覆の覆は音「フク」【二氣絪縕】陰陽の二氣が密に交りて物質を成すこと絪縕は交密の狀なり【賦形】形體を割り付け【受質】性質を受け取りて【麋鹿】麋は大なる鹿【庸猨】禺の屬、猩猴の一種毛柔かれして皮は敷き物となると云ふ【躶身】まるはだか【巨細】大なると細きと【脩短】長きと短きと【高羅而卑網】動物の高き處に居る者は羅(アミ)で取り、卑き處の者は網で取る【山貢而海供】山の動物は貢獻し、海の動物は供呈する【莫逃其命】その生命を逃げて、助かることがない【其食乎物】人が他の動物を食ふ事【猶可言也】異類と、異類が、食ひあうことであるから、まだ一理がある【而後有求爲】それから始めて人に對して己の欲望を求める【同類者】同じ人類を云ふ【吮其膏】そのあぶら

をすゝること【齧其腦】齧は噬なりすゝること、腦は膿漿なり

武昌九曲亭記

【子瞻】作者蘇軾の兄、名は軾即ち蘇東坡の字【陂陁】山勢の斜なる事【浮圖精舍】佛寺なり【櫪】櫟に同じ、くぬぎ【幅巾】一幅の巾にして頭を裹むもの即ち世に云ふ東坡頭巾なり【羊腸九曲】幾度も、曲りて【攓】つまみとる【澗實】澗中にある果實又薪實の類【林卉】林中にある植物

へ之部

卞和（ベンクワ）

【璞（ハク）】未だ人工を施さざる玉　【玉人】玉細工をする人　【相】みわけをする　【刖（ゲツ）】足を斬る刑を刖と云ふ　【題】しなわけ

ほ之部

捕蛇者說

【黑質而白章】地が黑色の處に、白い模樣がある　【盡死】皆枯れる　【腊（サ）】肉ほしにする　【餌（ジ）】藥料　【大風】惡疾の名　【攣踠（レンエン）】手足の曲り　【癘厲（ロウライ）】瘴は頭の腫、厲は癩病　【死肌】血の通はない肉　【三蟲】腹中の虫　【太醫】政府の醫官　【賦】とり立てる　【當其租入】租稅の代にする　【慼（セキ）】いたみ　【若毒之乎】「汝之を毒とする乎」と讀む○汝蛇を取る事をひどく恐ろしい事とする乎　【莅事者】當局者　【更若役復若賦】汝が蛇をとる役を改めて、元の通り租稅を出す事にする　【汪然】「ドツト」と　【生日感】生計が日々切迫する　【瘴】つくす　【頓踣（ボク）】たほる　【呼噓毒厲】毒を含める瘴癘の氣を呼吸し　【藉】もりかさなる　【悍吏】たけだけしい役人　【槩突（キ）】おちこはす　【譁然而駭者】此句の下に「豈獨人而已哉」の句を添へて見るべし　【恟々（シユン）】おつかなびつくり　【缶（フ）】土器で蛇を入れるもの　【弛（チ）然】のびのびして　【食之】之を「ヤシナフ」　【甘食其土之有】土地で出來る物を旨く食ふ　【盡吾齒】齒は齡、一生を送る　【豈若旦旦有是哉】隣鄉の者が日々死を犯す樣な事はない

朋黨論

【黨引】組合引合　【驩兜（クワントウ）】くわんとうと讀む　【元凱（ガイ）】元は善、凱は和　【四凶】共工等四人を云ふ　【皐夔稷契（カウキシヨクセツ）】四人の名、皆が、うきしよくせつ　【黃巾賊】漢靈帝の時張角と云へる者の興したる賊名にて、黃なる頭巾を以て印しとしたる故に此名あり

【此輩清流云々】此者共は自分で清流と云て居るから、一つ濁流に投じてやれとて濁れる黄河の中へ投げ込んだ

本邦漢文沿革　一

【稽】考ふ○しらべる　【墳典】三墳五典と云ふ上古の書○此では只古書、論語千字文等　【創】はじめて　【上宮皇子】聖徳太子　【蓍事】一一記の事　【頎肖相望】並び續く事　【睇儷】對句を並べる文體　【渾厚】むきづて重々しい　【春容大雅】のびのびして迫らずごく正しい　【苟且】俗に云つけたり　【韶護】正しい音樂　【緇徒】僧侶　【天誘其衷】「インスピレーション」也　【奎宿】奎星○文を掌る星　【輩出】むらがり出る一　【草昧】未開のさま　【風靡】草が風に「なびく」やうに　【古文辭】古人の文句を綴り合せて自分の文辭とする體なり　【遜】ゆづる○劣る事　【韓歐】韓退之、歐陽永叔共に古文の正體　【金石文】碑文や銘の事　【宗室】皇族　【兜裘】隱居所の事　【趙高指鹿】趙高は秦の始皇より二世に仕へたる姦臣、鹿を指して馬と云ひ、群臣中鹿と云たる者共を罰し、己の事を彼此言はぬ様にしたる人物　【梁冀】後漢の大將軍　【磷緇】磷は薄き石、緇は黒色、堅き石は磨しても薄くならず、白き者は染ても黒くならずと云論語の語に本づく　【歠醨】薄い酒をすゝりちない○俗物の跡に從ふ事　【孤】そむく　【漁父之誨】屈原が漁父、辭の文章に叙べた誨、即ち前にある齟をすゝる事　【顔子之辭】不容何病は顔子の語なり○世の中の容れて呉れないのは恩ふるに定らないと云ふ事　【伊涉】「これちか」と讀む　【魯隱公故事】左傳に隱公が免裘を作つて隱居せんと云ひたる事　【乾剛之斷】易より出た語○乾は陽の卦、陽の徳は剛健、君を乾とする、そこで君たる者の剛健を決斷を云ふ　【應制】天子の仰せによつて作る詩文を一一と云ふ　【娓々】娓は順ふと云ふ意、娓々と二字續くときは「すらすら」つながる事　【賈董】漢の賈誼董仲舒　【亞】流と云ふに同じ　【鴻臚館】外人接待の處

其二

【眞名】漢字を云ふ　【好女】美人　【鮮衣】はれぎ　【傅華粉】おしろいを附ける　【品藻】批評文學　【世說】書名　【閨情】婦人の情　【郊居】市外に住居する事　【泛】どことなく　【柘】桑の屬　【穡】大きい　【意在筆先】文字より主意が勝つてゐる　【道塗】すぢみち　【級】つぎはぎ　【褐】賤しき所の服　【藍縷】ぼろ　【迴】はるか　【短折】わかじに　【變】一化　【歊濕】ゐりをとりつくらう○敬ふ所の容　【倚天之龍靈】神さまの御陰で　【心折】屈服する事　【棗楡】夕日が一一に在ると云所から晩方の意味、それから晩年と云義になる

奉使倫敦記

【鑄金局】鑄金稅の役所　【欽差大臣】公使　【調出洋】洋行を命ぜらるゝなり　【駐紮】駐在の意　【公司】會社　【約】大凡なり　【可】四日程」四日ぢばかり　【隱約】かすかに　【斗入】細長く突入る　【圖經】地圖の事　【卉】くさ　【西式】西洋風　【俄】露西亞　【馭民】人民を治める　【碧瀾】ピーラン　【法國】佛國　【迤南】南の方にめぐればば　【佛】釋迦　【汊】股なり　【極望】見渡す限り　【漿】汁　【連圓】圓形を連續する　【巨浸】大小なり　【屯煤】石炭を貯藏す　【揶揄】曰でついて潰ける　【機器】機械　【糜】つひやす　【班超】後漢の時の將軍　【掾】屬官　【犬牙】入れ違いに

なつてゐる【綰轂（ワンコク）】結びつける事【蜂窠（クワ）】蜂の巣【碼（バ）童】波止場【童赤】はげて赤色【折計】摸算する

政宗偵羅馬

【貞山（テイサン）】政宗の諡【漂蕩】ただよふ【回翰】返書【宛（アタカモ）有生色】丸で生き生きしてゐる

祭清國合肥李公文

【少荃】鴻章の字【丕】大【倀々（チヤウ）】ゆき所の分らぬ事【髮匪（ヒ）】長髪賊の事【道咸】道光、咸豊〇年號の名【曾文正】曾國藩の諡【從戎】從軍【間關】艱難の事【剿（サウ）】たやす【折衝】前に出づ【會商】會議〇時文の熟字【甲午乙未之役】日清戰爭【曠（クワイ）々】生れながらの聖【區處】處置をつける【支吾撐拄（シヤウシユ）】支吾は差支へる、此では撐柱と同じく「さゝへる意に用ゆ【方張】さかんにならうとする【掣肘（チウ）】肘をひかれ〇干渉さるゝ事【易地而處】位地を取り易へゝグラッドストン、とビスマルクが清國に生れ李が米獨に生れたなら【翩（ヘン）然】神の降臨する貌

む之部

無聲堂記

【皇祖】神武天皇 【三尺】劒を云ふ 【撫軍監國】左傳に太子の職を論じて出曰撫軍居曰監國とあり、乃ち軍に臨むとき撫軍と云ひ、君の出征中留守するを監國と云ふ 【主器承祧】宗廟の御祭を助くることにて儲君の事 【批虛導窾】窾は穴なり、すきまに附け込む事 【祁寒】大寒 【無似】不肖と同じ 【聖訓】教育勅語 【孫子】孫子は支那周代呉の將軍孫武が著はせる兵書 【無聲】孫子虛實篇に、微乎、微乎、至於無形、神乎神乎、至於無聲、故能爲敵之司命の語あり、無聲は、至て靜かにして、聽くべき聲なきを云ふ

め之部

明治孝節錄序

【九天】宮中を天の高きに比して云ふ、小學錯珠に九天は中央鈞天東方蒼天(又曰昊天)東北變天北方玄天西北幽天西方旻天(又曰成天)西南朱天南方炎天東南陽天とあり 【匹婦】匹は獨なり、一婦と云ふが如し 【三軍】昔し周代の軍制天子は六軍、諸侯の大國は三軍、次國は二軍小國は一軍とあり、軍とは一萬二千五百人の數を一軍となす、此より六軍又は三軍を以て軍隊を總括する辭となれり 【達道】何れにも、とはり貫ける道理 【和風】やはらげるかぜ 【慶雲】めでたきかぜ 【惑亨浹洽】誠の道が人の心にしみわたるとき 【六合】上下四方を六合とす 【一家仁一國興仁】此は大學の書にある語なり、ひとつの家が仁德があれば、それに感化されて一國の者が仁德をなそうと奮興する 【一家讓一國興讓】讓はゆづるなり一家が廉潔にして物事をゆづると國民はそれに感化されて、みな讓るやう奮興する此も大學の語なり 【輓近】ちかごろ 【民之秉彝誰不好懿德】詩經大雅の烝民の篇に、民之秉彝、好是懿德とあり、本文此より出づるなり民は人なり、秉は執なり、彝は常なり、秉彝とは、執り守る平常の性質を云ふ、懿は美なり、懿德は美善なる德なり 【孤臣孽子】孤臣は、孤立極なきの臣、孽子は、めかけばらの子、たよりすくなき臣や子と云ふ事 【堯舜帥天下以仁而民從之】堯や舜の聖王は天下の人をひきゐ、みちびくに、仁道を以てして、國民も亦感化されて仁道に從ふて物事をする 【以暴而民從之】暴虐を以て、ひきいみちびき國民も亦感化されて暴虐になる、堯舜以下亦大學中の語 【淑德夙顯】貞淑の御德は、今に始まらず、は

やくより、あらはれ御座る【仰奉至尊】上へ向きては、天皇陛下に御つくしになり【俯育衆妾】下へ臨みては、多くのきさきたちを、御めぐみなさる【聖經】聖人の著はしたる書物【賢傳】賢人の述べられたる書物【明治癸酉】明治六年の事【文學員】官内省文學御用掛【明治孝節錄】明治年間の孝子節婦の事を錄せるに右の如く名けた【閭巷】むらざと【施及億萬人】(シイテ)億萬の多數人民にひきもひたならば【全州金湯】日本全國が皆上に云へる金城湯池の固めとなる【四海慶雲】四海の内が皆な和風慶雲の目出度世界となることは○和風を云はざるは文章四字を以て一句とし全州金湯と對句になさがん爲めに都合上和風の二字を省きしなり

孟嘗君

【庶弟】腹違の弟【質(チ)】人質【使人抵(イタリ)昭王幸姬求解】人を昭王の氣に入りの婦人の所へ遣て救を求めさす【狐白裘】狐の腋の下の白い皮を集めて作つた「かわごろも」【無他裘】もう外には代りがない【狗盜】犬のまねをして賊をする奴【得釋】ゆるされた【發傳】通行券【食頃】しばらくしてなり

木假山記

【蹩(ゲツ)】ひこばへ【拱(ケフ)】兩手で合せ抱つやうの大さ【汨】音こつ、しづむ【湍(クン)急流【激射齧(ケツ)食】ふつかつたり○かみくづしたり【何可勝數】何んぞ擧げて數ふべけん【有數】運があると云ふが如し【魁岸踞肆(カワイガンキヨシ)】大きくして、ひろがれる貌【莊栗】威嚴のある貌【刻峭(コンセウ)】奇拔なる貌【岌(キウ)然(ニ)】高き貌

森田節齋藤井竹外

【噪】かまびすしい【癖好】かたづむ所、すく所【倜儻(テキタウ)】志大なる貌【傲岸】いごつい樣子【辨析秋毫】秋の毛筋程の細い處を區別する【貼(チ)】はりつける【痛改】ひどくなほす【淋漓(サンリ)】盛なる貌【軒昂(カウ)】共にあがる事【潰沫(フンマツ)】つぶき【直】あたる【飄逸脫灑(サイ)】踪跡の常なくして、人柄の俗を離れてある事【不屑吏務(セツ)】役人の仕事をつまらないとする【酣暢】思ふ存分に氣を晴す【長篇大作】古詩を云ふ【瞠(ドウ)目】目をはる【大手筆】大文字と云ふ事【優孟衣冠】楚の優孟と云へる

者、孫叔敖の衣冠を着けて其姿を眞似したるより、似て非なるを云ふ【捧腹】笑ふ貌【連飲】つづけのみ【玉山頽(クツル)】立派な人の大酔せし樣子【辭窮】言葉が困つてきた【筥頭舗(ヘイホ)】かみゆひ所【異志】むほんの志

譯日本皇帝宣戰詔

【納民於平安之軌】人民を平和の區域へ納れる【兢々】つゝしみ【業々】懼る【緬惟(メンイスルニ)】遠く回念するに【成約】條約【西曆一千八百八十二年】成約は訂結の條約○明治十五年朝鮮大院君の亂我が邦朝鮮と條約を訂結せるを指す

夜游孤山記

【湖上】西湖のほとり【輞(モウ)川】地の名、昔し唐の王維の別莊のありし處【家學士】同姓の人を稱するときに、家と云ふ、家學士は、作者の同姓にして、學士の官たりし者なり【七夕】七月七日の夜【萬象澂澈(チョウ)】萬象は、種々の現象、澂は澄と同じ、澈は徹と同じ、すみてすきとほること、水と天が、青々として、物がすみわたるを云ふ【一奚童(クイ)】一人の小僕【放鶴亭】亭の名林和靖が故跡【林處士】宋の林逋、字は君復、隱君子なり、西湖に居ること二十餘年、常に梅花を愛し又鶴を養ふ、妻を娶らず、子なし、自から吾梅を以て妻とし、鶴を子となすと云へり謚して和靖先生と云ふ【沮洳(ショジョ)】しめりている土地【望湖亭】蘇東坡が故跡下方の東坡の詩を望看せよ【陸宣公祠】唐の陸贄字は敬輿、德宗の時の賢宰相、卒して宣公と謚す、有名なる君子なり【林薄(ハク)】薄は草の叢生する處【石闌(ラン)】闌は欄と同し、てすり、【質似(ジ)道】宋の理宗度宗二帝に仕かへ、宰相となり、國政を專にし、奢侈を極め、忠良を殺害し、遂に國家を顚覆するに至る、古今に稀なる姦臣なり【記稱】後樂園記の中に云ふてある【蘇堤】蘇東坡が杭州の長官たりし時、水利の爲めに、湖中に築きし堤防なり、土人之を蘇公堤と

稱す【當時】來賈似道の時を云ふ【赫奕】かゞやき、さかんなること【妖冶】あだ、なめやかなる、すがた、美人を云ふ【蕩爲寒烟】とらけて、さむきかすみとなる【舉其姓名】賈似道の姓名を云ひ出だすと【梵唄】佛經を讀む聲

楊修捷對

【雞肋】にわとりのほね【外曹】下た役【曹娥碑】漢の孝女父を救ふて水中に溺死せし人【齏臼】にらを、つくうす【外孫】自分の女が、嫁いて生みたる子を、外孫と云ふ、故に外孫は、女の子である、女と子の二字を、並ぶるときは、好の字となれり【受辛】受と辛とを並ぶるときは辭の字となる

よ之部

幼學綱要序

【經筵】御講義の席【繼天建極】天則を繼ぎ承けて人の標準を建てる【六經】詩、書、易、禮樂、春秋【彝倫】常倫【華夏】華は文華、夏は大文華の大國【底止】いたり止る【浸漬涵蓄】それにしみこみ養ひたくはれる【習與性成】習慣が天性同樣に出來上る【俛焉】俯す貌【差】たがふ

能不欺而已

【緒記】緖簿へ書附る【反命】仰の通致しましたと云ふ事を申上る【曲從】自分の心を枉げて父に從ふ

吉田矩方 一

【吉田矩方】字は義卿通稱は寅次郎松陰又二十一回猛士と號す安政六年十月國事を以て刑せられ歿す年二十九【韜略】六韜、三略、皆支那兵法の書、因て兵學のことに用ゆ【藩主】長州藩主毛利慶親【孫吳】孫子、吳子、皆兵書なり【頓使七書】光六經【頓は「ニワカ」とよむ、七書は孫子、吳子、司馬法、尉(ウツ)繚子三略六韜李衛公問對の七種兵書を合稱して、武經七書と云ふ、慶長以來明治維新まで兵家必讀の書となせり、六經は易經書經詩經春秋禮樂の六書を云ふ、但樂經は久く亡びて傳はらず、講釋がうまいから、七書をして六經の趣味と抵抗さするとの意なり【米艦】米國の軍艦【浦賀】相摸にあり【佐久間修理】名は啓象山と號す信州松代の藩士【阿部勢州】阿部正弘伊勢守と稱す備後福山の城主にして時に幕府老中の筆頭即ち首座の執政たり【不報】勞州より何等の沙汰もない【九里濱之事】一に久里濱に

作る、相州浦賀の隣地、嘉永六年米國の使節ペルリ、兵艦を率ゐて浦賀に來り、互市を強請す、幕府已むことを得ずして、之を九里濱に館し、その國書を受く、此れ其の事を指して云ふ　【城下之盟】敵軍に城下に迫まられ、已むことを得ずして爲せる盟を云ふ、左傳桓公十二年に、楚伐絞大敗之、爲城下之盟而還とありて、註に城下の盟は、諸侯の深く恥づる所なりとあり、又宣公十五年に、宋の華元の言に敝邑易子而食、析骸而爨、雖然城下之盟、有以國斃、不能從也とありて、國家を亡さるとも、城下の盟をなさざるを衆譽となせり　【俄艦】俄は俄羅斯、露西亞を云ふ　【知彼知己】孫子に、知彼知己百戰不殆カラとありて、敵國の實情を知り、自國の實力も知られねばならぬ　【用間】孫子に見ゆ、間諜を用ゐて、敵情を探求する事　【勗之】勗は、つとめ、はげますの意なり　【揮霍】揮ひ去らしむること、字書に揮手曰揮反手曰霍とあれども、必ちじも拘らず　【扳上】上の句に屬し、一人執手扳上に作るべし、扳は引也攀也、ひき上ぐる事　【加手其頸】手まねして、頸を斬られる狀を示す　【請見解漢文者】當時外國の使節、我が邦漢文を用ゐと聞き、船中の隨行者には、漢文を讀み書きする人を置けり、故に寅次此の請あり　【行李】もと使者を稱する辭なれども、此にては旅中の荷物を云ふ　【引決】自殺のこと　【首實】首ずる事

吉田矩方　二

【何啻鵬鷃於鵬鯤乎】鵬鷃は、甕中に居る醯鷄にて、蠛蠓（サジ）なり、莊子の田子方篇に、乳子の老子を評せる語を載せて、丘之於道、其猶醯鷄與、微夫子之發吾覆也、吾不知天地之全也とありて、醯鷄は甕中の蠛蠓と註せり、松陰自から日本の小天地に生れて、世界の大を知らざればとて、引て自から嘲ふるなり、鵬鯤は、鵬は大鳥の名、鯤は大魚の名、莊子逍遙篇に、北冥有魚其名爲鯤、鯤之大不知其幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背不知其幾千里也とあり、以て米人等が五大洲を周游するの壯に比す、されど文章の

上では、どうして、鷄鶉と鵬鯤との懸隔どころじやない、それよりは、又差異があると云ひしなり　【欽羨】魏書揚播傳にある熟語、その人を欽敬して、之を羨むの意なり　【揮霍】揮ひ去らしむること、字書に揮手曰揮反手曰霍とあれども、必ちじも拘らず　【扳上】上の句に屬し、一人執手扳上に作るべし、扳は引也攀也、ひき上ぐる事　【加手其頸】手まねして、頸を斬られる狀を示す　【請見解漢文者】當時外國の使節、我が邦漢文を用ゐと聞き、船中の隨行者には、漢文を讀み書きする人を置けり、故に寅次此の請あり　【行李】もと使者を稱する辭なれども、此にては旅中の荷物を云ふ　【引決】自殺のこと　【首實】自首ずる事

吉田矩方　三

【與王侯齒】齒は列なり、王侯の貴人同列になる　【繘紲】繘は「クロキナハ」のこと、紲は「ヒキトラフル」こと、昔しは罪人は黒索を以て拘引するより、罪人のことを繘紲と云ふ　【宛轉】ころがる　【鼎鑊】鑊も鼎にして足なき者　【卿童】卯は總角「アゲマキ」の事　【四方之志】男子四方游歷の志　【樊籠之中】樊も籠と同じく、「カゴ」のこと、罪人となりて拘囚せらるゝを、鳥の籠中にありて、自由ならざるに比して云ふ　【慰梧】壯大の事　【貫高所謂】貫高は、趙王張耳の客なり、耳死して、子の敖立て王となる、漢の高祖趙王の宮に幸す、敖之に事ふること甚だ謹む、高祖を殺さんとす、敖聽かず、貫高曰く云々と　【成則歸王】事が成就すれば、其の功は王に差し上げ、自分の功とはしない　【敗則獨身坐】若し事が失敗すれば、其の罪は自分獨り引受けて、外へは迷惑を掛けぬ、以上が貫高の語　【靳辱】侮辱の事　【飽肉鯨鰐】海中に覆